

もしもな世界のラウラさん

キラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもラウラが軍隊で落ちこぼれたまま、立ち直ることができなかつたら。

これは、逃げ場を与えられた少女と、逃げ場の主である少年の物語。

目次

第一部

出会い | 1

心の傷 | 12

求めるもの | 27

呼び方 | 41

学校 | 50

夏祭り | 62

関係 | 75

魔法 | 90

番外編

選択 | 97

織斑千冬の日記 | 107

第二部

入学初日 | 117

期待 | 129

好きなどころ | 140

清算 | 151

下準備 | 165

始まり | 177

あふたー

初デート(前編) | 192

初デート(後編) | 201

第一部

出会い

その少女は、戦うために生まれてきた。戦うために育てられた。少女に家族はいない。遺伝子の結合により作られた、試験体という存在。

生まれながらにして与えられた目標を、彼女は愚直に実行した。それ以外に、彼女が自身の存在を証明できるものはなかったから。日々訓練を重ね、努力を続け、実力を増していく。

自信があった。誇りがあった。自分なら何かを成し遂げられるという、確信に近い感情があった。

やがて彼女は……屑になった。

原因は、事故のようなものだった。

だが、過失がなかったからといって、彼女が能無しになった事実に変わりはない。部隊トップの地位から転がり落ちた彼女を待っていたのは、同僚による侮蔑と嘲笑の数々。もともと無愛想で味方の少女だった彼女は、完全に孤立してしまった。

しかし、それでも彼女は諦めなかった。

栄光を取り戻すために、強くなるために、ただひたすらに精進した。がむしやらに身体を鍛えぬいた。

頑張つて、頑張つて、頑張つて、頑張つて。

ずっとずっとずっと、頑張り続けて、そして。

彼女は、壊れてしまった。

*

ここ1年の間、姉である織斑千冬はほとんど家に帰ってこなかった。それこそ数ヶ月に1回くらいのペースで、しかもちよつとゆつくりしただけでまた出かけていく。

中2の俺は実質ひとり暮らしになったわけだが、周囲の親切な人達

のおかげで不自由な生活を送ることができていた。

千冬姉はどこで何をしているのか教えてくれなかったけど、俺達姉弟が生きるためのお金を稼いでくれていることに間違いはないのだから、俺だつて迷惑かけないようにしなくちゃな、と常日頃思っていた。

そうして迎えた春休み……の、終わりごろ。

突然家に帰ってきた千冬姉は、ひとりの女の子を連れていた。

「お、おかえり。千冬姉」

「ああ、ただいま」

動揺しながらもいつもの言葉を口にした俺と、微笑を浮かべるわが姉。後ろにいる子のことは何も言わない。

スーツ姿の千冬姉とは対照的に、紺のジーパンに白のシャツという簡素な格好。もつとも目を引くのは、左目につけた黒の眼帯。

外国人特有の白い肌に銀色の長髪がよく映えた、顔立ちの整った少女だ。

……でも、可愛いか美人だとか思う前に、俺はどこか薄気味悪さを感じてしまっていた。

なんとというか、生気が感じられないのだ。本当に、人形みたいな子だと思った。

「えっと、その人は？」

「詳しい事情は中に入ってからする。先に結論だけ言っておくと、彼女は今日から家で預かることになった子だ」

「ふーん……って、預かる!？」

想像の斜め上をいく発言に驚かされる。だつてこの子、見た感じ俺と同じ年くらいだぞ？ 中学生という多感な時期に男女がひとつ屋根の下つていうのは……いや、もちろん不埒な真似をするつもりはないけど。

「なんで？ というか千冬姉、どこでこの人と知り合ったんだ？ それ以前に今までどこに」

「そう一度に聞かれても答えられないだろう。まずは家に上げてくれ。彼女も長旅で疲れていることだしな」

「あ、ああ……すまん」

確かに、いつまでも玄関で立ちっぱなしなのは問題だ。あわててお客様用のスリッパを用意し、千冬姉と外人の少女をリビングに通した。

「えつと……」

麦茶、でいいよな？ 白人さんなんて相手したことないからよくわからないぞ。

待たせる方が悪いと考え、コップ3杯分冷たい麦茶をいれて台所から戻る。その間、2人は静かにソファに座っていた。

「どうぞ」

テーブルにコップを置き、俺も椅子を取り出して腰を下ろす。配置的には、千冬姉と女の子が隣同士、テーブルを挟んで向かい側に俺がいるという感じだ。

「……は、はじめまして。織斑一夏です」

落ち着いたところで、とりあえずあいさつを試してみる。虚空を見つめていた彼女は、俺に視線を向けて……それだけだった。

「ラウラ、あいさつをしろ」

千冬姉に言われ、ようやく初めて口を開く。

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

抑揚のない、消え入りそうな声。

表情もそうだが、本当に弱々しい。ただ元気がないとか、そういうレベルじゃないってことは俺にも理解できた。

「気軽にラウラと呼んでやれ」

「……よろしく、ラウラさん」

いきなり下の名前は失礼なんじゃないかと思いつつ、恐る恐る呼んでみる。

けれど大した反応はなく、ラウラさんはただ小さくうなずくだけだった。……改めて見ると、相当美人だな。

緊張した俺は、麦茶を一口含んでから千冬姉に向き直る。

「それで千冬姉。いろいろ説明してくれると助かるんだけど」

「わかっているさ。……廊下に出るぞ」

え、廊下？　ここじゃ駄目なのか。

「ラウラは少し待っている」

「……はい」

立ち上がる千冬姉。どうやら、ラウラさんに聞かせたくない話をするつもりみたいだ。

とにかく事情が気になるので、俺も素直に従った。

千冬姉の後に続き、リビングを出て2階へ。

「お前の部屋、使ってもかまわないか」

「ああ、全然」

俺の部屋まで移動したところで、千冬姉は立ち止まって口を開いた。

「まず、私がこの1年間何をしてきたかについてだが」

淡々と語り始める姉の表情からは、はつきりとした感情は読み取れない。

「ドイツの軍隊の方で、ISに関する指導を行っていた」

「ドイツ……」

どうりで滅多に戻ってこないはずだ。忙しいんだろうとは思っていたが、まさか海外にいたとは。

でも、その場所がドイツという点が引っかけだった。

「それってひよつとして、俺のせいなのか」

「お前が気に病む必要はない。向こうでの生活も、悪いものではなかったからな。今はそれより、今日から加わった居候の話だ」

そう言っつて優しい微笑を見せられると、こつちもそれ以上切り込む気分にはなれなかった。責任を感じているのなら尚更、素直に話を聞くべきだろう。

「ラウラは、私が担当していた部隊の一員だった。つまり、彼女は軍人だ」

「軍人って、俺と同じ年くらいなの？」

「世界中を見れば、そう珍しい事例でもないさ」

「そうなのか……あの子が、軍人」

俺とはまるで別世界の間人だ。武器を扱い、戦いに身を投じる仕事

をやるなんて。

千冬姉は、そんな人達の指導を……ん、待てよ？　今、部隊の一員『だった』って言ったよな。

「ラウラは優秀な隊員だったらしい。だが、不幸が重なって本来の実力が発揮できなくなってしまった。私もできる限りの指導は行つたつもりだが、それでも駄目だった」

苦虫を噛み潰したような顔を見るだけで、千冬姉がそのことを後悔しているのが伝わってくる。

先ほどのラウラさんの雰囲気は、俺の想像する軍人のそれとはあまりにもかけ離れていた。そりゃあ、フリーの時まで常に気を張ってるわけじゃないんだろうけど、それにしたって覇気のなさが異常だ。

「端的に言ってしまうえば、今のラウラは心を病んでいる状態だ。精神病とまでは行かないにしても、な。軍の上層部も彼女に見切りをつけたようで、私が日本に連れて帰ると言っても反対のひとつもしてこなかった」

「つまり、クビになつたつてことか？」

「状況としてはそれに近い」

だから彼女は落ち込んでいるのか。

昔は優秀だったということは、相当な努力をしてきたんだろうし。その職場で落ちこぼれてしまうのは、きつとすごくショックだと思ふ。

「今の彼女には、休養と心のケアが必要だ。そう判断したからこそ、ここへ連れてきた」

「リフレッシュさせるために？」

「そうだ。一度故郷を離れて、軍隊もI Sも関係ない場所で静かに暮らす。あいつには両親もいないし、心の休息のためには家に住まわせるのが打てる手の中では最善だった」

「なるほど……」

だいたいこの事情は理解できた、はずだ。

ラウラさんが何者なのか、どうしてここに住むことになったのか。辛い経験をしたようだけど、わが家で過ごす生活がちよつとでも彼女

の助けになればいいと思う。

「ラウラの前では、極力ISやドイツ軍に関する話は控えてくれ。今はとにかく、ゆっくりとメンタルケアをしていきたい。普通に、ひとりの女子として接してやってくれ」

「わかった。気をつけるよ」

わざわざ俺の部屋で話をしているのも、そういう理由があるからか。マイナスの感情を刺激しないため、という配慮だろう。

俺が二つ返事でうなずくと、千冬姉は申し訳なさそうな表情になる。

「週が明ければ、私はまた家を空けなければならなくなる」

「またドイツに行くのか？」

「あの国での仕事はもう終わった。今度は別件だ」

「それは……俺には話せないこと？」

「……いや。お前にラウラを任せることになるのに、説明しないのは筋が通らない。私はこの春から、IS学園で教師の職に就くことになった」

IS学園。所在地は日本だが、世界中からISについて学びたい人間が集まる場所だ。ISを動かせるのは女性だけだから、必然的に生徒は全員女子ということになる。

「今度は国内だが、それでも仕事の都合上泊まり込みになる日は多いだろう。最低、週末には家に帰るつもりだが」

「そうか。じゃあ千冬姉が家にいない間は、俺がちゃんとラウラさんを見とくよ」

「……すまないな」

千冬姉の声のトーンが落ちる。自分で連れ帰っておいて、俺を頼ってしまふことに負い目を感じているんだと思う。そんなこと、気にする必要なんてないのに。

「姉弟なんだから、困ったときはお互い様だろ？」

女手ひとりで俺のぶんの生活費まで稼いでるんだ。ちよつとくらいわがまま言ったって、何も問題ない。

「そうか、そうだったな。ありがとう、一夏」

申し訳なさげな態度は変わらなかったけど、それでも千冬姉は笑ってくれた。それを見ると、俺も元氣とやる気がみなぎってくる。

千冬姉のいない日は同年代の女の子と2人きりとか、そういうことでテンパらないよう頑張らなきゃな。

*

リビングに戻って、ラウラさんに家の案内をしていたら夕方になっていた。

千冬姉より俺の方が家にいる時間が長いので、どこに何があるとか説明したのはほとんど俺だった。

「それじゃ改めて、これからよろしく」

「……ああ。よろしく、頼む」

控えめな声で答えるラウラさんの視線は、俺に向けられているようでそうでないような気もした。

できるだけ早く打ち解けられればいいんだけどな。

その後は、陽も沈んだし腹も減ったというわけで夕食にすることに。飯を作る時間がなかったので、千冬姉と相談して今日は出前でピザをとることに。ラウラさんはヨーロッパの人だし、いきなり和食にするよりはこういう食べ物の方がいいだろう。

「一通り見て回ったが、どの部屋もきれいにしていたようだな」

「まあ、家主のいない間は家を預かってる身だし」

各々ピザを口に運びながら、久しぶりの姉弟の会話に興じる。

「家を空けている私の代わりに、きちんと掃除してくれたということか」

「いや、というか千冬姉は家にいる時も基本散らかすだけ——」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

ちよつと怖い笑顔を浮かべられた。千冬姉が典型的な『片付けられない』人間なのは事実だと思っただけどなあ。

「俺のクラスメイトの五反田弾って覚えてる？ この前家に呼んだ時

に会ったと思うんだけど」

「む……ああ、あの食堂のところの子供だな」

「そうそう。あいつがこの前さ」

千冬姉が帰ってきたら話そうと思っていたことはたくさんあるの
で、夕食の間の話題には全然困らなかつた。

基本的に俺が話が振る形だが、千冬姉もちゃんと聞いたうえで反応
をしてくれるので、話しやすいし楽しかつた。

「……………」

けれど、その間ラウラさんがほぼずっと無言だつたのは気になつ
た。

千冬姉が何度か話しかけていたけど、曖昧な返事しかしていなかつ
たし。

明日は日曜日で、明後日になれば新学期が始まる。千冬姉は家を空
けることになるから、食卓も2人で囲むことになる。

会話がなない食事っていうのは味気ないから、なんとかまともに話せ
るようになりたいものである。

……というか、春休みもう終わるのか。いよいよ俺も中3だし、勉
強にも真面目に取りかからないとな。

そんなことを頭の中で考えているうちに、同居人が増えてからの最
初の1日は終わってしまったのだった。

*

日曜日は新学期の準備で慌ただしい時間を過ごし、そして迎えた月
曜日。

「……………」

「……………」

千冬姉大変だ、楽しい夕食の時間が氷点下だ。

「……………」えっと、今日は和食にしたんだけど。口に合わないのとか、ある
か？」

「……………」いや」

朝食の時は千冬姉がいたので普通に場が持っていたのだが、2人きりになると本気で会話が續かない。俺が何か話しかけても最低限の最低限といった返事しか来ないのだ。

まあ、無視されるよりはずっといいから、最悪の状態とは言わないけど。

「そ、そういうえば、ラウラさん日本語上手だよな。昔から勉強してたとか?」

テレビの音で寂しさをごまかしているような悲しい状況を打破するべく、俺は諦めずに挑戦を続ける。

「……日本は最初のISを作った国だからな。都合がいいということ、我々IS部隊の人間は強制的に日本語を学習させられていた」

「あー、なるほど」

しまった。何気なく尋ねたことが、軍隊に関する内容につながってしまった。ラウラさんの感情を下手に刺激しないように、千冬姉に釘を刺されていたつてのに。

一見する限りでは、特に彼女の様子に変化は見られないけど……。「……まさか、こんな逃げのような形で役に立つとは思わなかったがな」

いや、やっぱりダメージ受けてる。思いっきりため息ついてるし。

「ご、ごめん。嫌なこと、思い出させた」

謝罪の言葉に反応せず、味噌汁をすするラウラさん。怒らせてしまっただろうか。

どうしようかと考えていると、器を食卓に置いた彼女が小さな声でつぶやいた。

「……私に、気を遣う必要はない」

うつむいているため、彼女の表情はうかがえない。だから俺は、彼女がどういう気持ちで今の言葉を発したのか、いまいち測りきれない。

どう答えればいいのかわからず黙っていると、バラエティ番組の芸人の笑い声がやけに響くように感じられた。

*

気を遣うなど言われても、やっぱりいろいろ考えてしまうのは止められないわけで。

「……………」

同居生活が始まって2週間。食事と風呂の時間以外、ラウラさんはほとんど自分の部屋から出てこない。俺が学校に行っている間も、おそらく同じだろう。

夕食後、たまに俺の方から引き止めて一緒にテレビを見たこともある。だが、どんな番組のどんなシーンを見ても、彼女の表情はほとんど変わらなかった。せいぜい、偶然ドイツ関連のニュースが流れた時にうつむくくらいである。

つまり、彼女には何ひとつ楽しめるものがないのだ。

「ぶっ……………」

そこを解決しようと、本日俺はレンタルビデオ店で個人的に一押しギャグ映画を借りてきた。ウィットなジョークや斜め上の展開に、きつとラウラさんもクスリと笑ってくれると考えたのだ。

「あはは、なんでここでそうなるんだよー！」

「……………」

「ハハハッ……………はあ」

しかし悲しいかな、ウケているのは俺だけだった。ラウラさんは一度も嘖き出すことなく、いつも通り感情を表に出さずに画面を見つめていた。……………というかむしろ、いつも以上に目が死んでないか？ そんなに駄目だったかな。

「むう」

ドイツと日本じゃ笑いの感性に差があるのかもしれない。

でもよく考えてみたら、俺はそもそも千冬姉や弾といった日本人とも若干センスがずれていたような気もする。俺が面白いギャグ考えるとつまらんこと言うなってすぐにツッコまれるし。きつと時代が俺に追いついていないんだろう。

……………まあ、俺自身のことは後で考察することとして。

「ラウラさん。喉乾かないか？ ジュースあるんだけど」

「……いや、いい」

「そっか」

心に傷を抱えた女の子に、何をしてあげられるか。

それを考えるのが、今の俺の仕事だ。

心の傷

5月になった。

ゴールドデンウィークに突入したが、千冬姉は相変わらず忙しいらしく帰宅予定はなし。

「ラウラさん。ちょっといいか」

俺と彼女の奇妙な同居生活が始まって、1ヶ月。

だというのに、変化らしい変化は何ひとつとしてなかった。

形だけのコミュニケーションしかない今の状態を、果たして同居と言っているものか。

土日に帰ってくる千冬姉は、家にいる間はよく彼女の部屋を訪れている。どんな話をしているのだろうか。

「今から買い物行くんだけど、よかつたら一緒に来ない?」

ラウラさんの部屋の前に立ち、中へ向かって声をかける。

今さら気づいたのだが、彼女はおそらくこの家に来てから一度も外出していない。

おそらく、とつけたのは、俺が学校に行っている間にもしかしたら外に出ている可能性があるからだが……出かけた形跡とか見た覚えがないし、多分1日中引きこもっているはず。

というわけで、気分転換に外の空気を吸うのはどうかと思ったわけだ。

「結構量が多いから、荷物持ちがいてくれると助かるんだけど」

適当に理由をつけて呼びかける。

少し待っていると、ドアがゆっくり開いてラウラさんが現れた。

ジーパンにシャツと、今日も簡素な格好だ。

「……わかった」

「いいのか?」

「……衣食住を負担してもらっているから、荷物持ちくらいは」
外に出たいとかではなく、義務感から了承してくれたらしい。

まあ、今はそれでいいんだが。

「じゃあ、行こうか」

準備を10分ほどで終えて、俺達は家を出た。

スーパーで食材を買うのと、あとは電気屋で電球とかを補充する予定である。

「ついでだから、軽くこの辺の案内でもしようか」

あくまでついで、という風な態度を装って、俺はラウラさんにあれこれと説明をした。

あそこのパン屋のカレーパンはうまいとか、あの本屋はちよつと立ち読みしただけで店主が咳払いしにやって来るとか。

「……………」

俺が話している間、彼女はただ黙っているだけだった。話を聞いているかどうかもわからないが、他にやることもないので俺は口を動かさず続ける。

「で、そこにあるのが」

「あれ、一夏じゃねーか」

商店街近くまでやって来たところで、前方から見知った顔の男が。

「弾。奇遇だな」

「おう、ちょうどゲーム買いに来てて…………うおっ」

クラスメイトで男友達の五反田弾は、俺の横に視線をやると突如のけぞった。

「そ、そこの麗しい女性は、いったい誰？」

「ああ」

どうやらラウラさんを見て驚いていたらしい。そりゃあ、俺がいきなり隣に外人さん連れて現れたら面食らうのも当然か。

「この人はラウラ・ボーデヴィツヒさん。事情は省略するけど、今俺の家に住んでるんだ」

「はあっ!? 住んでるってお前、お姉さん週末にしか帰らないんだろ? それ実質」

「あー、その辺は大丈夫だ。なんにも起きてないし、そういう関係でもないから」

弾の勘違いを早々に解いておく。そんな目で見られると、ラウラさんの方もいい気分ではないだろうから。

「ラウラさん。こいつは俺のクラスメイトの五反田弾っていうんだ」
「どうもはじめまして。一夏なんて放っておいて俺と遊びませんか」
「おい」

いきなりナンパを始めるな。この人はそんなにノリ軽くないぞ。

「……………」

案の定、弾があれこれ気を引こうとしても無反応を貫くラウラさん。だんだん視線が冷たくなっているのは気のせいか、はたまた事実なのか。

「……………じゃあ一夏、またな」

逃げたな、あいつ。

ナンパを諦めた弾は、ゲームソフトが入っているらしい袋を片手に走り去っていった。

「すまん。友達との話に付き合わせちゃって」

「……………いや」

気にするな、ということらしい。彼女の返事は基本短いので、時々意図が読み取れない場合がある。今回ののはわかりやすいけど。

「もうすぐスーパーだから」

その後も街並みを適当に案内しながら、目的の品を購入して無事帰宅した。

その間、ラウラさんはいつも通りほとんど無言。日本の風景に興味を抱いている様子もまったくなかった。

どうやら、俺の作戦は今回も失敗に終わったようだ。

*

「やっぱり条件的には藍越が一番だよな」

中3と言えば高校受験。普通の公立中学に通う俺も当然例外ではなく、こうして夜に志望校決めのための情報集めをネットでやっている。

重視すべきポイントは、学費と就職率。その点では、この藍越学園は俺の希望にはぴったり当てはまっていた。

私立高校だが学費は安く、地元企業への就職がしやすいらしい。地理的にも家からそう遠くはないし、まさに理想的だ。

唯一問題点を挙げるとすれば、競争率が高いがゆえの偏差値の高さ。俺の学力で入試に合格できるかどうかは、当然だけどこれからの努力次第だろう。絶対無理、とまではいかないはずだ。

「もうこんな時間か」

今日は大ヒットを記録した感動映画が地上波初放送だったよな。せっかくだからラウラさんと一緒に見よう。

「ラウラさん。映画見ないか？ 評判いいやつらしいんだけど」

……待てよ。映画見ないかと誘っても十中八九断られるよな。彼女を部屋から出すためには、もうちょっと強引に誘うか、もっと思い理由を見つけなければ。

なんて考えていると、意外にもラウラさんはすぐにドアを開けて廊下に出てきた。

「もうすぐ始まるから、テレビに——」

「……来い」

「へ？」

次の瞬間、俺は腕をつかまれラウラさんの部屋に引きずり込まれていた。

必要最低限の家具しか置かれていない、質素な空間。彼女が住むことになって急遽用意したもので、致し方ないと言えばそれまでだが。

ただ、生活感といったものまで感じられないのは気になる。

「……座れ」

ベッドを指さすラウラさん。女の子の寝る場所に座ることには抵抗があったのだが、彼女の有無を言わさぬ視線に逆らえず、素直に腰を下ろした。

初めて見る、彼女の意思のこもった瞳だった。

「えっと、急にどうしたんだ？」

俺の隣に腰かけた彼女に対して、困惑気味に尋ねる。怒っているのか、あるいは別の感情を抱いているのか、さっぱりわからない。

「……なぜ、私にそこまで気を遣う？」

「え？」

「聞いたのだろう。私のことを」

今までよりもはつきりとした声で、ラウラさんはそんなことを尋ねてきた。

気を遣う。前にも聞いたフレーズだ。

「無理に接しようとする必要はない。私は競争に負けた、ただの落ちこぼれなのだから」

「そんな……昔は優秀だったんだろ？ 実力が出せなくなったのは、不幸があつたせいだつて」

「確かに、不慮の事故があつたのは事実だ」

自らを卑下するのを止めようとする俺に対し、彼女は溜めこんでいたものを吐き出すかのように言葉を並べたてていく。

その表情はどこまでも暗く、まるですべてを諦めてしまったかのよう。

「脳への視覚信号伝達の速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化。それを目的とした肉眼へのナノマシン移植処理で、左目に不具合が起きた。それが原因で、私は満足な戦闘が行えなくなつた」

眼帯で左目を隠しているのは、そういう事情があつたからか。あの下は、いったいどうなっているのだろう。

「だが、それでも這い上がる機会があつた。教官の教えが優秀だったからだ」

「教官って、千冬姉のことか」

ラウラさんは小さくうなずき、自嘲気味に笑った。

「確かに、優秀だったのだ。私と同じく指導を受けていた人間は、加速度的に実力を伸ばしていったのだから」

次の言葉が、なんとなく予想できてしまう。

「……私は駄目だった。教官の教えを請うてなお、いつまでも停滞したままだった」

「ラウラさん……」

「結局、私は無能だったということだ。ゆえにすべてを失い、こうして異国の地で何をするでもなく無意味な日々を過ごすことになった。……価値のない、ただの出来損ないだ。だから必要以上に関わるな」
彼女がどれだけ辛い経験をしてきたか、その一端を知った俺は。

それでもやはり、何かを言わずにはいられなかった。

「価値がないなんて、そんなこと言うなよ。俺だって、普通に毎日を過ごしているだけの中学生だ。何かで優秀な成績を残せたわけでもないし、特別なものを持っているわけでもない。そんな俺でも、元気に生きられるんだから」

「……馬鹿を言うな。お前と私は、違う」

徐々にだが、彼女の声が大きくなっていく。

「お前には、姉がいる。友がいる。だが、私には何も無い。肉親も、友も、心の拠りどころも、何もかも……!」

険しい顔つきは、はつきりと彼女の怒りを表していた。これも、俺が初めて見るものだ。

「訓練が、実戦が、成果を上げることがすべてだった。そのために生まれ、そのために生きてきた。だというのに……たった一度の事故で、すべてが奪われた!」

もう、叫んでいると言っている。

これが彼女の、ラウラ・ボーデヴィツヒの本当の姿。

無感情な態度の奥に隠れていたものが、俺の与えた刺激によって流れ出したのだ。

「誰よりも優秀でいたはずなのに。失敗はないと言っていたではないか……っ!」

不運な出来事から立ち直れなかった自分自身を卑下しているのは事実なのだろう。

けれど同時に、彼女は事故が起きたことそのものを受け入れられていないんだ。

今まで積み上げてきたものが一瞬で崩れ去ると考えれば、俺にもそれがどれだけ悲惨なものが少しは理解できる。

……だけどそれは、あくまで少しだけだ。ラウラさんの気持ちを知

るには、俺ではあまりに人生の経験が不足しすぎている。そこまで圧倒的な挫折を、俺は想像できないから。

「お前にわかるというのか。私の惨めな思いが」

なら、俺は彼女の言葉にどう答えるべきなのか。

頭の中で考えて、考えて。

「俺は」

睨みつけてくる彼女の目つきに負けないよう、しっかりと視線を固定する。

「わかるかって聞かれたら……全部は、無理だ。辛い思いをしたんだなってことくらいしか、わからない」

「……なら、余計な口を挟むな」

「でも、そういうわけにもいかないんだよ！」

俺がいきなり声を張り上げたので、ラウラさんの肩がびくりと震えた。

今できることといえば、素直な気持ちを思い切りぶつけることのみ。

「っ……なぜだ。教官に頼まれてもしたか？」

「それだけじゃない。俺自身が、これ以上ラウラさんに暗い顔してほしくないんだよ。しんどい思いして、報われなくて、それで終わっちゃまって立ち直れないままなんて、悲しいだろ」

俺と同じ年の女の子がこんな状況に陥ってるなんて、それはとても

「……………」

再び視線を下げてうつむくラウラさん。

俺の気持ちだが、少しでも彼女に伝われば。

心臓の鼓動がやけに騒がしく感じられる中、俺は彼女の返事を待つ。

「……………そうか」

やがて、ゆっくりと彼女が顔を上げる。

「出て行け」

だが、その表情は俺が望んだものとは真逆だった。

氷のように冷たい視線が、拒絶の感情をはっきりと表している。先ほどまでの怒りに染まった顔つきはない。ただ単純に、冷めていた。

「出て行け。もうお前と話すことはない」

静かにそう言っただけなのに、恐ろしいほどの圧迫感を感じた。

逆らうという選択肢は、浮かばない。

「わ、わかった」

立ち上がり、逃げるようにしてドアへ向かう。

廊下へ出る瞬間、背後から消え入るようなつぶやきが耳に入ってきた。

「…………お前も、あいつらと同じだ」

*

千冬姉大変だ、楽しい夕食の時間が絶対零度だ。

あの日以来、ラウラさんの俺に対する態度が明らかに変わった。当然、悪い方向へ。

以前の彼女は、自分から口を開くことはないものの、こっちが話しかければ最低限の返事はしてくれた。つまり、評価はプラスマイナスゼロ。

で、今は。

「あ、あのー」

「……………」

完全無視を決め込まれてしまっている。食事中も目を合わせてくれないし、嫌われてしまっているのは間違いない。

原因はもちろん、あの時の会話にあるんだろうけど…………何が彼女を怒らせてしまったのか、はつきりとはわからないのだ。

あからさまに失礼なことを言ったつもりはない。俺自身の、素直な気持ちを伝えただけのはず。

そんな風に悩んで5日経ったが、改善の兆しはまったく見えず。途中週末を挟んだのだが、千冬姉はどうしても戻れない用事ができたと

のことで帰ってこなかった。

千冬姉には、ラウラさんとぎくしゃくしていることについては話していない。今は仕事が忙しいみたいだし、次に家に帰ってきた時に伝えようと考えたためだ。

……とりあえず、今日も学校終わったら早めに家に帰ろう。ラウラさんとの関係をなんとかする方法を考えなきゃな。

「とっていたのに、なんで俺は弾の家に誘拐されてるのでしょうか」「最近付き合いが悪いから」

「尋問しようかと思って」

部屋の真ん中で正座させられる俺。

それを取り囲む男2人は、クラスメイトの五反田弾、そして御手洗数馬であった。

「あー……そういえば、最近遊べてなかったよな」

「聞いたか弾。こいつ今そういえばとか言ったぞ。俺達の友情というものが頭から抜け落ちていたらしい」

「やっぱりあの白人の美少女とよろしくやってんのか！ 毎日早々に帰宅してイチャコラやってんのか！」

「うわ、やめろって」

弾に胸倉をつかまれてゆっさゆっさ揺すられる。ここ1ヶ月ラウラさんにかかりきりで、友達付き合いってやつを確かに忘れてしまっていた。

「っーか普通に考えておかしいよ？ なんで思春期の男女がひとつ屋根の下で暮らしてるん？」

「羨ましくて殴りたくなるくらいだぞ。俺がじやじや馬な妹に手を焼いている間、お前は女の子と仲良くしてるなんてよ」

「妹も女の子だろ」

「いや、俺は妹という存在を女とは認めない。あれはなんていうか、別の生命体だ」

弾にはひとつ年下の妹がいる。俺も何度か会ったことがあり、可愛らしくていい子だと思うのだが、どうも兄貴はそう思っていないらしい。

「まあ、弾の妹さんの話は置いて。実際のところ、どうなん？ その居候の子との関係は」

ぶつぶつと妹への愚痴を垂れだした弾を放置し、数馬が俺に尋ねてくる。笑顔なのになんで目だけ笑っていないのか、俺には理解に苦しむ。

「別に。お前らが思ってるようなことにはなっていないって」

「どうだかな」

「だな。一夏の場合、そうであっても気づいてないだけって可能性がある」

「本当にないんだって。仲いいどころか、むしろぎくしゃくしてるくらいだ」

俺がそう言うと、2人は驚いた様子で顔を見合わせた。

「一夏が女の子とぎくしゃくしてる？」

「日本沈没の前兆じゃないか？」

「なんだそりゃ」

俺が女子と仲良くないのがそんなにおかしいことか。いくらなんでも数馬のたとえばスケールでかすぎるだろ。

「喧嘩でもしたのか」

「喧嘩ってわけじゃないんだが……まあ、話し合いの末にそうなったというか」

「もしかして、今絶賛お悩み中ってとこか？ 俺達でよければ話は聞

くぜ。面白そうだし」

「……ああ」

ちよつと悩んだが、弾の提案にうなづく。

ひとりで悩んでいてももちが明かないので、誰かの意見をもらうのもいい考えだと思っただからだ。

「かいつまんで説明すると」

話し始めたその瞬間、弾の部屋のドアがノックされる。

入って来たのは、弾の祖父であり『五反田食堂』の料理人、五反田 厳さんだった。

「あ、お邪魔してます」

「お邪魔してます」

名前の通り、結構厳しい雰囲気を持つ人だが、きつちりこちらが礼儀正しくしていれば怒ったりはしない。

「お前ら、晩飯は食べていくのか」

「えっと、俺はすぐ帰るんで」

「俺はごちそうになろうかな……」

家にはラウラさんがいるし、今日は遠慮しておこう。数馬はいただいていくみたいだけど。

「そうか」

小さくうなずき、厳さんは部屋を出……るのではなく、なぜかその場にどかっと座り込んだ。

「何してんの。そろそろ店開ける時間だろ」

「まだ余裕があるから大丈夫だ」

弾の指摘にそう答えると、俺の方に視線を向ける。

「小僧。お前、女子と同棲しているらしいな」

「えっ……聞いてたんですか?」

「でかい声で騒いでるから自然に耳に入ったんだ」

「はあ……あの、もしかして俺の話を聞くために居残ってるんですか?」

「暇つぶしにな」

なんかよくわからないけど、ギャラリーがひとり増えた。

でも人生経験豊富だろうし、参考になる意見をくれるかもしれない。
い。

しかし、本当にただの暇つぶしなのか? 今まで厳さんが俺達の会話にこういう形で入って来たこと、多分ないと思うんだが。

「孫娘のことが可愛いから、だろうな」

「ん? なんでここで蘭が出てくるんだ?」

「お前は知らなくていい。それより、早くラウラちゃんの話聞かせろよ」

うーむ、なんか気になるな。

でも、今はラウラさんのことを優先するべきか。

そう考え、俺は明かせるだけの内容を3人に説明した。
彼女は過去に不幸な出来事があり、現在も辛い思いをしているこ
と。

俺はそんな彼女を放っておかず、言葉を投げかけたが、思いっきり
拒絶されてしまったこと。

『不幸な出来事』の具体的な内容については伏せた。本人の許可な
く他人に話せることじゃないと判断したからだ。

それを言ったら全部話せないんじゃないかとなるかもしれないけ
ど、そこは許してほしい。

「なるほど……それで無視を決め込まれてると」

「確かに、喧嘩ではないわな」

それぞれ腕を組んで感想をこぼす数馬と弾。

「でも、ラウラちゃんがんばりで怒ったのかはいまいちわかんねえな」

「その子の詳しい事情でもわかれば、別なのかもしれないけど。あんま
りぺらぺらしやべれないんだろ？」

「すまん。そうなんだ」

やっぱり少ない情報量で考えてもらうのは難しいか。

俺自身でもっと考えて、千冬姉にも相談してみるのが吉か――

「親切が仇になることもあるってだけだ」

「え？」

今までずっと黙っていた巖さんがいきなり口を開いたので、俺達は
揃って彼の方に顔を向けた。

「下手な同情は、かえってプライドを傷つけるってことよ」

それだけ言うと、立ち上がって部屋を出て行ってしまった。店の準
備の時間が来たのだろうか。

残された俺達は、3人で顔を見合わせる。

「……つまり、どういふこと？」

弾の言葉に、俺も答えが出せずに考え込む。

けれど数馬だけは違うようで、納得したように2、3度うなずいて
いた。

「ははあ、そういうことか。その子の気持ち、ちよつとわかったかも」

「マジか」

「マジマジ」

「いったいどういう意味なのだろうか。今はとにかく、数馬の意見を聞いてみよう。」

「自分が落ち込んだ時に優しい言葉をもらおうとさ、うれしい時もあるけど腹が立つ時もあるだろ？ その腹が立つ時って、相手の同情が見えてる時だと思っただよな」

「……ああ！ それわかるかもしれんな」

頭の上で豆電球がついたみたいにはっとする弾。俺もなんとなく、数馬の言いたいことがわかってきた気がしていた。

「女の子に嫌われてへこんでる時に、クラスのモテ男が言うんだよ。『でもお前にはモテそうな要素結構あるから、そう落ち込むなよ』って。上から目線で同情されてる感じがして腹が立つっての！」

「たとえばいまいちだが、まあそんな感じだ。一夏はどう？」

「俺も、似たようなことあるかも。両親がいないこと、あんまりしつこくかわいそうかわいそうって言われるとムカつく時がある」

「こっちはとっくの昔に切り替えて、姉との2人暮らしに満足してるわけ。」

勝手に同情されすぎると、イライラしてしまうのかもしれない。

「……ラウラさんも、同じってことか」

「かもな。一夏の態度が、同情を多く含んでると受け取って反発したんだろうと俺は考えてる」

同情、か。

改めて自分の気持ちを整理すると、確かに俺は彼女に対してそういう感情を抱いている。

自分と同じ年なのに、軍隊に所属していたなんて大変だ。

不運な事故で能力が落ちてしまっただなんて、かわいそうだ。

平和な日常をだらだらと過ごしている俺がそう思っていたことに、彼女は腹を立ててしまったのだろうか。

「俺、間違ってたのかな」

暗い顔を見て、なんとかしてあげたいと思った。

今までも俺は、似たような状況があつたら何度か首を突っ込んでいたから。

でもそれは、たまたまうまくいっていただけで、本当のところは正しくなかったのか？

俺がやるべきことは……

「……俺は、別に間違つてないと思うけどな」

答えたのは、弾だった。ちよつと恥ずかしそうに笑いながら、言葉を続ける。

「お前のそういうとこ、普通にいいと思うしな」

「そうそう。他の奴じゃ、なかなか同じようにはできないぞ。素直に人助けしようと思えるのは、長所だろ」

そう、なのだろうか。

まだ確信は持てないけど、それでも友達2人が肯定してくれたことは、うれしく思う。

「同情するのつて、別に悪いことじゃないしな。受け取る側も、ある程度余裕ができたらちゃんといひように受け入れられるもんだし」

「でもその余裕がないうちは、何か別の理由を用意した方がいいかもな」

「別の理由か……」

ラウラさんに関わろうとする、説得力のある理由を考えろつてことか？

数馬の提案を聞いて、ちよつと頭を働かせてみる。

「でも、具体的にはどういう風にすればいいんだろう」

ただ、なかなか都合のいい理由が思いつかない。それは数馬も同じらしく、あごに手を当てて考えるポーズをとっている。

「そう難しく考えなくてもいいだろ。とりあえずは、男3人で遊びに出かけるのはむさ苦しいから一緒に来てくれーとかで」

「いいのか、それ？」

軽い調子で案を出す弾に疑いの眼差しを向けるも、あつちは本当にこれでいいと考えているらしかった。

「いや、案外それでいいのかもな。その作戦なら、俺と弾が手伝えば余

裕で実行できるし」

「えっ？」

「なんだよ一夏。試してみるだけなら別にアリだろ」

「いや、そうじゃなくてさ……お前ら、手伝ってくれるのか？」

そう聞いたら、何を今さらって感じで呆れられた。

「ここまで聞いといて放つとくのは気持ち悪いだろ」

「ラウラちゃん可愛いしな」

……いい友達だなあなんて、改めて思う。弾の理由は果てしなく微

妙だけど。

「サンキューな」

こうして、俺と友人2人による『ラウラちゃん復活オペレーション

(命名五反田弾)』が開始されたのだった。

求めるもの

迎えた次の土曜日。

「時刻は午前9時30分ちょうど。一夏、数馬、準備はいいか」

「ばっちりだ」

「同じく」

自宅に友人2人を招き入れた俺は、3人揃ってとある部屋の前で息を潜めている。

この壁を1枚隔てた先に、いつものように私服姿の彼女がいるはずだ。

今朝の朝食でも完全スルーされていたが、今日でそれも終わりになる……と、思いたい。

「よし」

作戦の立案者兼実行隊長の弾が大きく息をつく。

そして次の瞬間、カツと目を開いて立ち上がった。

「行動開始！ ものどもかかれーっ！」

「おうー！」

雄叫びとともにドアを蹴破る勢いで突入する俺達。

直後、こちらを見て硬直しているラウラさんの姿が目に入った。

「目標発見！ 取り押さえろ！」

「うおおおーっ!!」

「とりゃああ!!」

そんな彼女の間を突き、俺達は電光石火の動きで飛びかかる！

*

数分後。

「ぎ、ギブギブギブ！ 離して、お願いだから！」

そこには、仲良く床に叩きつけられた男3人の姿があった。

最後まで抵抗していた弾が間接技に屈したところで、彼女はおもむろに立ち上がる。

……というか、強すぎない？ いくら元軍人といっても、体格で勝る3人で不意打ちすればなんとかなると思っていたんだが。

「……なんのつもりだ」

ラウラさんの視線は、俺に向けられている。

思いつきり非難の感情が含まれているのに、久しぶりに彼女の声を聞いたことにちよっぴり喜んでしまっている俺がいた。

「いや、その」

「私にもぜひ聞かせてもらいたいものだな」

起き上がって返事をしようとしたところで、背後のドアが開いて誰かが入ってくる。

「千冬姉」

「半月ぶりに家に戻って来たら……なんだこの状況は？ 何がどうなったらこうなるんだ」

無残にのびている俺達を見下ろし、呆れた調子で尋ねる千冬姉。どうやら今帰って来たらしい。

「実は、ラウラさんを外に連れ出そうと思つてさ。ほら、気分転換になるだろうって」

2人を交互に見ながら、俺は事情を説明する。

「でも、俺が普通に誘つても多分断られると思つたんだ」

「ほう。それで？」

「実力行使で家から引つ張り出すことになった」

「短絡的すぎると思わなかったのか？」

「今思い始めたところ」

冷静になると、あれだ。この作戦、無茶苦茶だ。昨日遅くまでスカイプで語り合つて、深夜のテンションで話が変な方向に進んで、その上ほとんど寝なかつたからハイテンションが維持されたままだったんだ。そうじゃなきゃ、さすがに3人のうち誰かは反対するだろう。横を見ると、弾も数馬も決まりが悪そうに頭をかいていた。あいつらも俺と同じ気持ちなんだと思う。

「まったく。中学生というのは何を考えるかわからんな」

「う、面目ない」

ため息をこぼして、千冬姉は俺、弾、数馬と視線を動かしていき。

「……ただ、最初の考え自体は間違っていない」

最後に仏頂面のラウラさんを見て、そう言った。

「ラウラ。この3人と一緒に外出してやれ」

「……しかし」

「家に籠りきりなのも考え物だろう。なに、本当に嫌になったらすぐに帰ってくればいいさ。仮に強引に引き止められても振り切れるだろう」

意地の悪い笑みを浮かべる千冬姉。そりやまあ、『俺達へラウラさんひとり』の不等号は今しがたはつきりと証明されたからな。軍人の体術舐めてました。

「……教官が、そう言うなら」

返事を渋っている様子のラウラさんだったが、やがて諦めたように小さくうなずいた。

当たり前だけど、全然うれしそうじゃない。

「きちんとエスコートしてやれ」

「ああ、ありがとう。千冬姉」

俺にだけ聞こえるように耳打ちしてから、千冬姉は部屋を出て行った。荷物とかを片付けに行ったのだろう。

「……とりあえず、作戦の第一段階は成功ってことでもいいのか？」

「本番はここからだけだな」

弾のつぶやきに答えながら、ゆっくりと腰を上げる。

ちらりとラウラさんに視線をやると、自然な動作で顔を逸らされてしまった。

*

「……………」

並んで歩く俺達3人。その一步後ろで、ラウラさんは規則的に足を交互に動かしている。

この前買物に付き合ってもらった時と同じく、周囲の光景に興味

を抱く素振りもなし。ただ無感情に、義務的について来ている感じだ。……事実、そうなんだろうけど。

「で、これからどうする」

「昨日立てた予定だと、とりあえず街に出てデパートだったか」

数馬の質問に対し、昨夜の作戦会議の内容を思い出しながら答える。

彼女の好みとかそういういったことは一切わからないので、とりあえず物がたくさんある場所に行こうという安直な発想だ。でも、他に思いつくこともなかったので仕方がない。

「それについてなんだが」

なんて考えていると、隣を歩く弾が指を一本立てて口を開いた。

「服を買うのはどうだ」

「服？」

「ほら、今のラウラちゃんの服装、女っ気がねえじゃん？」

3人して後ろを振り向く。

「ジーンズに白シャツ一枚……確かに、地味っちゃ地味だな。顔は可愛いけど」

「基本、いつもあんな感じだしなあ」

千冬姉も私服にはあんまり気を遣わないし、ファッションに関心を持たない人はあなのかもしれない。

「あれじゃせっかくの素材が活かしきれていない。もうちよつと女らしい格好した方があの子自身のためにもなる」

「そんなこと言つて、本当は外国人がオシヤレした姿が見たいだけなんじゃないん？」

「そこは否定しない」

否定しないのかよ。

「けど、実際普段着ないような服着たら新しい自分に気づくとかあるかもしれないだろ」

「む……」

顔を見合わせる俺と数馬。一理、あるのか？

「っーかお前ら、ラウラちゃんのおめかし見たくないのか！俺は見

たい！」

「わかったわかった、だから大声で騒ぐな！」

「一夏の言う通りならあまり服持っていないみたいだし、まあ悪くないんじゃないの」

家を出る時に結構な金額を千冬姉から手渡されたので、金銭的に困ることはない。

他に具体的な案があるわけでもないし、弾の言う通りにもしてみるのもいい。

いいんだけど、問題があると言えはあある。

「それで、誰がラウラさんと一緒に店に入るんだ？」

女性用の服が売っている場所に、男が入るのは抵抗がある。

しかし、ラウラさんひとりをおかわせるわけにもいかない。服を選ぶのは店員さんに一任するとしても、誰かが付き添う必要がある。

「……………」

無言で互いを見つめる俺達。

次の瞬間、全員が一斉に右手を掲げた。

「最初は」

「グー！」

「じゃんけん——」

「あれ？ あなた達こんなとこで何やってるの？」

聖戦が始まろうとした矢先、前方から女の子の音がした。

視線を向けると、見知った顔が3人並んでこっちに歩いてきている。

左から、人里花梨さんひととぎとかりん、中入江文さんなかのいりえふみ、灯下枝理さんとうもとえり。俺達と同じ

学校に通う同級生だ。俺の印象では、いつも3人仲良く一緒にいる。ちよつと前までもうひとりいたんだが、そいつは転校してしまったので今はいない。

「とうかかその子誰?! めちゃくちゃ可愛いんだけど！」

「外人さんだよね？ すごい、肌しろーい」

「また織斑くんがひっかけてきたの？」

俺達の背後にいたラウラさんに気づいた彼女達は、たちまちわー

きやーと騒ぎ始めた。ていうか最後、またひっかけてきたってなんだそれは。

「実は——」

誤解を解くために軽く事情を説明する。

するとなぜか、3人の目がキラんと輝き始めた。

「つまり、この子に似合う服を用意するんだよね」

「だったら私達に任せて！」

「白人さんの服選びなんて初めてだなー。わくわくする」

素早い動作で移動すると、棒立ちのラウラさんの両腕をガシツとつかんだ。

「な、なんだ、お前達」

「さあ行こう！」

「おー！」

「可愛い服選んであげるからね」

さすがのラウラさんも、女子3人のかしましパワーには成す術もないように。

毒気を抜かれた表情で、抵抗することなく連れて行かれてしまった。

「……女の子ってすげーな。初対面なのに」

弾がこぼしたつぶやきに、俺も数馬も何度もうなずいた。

とりあえず、もうじゃんけんする必要はなさそうだ。

*

40分後。

「おお」

「おお」

「おおおっ！」

店から出てきたラウラさんの姿に、男3人揃って感嘆のため息をこぼす（ひとり叫んでるけど）。

白いワンピースに身を包み、右手首にピンクのシュシュをつけてい

る彼女は、自分の体をあちこち眺めながら落ち着きのない素振りを見
せていた。

「ほらほら、男子の反応も良好みたいだよ」

「どう？ 感想は」

「……股が、風通しが良すぎる」

あまり聞いてはいけないようなつぶやきが漏れたような気がする
が、知らないふりをおいた。

「ま、股だと……！」

「想像するな、馬鹿」

隣のエロいやつに軽く拳を入れつつ、俺は改めてラウラさんに視線
をやった。

……やっぱり、可愛いよな。

「ねえねえ織斑くん。次どこ行くかとか、もう決めてるの？」

「えっ？ いや、まだだけど」

ぽけーつとワンピース姿を眺めていたら、急に灯下さんに声をかけ
られた。

「ならば、私達で目的地決めちゃっていいかな？ ラウラちゃんを連
れて行きたいところ、結構思いついちゃってるの」

「そうなのか。じゃあ、そうしてもらおうかな」

野郎だけであれこれ考えるより、女の子達に任せてしまった方がい
いような気がする。ラウラさんが海外の生まれで、しかも特殊な環境
で育ったのだとしても、女子特有の感性とかはあるだろうし。

「ありがとう」

そう言うてはにかんだ灯下さんは、ラウラさんのもとへ戻って彼女
の手を引き始めた。あとの2人も、それにならって先へ進んでいく。
置いてかれないように、俺達もあとを追った。

——それから先は、まさに女子パワーの独壇場だった。

ランジェリーショップやらクレープ屋やらゲーセンやら、ラウラさ
んはいろんな場所に引っ張りだこにされていた。

困惑しながらも、最初は鬱陶しげな態度を見せていた彼女だったが

……

「この音ゲーはね、こういう感じでリズムをとって」

「……こうか」

「おおっ、うまい！ 初めてなのにすごいねラウラちゃん」

「このくらい、たいしたことでは……待て、頭を撫でるな」

なんだかんだ、勢いに押されて普通に遊んでいた。楽しんでるかどうかはわからないけど、部屋にずっといるよりはるかにいいと思う。

「しっかし……これ、俺達必要ないよな」

「あの強引さは女同士だからできるんだろうな」

音ゲーから別のゲームに移動する彼女達を見つめながら、弾と数馬が素直な感想をこぼす。

男子3人、女子に置いていかれてUFOキャッチャーに興じている状況である。俺はクマのぬいぐるみを狙っているのだが、どうにもとれる気配がない。

「そうだな。でも、やれることが全然ないってわけじゃない」

「そうなのか？」

「女子が暴走したら止めるって役割がちゃんとあるだろ」

ラウラさんは他人とコミュニケーションをとるのも久しぶりだろうし、遠慮がなくなりすぎるとトラブルが起きる可能性がある。

だから、冷静に場を判断できる人間は必要なんだ。

……まあ、人里さん達がその辺全部わかったうえで気をつけてたら、本当に出る幕ないんだけどな。

「なるほどねえ」

それでも、俺の言葉に弾は理解を示したようだ。数馬も同じらしく、小さく一度うなずいた。

じゃあ、きちつとエスコートするでしょう。千冬姉にも言われたことだしな。

*

あちこちまわっていたら、あつという間に夕方になってしまった。

「ラウラちゃん、またね」

「今日は楽しかったよ」

「ばいばーい」

「……………」

笑って別れのあいさつをする3人に対し、ラウラさんは無言のまま。でも完全に無視しているというわけではないようで、ちゃんと視線は彼女達に向けられていた。

「じゃ、俺達も帰るわ」

「あんまり役に立てなくてすまん」

「そんなことないさ。最初に協力してくれたのはお前らなんだから」

俺が自分の間違いに気づけたのも、こうやって行動することができたのも、弾と数馬がいてくれたおかげだ。

……2人のアドバイスが大事になるのは、むしろこれからだし。

「じゃあな、みんな。今日はありがとう」

それぞれの帰り道に散っていく一同。

「あ、そうそう。織斑くーん」

そんな中、灯下さんだけが何かを思い出したらしく戻ってきた。

「なに?」

「ラウラちゃんのこと気にかけるのはいいけど、あんまり行き過ぎると鈴が悲しむよ?」

「へ? なんで鈴が出てくるんだ?」

「それは自分で考えて。また学校でね」

……行ってしまった。なんだったんだろう。

「……………」

いや、今はラウラさんのことを優先しよう。

女子達がいなくなつて、彼女は再び表情を硬くしている。さっきまでは、ほんの少しだけ感情が表に出ていたんだけど、やっぱり俺に対してはまだ怒っているようだ。

「ラウラさん。もうちょっとだけ、俺に付き合ってくれないか」

そんな彼女の目を見て、俺は静かにそう告げた。

返事はなかったが、俺が足を動かし始めると黙ってあとについてく

る。どうやら、拒絶される心配はなさそうだ。

「この坂道を登っていくと、高台にある公園に出るんだ。そこから見る景色がきれいだから、君にも見せたいと思って」

歩きながら、ひとりです勝手にしゃべり続ける。黙っていると、彼女が心を閉ざしてしまふような気がしたから。せつかくみんなが作ってくれたチャンスも、無駄にしてしまふような予感があったから。

「ほら、着いた。ここは夕焼けの時間帯に来るのが一番いいんだ」

都合のいいことに、公園には俺達以外の来客はなかった。大事な話をしても、盗み聞きされる心配はない。

……今朝の段階で、俺の中の考えはある程度まとまっていた。

今日一日ラウラさんを見守って、その考えは完全に固まった。

だから、勇気を出して言おう。

「あの、さ」

無感情な瞳で、眼下に広がる街並みを眺める彼女。

……また、あんな顔をさせてしまうかもしれない。今度こそ、とりかえしのつかないような怒りを買ってしまうかもしれない。

それでもこれが、今の俺に出せる精一杯の答えだ。

「この前は、ごめん。下手に元気づけようなんてしちゃって」

彼女の視線は動かない。俺が話しかけても、相変わらず景色を見ているだけ。

でも、きつと俺の言葉を聞いてくれているはず。そう信じて、口を動かし続ける。

「あの時……俺は、君に同情していた。かわいそうだと、思ってた」

ラウラさんの体が、小さく震えた。視線が、ちよつと下がる。

「勝手に同情されて、迷惑だったよな。嫌な思い、させちゃったよな。だから、ごめん」

思い切りよく、俺は彼女に向かって頭を下げた。

俺の思いは、受け入れてもらえるのだろうか。

「……………」

答えは、何も返ってこない。

拒絶、ということか。

「やっぱり、許してもらえ——」

「最初に待っていたのは、侮蔑だった」

諦めかけたその時、彼女の視線が俺に向けられた。

目を細めて、何かを思い出すかのような、そんな顔をしていた。

「もともと、態度がよくないだの付き合いが悪いだの言われていたからな。事故が起きた直後は、力を失った私をあざ笑う者ばかりだった」

嫌な過去を語っているはずなのに、不思議と彼女の表情は穏やかだ。

感情のコントロールができているのか、それとも……

「そのこと自体は、別にシヨックでもなかったのだ。実力があるから許されていた態度は、実力を失えば否定されるに決まっている。十分理解できることだったし、私もその時は這い上がることに必死で、奴らの反応を気にする余裕もなかった」

「……………」

「だが」

それとも、彼女の心の傷の本当の原因は、別にあるということか。

「時間が経つにつれ、私と周りの連中の差は広がるばかりだった。私と同じ場所でもがいている間に、奴らは教官の指導によって実力を伸ばしていった。次第に、連中には余裕が生まれ始めていた」

ギリ、と歯ぎしりする音が聞こえる。

いつの間にか彼女は、悔しさと悲しさがなймаぜになったような、ひどい顔をしていた。

「そうになると、変わるのだ」

「変わる……………」

「奴らの態度がだ。今まで私を嘲笑していた連中が、今度は私に同情の目を向け始めた。努力が報われなくて、かわいそうだと」

落下防止用の鉄の柵を、思い切り殴るラウラさん。当然手は赤くなるが、まったく気にする様子も見せない。

「愕然とした。私はもう、奴らに憐みを受けるほどの存在になってしまったのかと。見下される価値すらなくなってしまったのかと！」

静かな口調は、叫びに変わっていた。

あの日俺に対して心を閉ざした彼女は、再びその感情を曝け出したのだ。

「つまらない、中身を失ったプライドだというのは自分でも理解している！ それでも私は、周囲の同情の視線に耐えられなかった……！」

柵を握る彼女の手に、どんどん力がこめられていく。何かをこらえるのに、必死なように見えた。

「お前に悪意がないのは、私にもわかっている。だがどうしても、感情が制御——」

「もういいよ。もう、話さなくていい」

今にも泣きだしそうな顔をしているのに、これ以上辛いことを話させるわけにはいかない。そんな思いを抱いた瞬間、俺の口は自然に動いていた。

「十分間かせてもらった。ありがとう」

すべてを理解したわけじゃない。

でも、これ以上聞いたところで、彼女の気持ちの全部がわかるわけでもない。

俺はラウラさんじゃないから。そんな経験、味わったこともないから。

「……俺は今も、君に同情してしまっている。多分、これは簡単になくせるものじゃない」

意識でどうにかなる問題じゃないから、変えるのはきつと難しい。

「でも」

顔を曇らせる彼女を、しっかり見つめたうえで俺は言う。

「でも、同情だけじゃない」

「なに……？」

ラウラさんの顔が上がり、互いの視線が交錯する。

「俺がラウラさんに関わろうとするのは、同情だけが原因じゃない。……というか、他の理由の方がでかいくらいだ」

自分の気持ちをしっかりと整理したら、案外簡単に答えは見つかった

た。

だいたい、もっと早く気づくべきだったんだ。

弾も数馬も、女子達も言っていたんだから。俺だって、彼女を最初に見た時感じていたじゃないか。

「……その、理由は？」

期待しているような、怖がっているような。

どちらかはわからないけど、おずおずと尋ねてくるラウラさん。

だから俺は、はつきりと言ってやった。

「可愛いから」

「……………はっ？」

「だから、可愛いからだって」

ぽかん、と口を開けるラウラさん。どうやら予想外の答えだったらしい。

……俺も、こうやってはつきり言うのは正直照れる。

「可愛い子がさ、ずっと暗い顔したままなのって、もったいないだろ？」

男ならみんなそう思う」

「……………」

「俺は、ラウラさんに笑ってほしいんだ。きつと、今よりずっと、か、可愛くなると思うから」

やばい、どんどん恥ずかしくなってきた。周りに他に誰もいないのが救いだ。

「可愛い子の笑顔が見たい。それで、仲良くもなりたい。俺達くらいの年齢の男は、だいたいそんな感じなんだ」

だから俺は、彼女に関わろうとするんだろう。

ガキっぽいと思われるかもしれないけど、事実ガキだし何もおかしなところはないはずだ。

「……………なんなんだろうな」

俺の言葉を黙って聞いていたラウラさんは、しばらく経ってようやく口を動かしてくれた。

「お前の言うことは、よくわからん」

困惑が顔に出ていたけど、それだけじゃない。

「よくわからんが……そんなことを言われたのは、初めてだ」
満面の笑み、とまでは全然いかないけれど。

少しだけ。ほんの少しだけ、彼女は微笑んでくれていた。

「お前の言葉の意味……これから、考えていこうと思う」

俺を、受け入れてくれたということでもいいのだろうか。

だとしたら、とてもうれしい。

「ありがとう、ラウラさん」

でも、お礼を言ったらなぜか難しい顔をされてしまった。

「……その、ラウラ『さん』というのはやめろ」

「え？　じゃあ、ボーデヴィツヒさん？」

「……………」

睨まれた。というかめちやくちや眼光が鋭い。

「さん付けするなと言っているのだ」

「ああ、そっちか……でもいいのか？　馴れ馴れしいかと思ってたんだけど」

「お前には、私と対等に接してほしい。だから、余計な単語は付けるな」

そんな風の上目遣いで言われると、断る理由がなくなってしまう。

別にさん付けでも対等だと思っただけど、いちいち難癖つけるのは野暮つてもんだ。

「わかった。ラウラ」

「ああ、それでいい。……感謝する、一夏」

その日、俺は初めて彼女に名前を呼ばれた。

呼び方

結局、家に戻った時には夜の7時をまわってしまっていた。夕方には戻ると言っておいたのだが、当然ながらすでに陽は沈んでしまっている。

「ただいま。悪い千冬姉、遅くなっちゃった」

ラウラと2人で玄関に入り、開口一番謝罪する。もともと近くにいるのか、千冬姉はすぐに廊下まで出てきた。

「おかえり。気にすることはないが、何かあったのか」

「いや、高台の公園に行ってたんだけど、ラウラが思いのほかその景色に見惚れちゃってて」

「なっ……馬鹿を言うな。見惚れていたのは一夏の方だろう。私はただ、いろいろと考え事をしていただけだ」

「え、そうだったのか？ 俺も途中から、景色見るよりラウラと話す方に集中してたんだけど」

「要するに、もっと早く戻れたということか」

わざわざ日没後まで公園に居座る必要はなかったらしい。でもまあ、ラウラといろんなことを話せたからよしとしよう。

「……なるほど。確かに、何かあったようだな」

俺達の様子を見て、千冬姉はほっとしたような表情を浮かべている。心配事が解決したような、そんな感じの顔だった。

「すぐに夕飯用意するから」

いつまでも玄関で話している理由もないので、靴を脱いでリビングに向かう。ラウラも俺にならって移動しようとしたところ、千冬姉に呼び止められた。

「ああ、そうだ。ラウラ、お前は私に、何か言うことはないのか」

「はい……っ」

立ち止まって一瞬呆けた彼女だが、すぐに何かに気づいたようにハツと体を震わせた。

「……た、ただいま戻りました。教官」

しやべり硬っ！

「硬いぞ」

姉弟揃って同じ感想を抱いていた。

一方ラウラは、どこを修正すればいいのかいまいちわからないと困っている様子。

「俺と同じこと言えばいいんだよ」

小声で助け舟を出してやると、今度はなぜか緊張した面持ちに。さつきから感情表現が明らかに豊かになっていて、ちよつと面白い。

「し、しかし、教官相手にあまり砕けた言葉は」

「んなこと気にする必要ないつて。本人が希望してるんだし」

はつきり言ってしまうえば、そもそももう教官じゃないし。

一緒に暮らしていく以上、千冬姉も余計な壁は取り去りたいんだろう。

「で、では」

しばらく躊躇していたラウラだったが、やがて意を決したように千冬姉に向き直る。

「……た、ただいま」

「おかえり」

口をすぼめてうつむくラウラと、そんな彼女に微笑む俺の姉。

たったそれだけのやり取りが、不思議と俺の心に強い印象を残した。

「さて、飯だ飯」

昨日作ったカレーの残りがあるから、簡単なサラダでも追加すれば短時間で夕食の用意ができるだろう。

決して手抜きと言うなかれ。効率がいいだけだからな。

*

週が明けて、月曜日の朝。

「行ってくる」

「おう、行ってらっしゃい」

俺が家を出るよりも早く、千冬姉はIS学園に向かう。週の初めは

いつも、こうして玄関まで出て見送りをしている。

でも今日は、見送りの人数がひとり多い。

「武運を」

だから硬いつて。なんで胸に手当てて敬礼してるんだよ。

「私はこれから戦場にでも向かうのか」

「ただの学園ならともかく、IS学園ですから」

「え、IS学園ってそんなにヤバいところなのか？」

俺まで不安になってきたんだが。もしかして定期的に謎の組織からの襲撃があつたりするのかわ？

なんて考えているのがばれたのか、千冬姉が呆れたような視線を送ってきた。

「そんなわけないだろう。生徒には特定の場所以外でのISの展開を禁止しているし、学園のセキュリティもちゃんとしている。そうそうトラブルは起こらんさ」

「だよな」

なんかあるんならニュースになつたりしてるだろうし。IS学園に関して、少なくとも俺は悪い噂は聞いたことがない。

「……………」

言うべき言葉はわかっているのだろう。

でもやっぱり抵抗があるみたいで、ラウラはしきりに口を開けたり閉じたりしている。

「い」

それでも、彼女は自分の力で、自分の意思でその一言を紡いだ。

「い、いってらっしやい………」

「ああ、行ってくる」

ほん、とラウラの頭の上に手を置いて、優しく撫でる千冬姉。

その間、ラウラはずっと照れくさそうに下を向いていた。正直、可愛い。

「一夏」

ラウラから手を離し、ドアに手をかけたところで、千冬姉は俺の方を振り向いた。

「なんだ？」

「頼んだぞ」

「……もちろん」

何を、というのはわかりきっているのだから、任せろと言わんばかりに笑っておく。

安心したような顔になった千冬姉は、今度こそ外へ出て行った。

「さて、俺も学校行く準備するか」

「そうか、一夏もすぐ出るのか」

まるで今気づいたかのようにつぶやくラウラ。毎朝同じ時間に家出てるんだが、ひよつとして印象に残っていなかったのか？

「朝食の後はすぐ部屋に戻っていたから、お前がどうしているのかは知らなかったし、関心も抱いていなかった」

そこまで言って、彼女は申し訳なきように俺を見る。

「食べるだけ食べて何もしないとは、振り返ってみると最低の居候だな。……すまない」

「仕方ないさ」

本当は、ラウラだつて一歩前に進みたかつたはずだ。同じ場所に留まったままでいいと考えていたわけじゃない。

だが、彼女は他人に同情されることを恐れていた。トラウマが、彼女の足をがんじがらめに縛っていたんだ。

そのがんじがらめの縄を、なんとかほどこうことができた。だから今、ラウラは変わろうとしている。

「しかし」

「申し訳ないと思ってるんなら、これから頑張ればいいだろ？」

「そうだな、さしあたっては……」

「とりあえず、俺のことも見送ってくれ」

「一夏……」

ちよつと呆けてから、ラウラは微笑みながら元気よく返事をした。

「ああ、任せろ！」

学校に行ったら、改めて弾達にお礼を言っておかないとな。

*

その日の夕食は、なんとなくの思いつきでミートパスタにしてみた。

カチャカチャとフォークと食器がこすれる音だけが、しばらく続く。

2人きりの食卓だけど、もう氷点下ということはない。お互い口数は多い方じゃないが、会話がなのと会話ができないのではまったく違う。

「そういえば、今まで聞き忘れてたんだけど」

「む、なんだ?」

こうして話題が頭に浮かんだ時に、自由に尋ねられるのは本当にいい。

「好きな食べ物とかあるか? 教えてくれたら、今度作ってみようと思うんだが」

「ふむ……いや、特に好き嫌いはないな。極端な話、食べればなんでもいい」

「ありや」

残念だな。せっかくやる気出たのに。

「だが、お前の作る料理はうまい。軍の味気ない食事よりも、ずっと食が進む」

「はは、そりやうれしいな」

ラウラは思ったことは素直に言うタイプっぽいし、お世辞じゃないんだろう。

「これを毎日食べられないとは、教官も残念に思っていることだろう」

「それはおおげさじゃないか?」

「そうか? 本気で言っているのだがな」

確かにクラス内でも上手い方だという自信はあるけど、そこまで褒められるほどの出来じゃないと思う。あくまで将来専業主夫やれるかもってくらいだ。

「教官は、料理ができるのか?」

「あー……しばらく作ったの見たことないけど、あんまりできる方じゃないなあ」

俺が小さかった頃は、織斑家の食事は大きく分けて3パターンだった。

外で何か買ってくる。近所の篠ノ之さん家でごちそうになる。千冬姉が作る。

で、俺の記憶の中では、千冬姉の料理のレパートリーはカレーと野菜炒めしかなかったような気がする。味の方は……まあ、うまかった。姉の手料理によるプラス補正こみでだけど。

「そうなのか」

「仕事頑張ってくれてるから、できなくても全然かまわないんだけどな。家事は俺が担当してるし」

「適材適所、というやつだな」

「その通り」

……ただ、将来千冬姉が結婚するとしたら、相手の男の人はその辺ちゃんとした人であってほしい。うちの姉は気を抜く時は本当にずぼらだから。たまに下着姿で歩き回る癖はいつになったら治してくれるのだろうか。

「せめて俺程度には家事ができないと、安心してお嫁にやれないよな……」

「何をぶつぶつ言っているのだ？」

「……はっ、いや、なんでもない。ちょっと考え事してただけだ」

「そうか。しかし、教官にも不得意な分野というものはあるのだな」

うなずいて、パスタを一口頬張るラウラ。

うーん。

「なあ、そろそろその教官っていうのやめないか？」

「……なぜだ？」

「朝のやり取りでも思ったんだけどさ。なんというか、他人行儀な感じがするんだよな」

あいさつが堅苦しかったりすると同じで、その呼び方も直した方がいいんじゃないだろうか。そう考えたので、思い切って提案してみ

た。

「しかし、教官は私より上の立場にあたる人で」

「それは向こうでの話だろ。ここは日本で、しかも俺達は同じ家に住んでるんだ。千冬姉だって、もっと砕けたしゃべり方してほしいって思ってるはずだ」

だからこそ、『ただいま』や『いつてらっしやい』を言わせようとしていたわけだし。

「では、どう呼べばいい？ 織斑さん、か？」

「俺も織斑だぞ」

「一夏は一夏と呼ぶから区別はつく」

「そっちがよくてもこっちはややこしい」

どっかで混乱しそうだ。それにまだ他人行儀っぽさが残ってる。

「なら、千冬さん、でどうだ」

「そうだな、それならよさそうだけど……でも、なんかひねりが足りないよなあ」

「待て。ひねる必要がどこにある」

ラウラのツッコミは置いといて、もうちよつと考えてみる。

名前で呼ぶだけでも千冬姉は十分うれしいだろうけど、もっと喜ばせようとする。

「あ、そうだ」

ひとつ思いついた。

「俺と同じ呼び方はどうだ」

「お前と同じ？ つまり」

「そう、千冬姉だ」

自信満々に答えたら、どういうわけかジト目で睨まれてしまった。

「何を言っている。私とあの人は姉妹ではないのだぞ」

「実際に姉妹じゃなくても、近い関係になることは可能だろ？」

この際だし、俺の素直な気持ちも洗いざらい吐いてしまっておこう。

「ついでに俺にとっても妹みたいなもんだし」

「なっ、私がか!？」

「だってもう1ヶ月以上同じ家に住んでるんだぜ？　ちやんと話せるようになったのはつい最近だけど、顔を合わせる機会は本当に多いし……俺としては、半分家族みたいに思ってる」

「……家族」

目を丸くしたラウラは、俺の言葉に驚きを隠せないようだった。ちよつと突拍子のない話だったかもしれない。

「千冬姉も、俺と同じなんじゃないかと思う」

「そうなのか？　私は、一度もそんなことを聞いた覚えは」

「俺はあの人の弟だぞ？　信じろ」

意外と照れ屋で素直じゃない面のある千冬姉だ。素直に言葉にしない可能性は結構高い。

「千冬姉はさ、あんまり他人に内側まで踏みこませようとしなない人なんだ」

美人なのに彼氏ができた形跡すらないのは、そういう面があるからだろう。

「でも、ラウラに対しては違った。わざわざ日本にある自分の家まで連れてきた」

いくら教え子が傷心だったとしても、普通はそこまでしないはずだ。

でも、千冬姉は家に住ませた。内側を曝け出した。

「多分、そういうことなんだよ」

「……………」

黙りこんでしまったラウラに向かって、俺はできる限りの笑顔を見せた。

「ラウラ自身の気持ちはどうだ？　千冬姉がお姉さんだとしたら、嫌か？」

「そんなことはない！　私のような人間のためにここまでしてくれたのだ。感謝こそすれ、嫌うようなことなどありえない。だから……姉でも、いいと思う」

「そうか」

それはよかった。俺もうれしい。

「試しに呼んでみるくらい、いいだろう？ 嫌なら嫌って、千冬姉もそう言うさ」

再び沈黙。

考える時間を十分取ってから、ラウラはゆっくりと顔を上げた。

「……千冬姉、という呼び方はしっくりこない」

困ったような笑みを浮かべて、彼女は俺の提案に対する答えを出す。

「姉さんとなら、呼んでみてもいい」

その日から、ラウラの千冬姉を『姉さん』と呼ぶ練習が始まり。

迎えた週末の土曜日、成果が披露されることとなった。

「お、おかえりなさい。……ち、千冬姉さん」

「……」

呼ばれた瞬間、硬直する千冬姉。

「……ああ、ただいま」

でも驚いていたのは一瞬で、すぐに冷静な態度を取り戻していた。表面上はあまり感慨を抱いていない風に見えたが、実際はどうだったのだろうか。

俺は千冬姉じゃないから、本人の心の中までは見通せない。

……でも、参考までに言っておくことがあるとすれば。

その時の千冬姉は、やけに顔の筋肉がひきつってるみたいだったとか。

ラウラに姉さんと呼ばれて以降、しばらく鼻歌を歌う頻度がやたら増えていたとか。

そういうところから、察するべきなんだろうな。

学校

「私の目は、濁りきってしまっていたようだ」

テーブルに置かれた湯呑みを眺めて、ラウラはぼつりとそんな言葉を漏らした。

「傷つくのが怖かったから、何も見なくなった。日本に来て、お前に外に連れ出されても、なんの感慨も抱かなかった」

向かいに座り、俺は彼女の顔を見つめる。真つ赤な瞳に、暗い感情は見受けられない。

「今は、どうなんだ？」

「はつきりと答えることはできない。だが、何かに触れ、何かを感じ、何かが変わっていく。そんな気がする。以前は興味を抱けなかったものも、今はまた違った感想を持てる」

「そうか」

きつと……いや、間違いなくいいことなんだと思う。夕陽と一緒に見たあの日から、ラウラは変わった。閉じこもっていた殻から、抜け出したんだ。

「最近、楽しいことが多い」

その証拠に、ここしばらく彼女の笑顔をよく見る。

笑顔といっても、100パーセントの満面の笑みって感じじゃない。千冬姉がよくやるような、クールな微笑みというやつに近い。

でもそれが、ラウラ・ボーデヴィツヒという女の子にはすごく似合っている。

油断していると、見惚れてしまうこともしばしばだったりする。

「……………」

会話が一段落ついて、無言の時間が流れる。

出会った当初は気まずくて仕方のなかつた2人だけの空間も、今はなんとなく落ち着けるものになった。

居心地のいい静けさ。向こうもそう感じているのか、穏やかな顔つきで湯呑みを口につけ。

「あつっー」

「大丈夫か？」

「も、問題ない。ふーっ、ふーっ」

「猫舌つてのも大変だな……」

ちよつと締まらないのが、俺達らしいといえば俺達らしい。

——家に銀髪美少女がやって来て、2ヶ月ちよつとが過ぎた。

すっかり織斑家に馴染んだ彼女は、俺が学校に行っている間に家事を頑張ってくれるまでになっている。最初は失敗も多くて、帰宅するとしょんぼり顔でお迎えなんてことも結構あった。

でもラウラは決して不器用な子じゃない。繰り返すうちにミスも減っていき、今じゃ立派に掃除洗濯買い物をやってくれている。特に商店街への買い出しなんかは、ラウラが行くと店主のおじさんおばさん達がおまけしてくれるから、俺が行くよりずつとお得だったりする。

ちなみに、ここまで挙げたのは平日に行う仕事の内容。

休日はどうなのかというと。

「もう少し下……ああ、行きすぎた。ほんの少し上を頼む」

「ここですか？」

「そうそう、そこ、いい感じだ……あー、生き返る」

こんな感じで、千冬姉にマッサージをしてあげるのが通例になっている。

これも以前は俺の仕事だったんだが、本人がやりたげにしていたので最近は何役目を譲っている形だ。

「んっ……なかなかうまくなったな、ラウラも」

「姉さんのためですから。すぐに一夏の腕を超えてみせます」

「ほう、あいつ以上か……それは相当な修練が必要になるぞ？」

「そこ、勝手にハードル上げないでくれ」

うつぶせになった千冬姉の腰を、丁寧にもみもみ。

もう『姉さん』呼びは完全に定着している。ラウラもいちいちどもったりしないし、千冬姉もニヤケそうになったりしない。

だからこそ、今の2人は本物の姉妹のようだった。

そりゃあ、外見は似ても似つかないけど、近くで見ている俺が言う

んだから間違いない。

「ああー……」

「千冬姉。気持ちいいのはわかるんだけど、そういう女らしくない声は家の中でもやめといた方がいいと思うぞ」

「たまの休みくらい好きにしてもいいだろう。私の安寧の地はここしかないんだ」

「って言ってもなあ……そんなんじゃないつまで経っても彼氏できないぜ？」

プライベートでも最低限のものは保ってないとなあ。

ひとりの男としての忌憚なき意見を提供したところ、ジト目で睨まれてしまった。

「お前は私に恋人ができてほしいのか？」

「だって、生まれて今まで誰とも付き合ったことないっていうのはさすがにな。あ、でも半端な奴だったら猛反対する」

俺が任せられると判断した男じゃないと渡したくない。これ絶対。

「一夏の目が据わっている……」

「これがシスコンというやつだ。ラウラ、覚えておけ」

「シスコン……シスターコンプレックスでしたか。聞いたことがあります」

シスコンじゃない、これは立派な家族愛だ。

と言っても賛同は得られないと思ったので、この叫びは胸の内にしまつておくことにする。

「しかし、それならば姉さんも十分なブラザーコンプレックスでは」

「ごほん！ 手が止まっているぞ、妹」

「は、はい」

都合が悪くなると話を打ち切るのは姉の特権である。

「……ああ、それと。編入に関してだが、試験である程度の点数をとることができればかまわないそうだ」

「っ！ 本当ですかー！」

千冬姉の言葉を聞いて、うれしそうに目を輝かせるラウラ。なんの話だろうか。

「なあ、編入って」

「ラウラがお前と同じ学校に通うかもしれないという話だ」
「えっ」

マジか、聞いてないぞ。

「まだ確定ではないがな。私が編入試験で結果を出せなければ意味がない」

「そ、そうか。じゃあすぐに勉強始めないと」

「お前が焦ってどうする」

「あ……すまん」

急な話だったもんだから、思わず取り乱してしまった。

「心配せずとも、ラウラはお前よりも地頭がいいから問題ない。試験は1週間後の土曜日、科目は英数のみだ」

「それならば、なんとかかなりそうです」

確かに頭よさそうだよな、ラウラって。編入試験がどれくらいレベルかわからないけど、うちは普通の市立中学だしそこまで難しいってことはないだろう。

「そうか。ラウラが学校に……楽しくなりそうだな」

この前遊んだみんなとも会えるし、彼女自身にとってもいいことに違いない。

そんなことを考えていると、ラウラがじつところらを見つめていることに気づいた。

「一夏。その、私が一緒に学校に通うのは、うれしいか」

「もちろん」

「うむ、そうか……うむ、うむ」

何度もうなずきながら、ラウラは照れくさそうに笑う。

「私も、お前と一緒に行ければいいと思ったのだ。それに、そろそろお前や姉さん以外の者ともまともに接しなければならぬ。見聞を広めるためにも、行動を起こしたいとだな」

「ラウラ……」

やばい。衝動的にえらいえらいしたくなってきた。

小柄な彼女が両手の人差し指をつんつんいじいじしている状況が、

小動物的な可愛らしさを極限まで引き出しているような気がした。

今、頭撫でたらどうなるんだろう。怒られたら嫌だしなあ。

好奇心に苛まれ右手をにぎにぎしていると、横になつていた千冬姉が顔だけこちらに向けてきた。

「やりたいならやればいいと思うが?」

にやりと笑顔。どうやら心を読まれているらしい。

「ええい、ままよっ」

何事もまずは試してみるべし。

多少機嫌を損ねるのを覚悟して、俺は身体的スキンシップに及んでみることにした。

「……………っ!?!」

なでなで。

「な、何をしているっ!?!」

「いや、その……………いいこと言ったから、つい撫でたくなって」

目を大きく開いて体を硬直させるラウラ。相当驚かせてしまったらしい。

「やっぱり嫌だったよな? もうやめるから許してくれ」

ごまかし笑いを浮かべつつ、手を離そうとする。

思った以上に髪がサラサラしていていい感触だったんだが、仕方ない。

「ま、待て」

ところが、驚いたことにラウラは引き止めてきた。うつむいていて表情はうかがえないけど、唯一見える耳のあたりはなんだか赤くなっている。

「……………悪くない。続けろ」

「え、マジで?」

こくん、と肯定の首振り。どうやら、本当に気持ちよかつたらしい。こうなると止める理由がないので、俺も優しく手を動かし続ける。なでなで。なでなで。

「……………なんていうか、女の子の髪だな」

「な、なんだそれは。褒めているのか」

「ああ、褒めてる。サラサラしてるから、すごく触り心地がいいんだ」
「……私には、よくわからん」

この触り心地、正直癖になりそうだ。髪の毛の一本一本がきめ細やかで、しかも全体で絶妙な柔らかさを作り出している。

「ラウラは、どんな風に気持ちいいんだ？」

聞いてみたところ、なかなか返事がかえってこない。

「ラウラ？」

「わからん」

「え？」

「わからんが、心が落ち着く。なぜだろうな」

最初は下を向いていたラウラだが、今は穏やかな顔を俺に見せている。目を閉じて、心からリラックスしているようだ。

「……この辺でやめとくか」

「む、なぜだ？ 一夏も触りたいのではなかったのか」

俺が右手をどけると、彼女は不満げに口を尖らせる。

確かに俺としてももうちょつと続けたい気持ちはあるんだけど

……。

「いつまでも放置しとくと文句言われそうだから」

「……あ」

思い出したように後ろを振り向くラウラ。

視線の先には、寝そべったままマッサージの続きを待つ千冬姉の姿が。

「やっとな私の存在に気づいたか」

「す、すみません姉さん！ つい……」

呆れたように笑う姉に対して、ぺこぺこ頭を下げる妹の図である。

俺もさっきまで夢中になっていたし、恐るべし頭なでなで。

……でも、許可がもらえたらまたやってみたいな。

まだ右手に残る感触を味わいながら、そんなことを思った。

*

6月の真ん中あたりというのは、中学生がだらける時期だと俺は思う。

期末試験を意識するにはまだ早いし、近くに大きなイベントがあるわけでもない。しかも梅雨で天気が悪いのに引きずられて、気分も若干ブルーになる。

受験勉強も、大半の人間が本腰を入れ始めるのは夏以降らしい。つまり、何もないから気も抜けるのである。

逆に言うと、刺激さえあれば俺達学生は元気になるわけ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒです。ドイツから来ました。それと……あー、よろしくお願いします」

外国人の転校生というのは、その刺激としては十分なものだった。何を言えばいいのかわからなくなつて強引に打ち切つたっぽい自己紹介だったが、特に問題はないだろう。

その証拠に、休み時間はずっとあいつの周りにクラスメイトが大勢群がっていた。

彼女が深く追及されることを恐れていた左目の眼帯についても、しつこく問い質されるといふようなことは起きていないので一安心。

男子の中には早速お近づきになろうと考えていた連中もいたらしく、俺がラウラと接点があることを本人の口から聞いた結果、恨めしげな視線を送ってきた。そんな顔されても、別に俺とあいつは付き合っているわけじゃないんだけどな。

「ラウラちゃん！ 久しぶり！」

「来てくれたんだね、うちの学校」

「楽しくなりそう」

前にお世話になつた灯下さん達は、ラウラの編入を特に喜んでくれていた。ラウラの方も、彼女達の顔を見つけるとうれしそうに微笑んでいた。仲のいい女友達ができそうで何よりだ。

「ラウラちゃんもクラスメイトか……これはいよいよ鈴の立場が怪しくなってきたな。そうは思わんかね御手洗くん」

「まったくだね五反田くん。中国で油売つてる場合じゃないと言いたいものだよ」

こいつらはこいつらで、なんかよくわからない会話を変な口調で繰り広げていた。

「なんで鈴が出てくるんだよ」

「それは俺達の口からは言えんが……一夏、お前ぶっちゃけラウラちゃんのこと狙ってたりするののか」

「狙うって、あれか？ 男と女の関係的な意味でか」

「他にどんな意味があるんだよ」

小声で尋ねてくる弾。数馬も興味ありげにこっちを見ている。

「別にそんなんじゃないぞ。妹みたいなもんだ」

実際、家じや織斑ラウラみたいな扱いだしな。最近加わった末っ子だ。

「妹だあ？ やな単語出すなよ、お前」

「弾は本当に妹さんの話になると弱いよな」

「最近どんどん可愛げがなくなってきたるんだ。何度も言うが、俺は妹という存在を女とは認めん」

相変わらず弾は妹のことが苦手なようで、数馬の言葉に拳を握って熱く返していた。

「普通に可愛いけどなあ、弾の妹。数馬もそう思うだろ？」

「まあな。たまに会うけど愛想いいし」

「それはよそ行き用の作った顔だからだ。あいつの本性はもつと恐ろしくてだな」

「はいはい、それは何度も聞いたから。今はラウラさんの話だ」

恒例の愚痴が始まりそうだったので、数馬が素早く先手を打って止める。

キラんと目を怪しく輝かせると、妙に気取った声で弾に語りかけ始めた。

「女と認めないのは自分の妹だけであって、友達の妹なら普通にアリだろう？」

「……それは確かに。むしろ接近しやすい、共通の話題があるといいことづくめだ」

「つまり」

「ああ、ラウラちゃんは最高ってことだな！」

おいおい……

*

「今日は私が夕食を作る！」

とある雨の日の帰り道、ラウラは高らかにそう宣言した。

学校にも慣れてきたようだし、そろそろ新しいことに挑戦したいとでも考えたのだろうか。

特に断る理由もないので、本日の織斑家の晩御飯は彼女に一任することに。

「……………」

というわけで、現在台所でラウラが料理する様子を観察しているのだが。

「……………斬る！」

ザンツ!!

真つ二つになる大根を見て、満足げに笑っている。エプロン姿は似合っているんだが、なんか怖いオーラを感じるのはなぜなのか。

一言ですませるなら、包丁さばきが非常に危なっかしい。

「ラウラ、その切り方じゃ怪我するぞ。それに無駄に勢いつけると切った野菜が飛んでいくし」

「む、そうなのか。刃物の扱いには慣れているつもりなのだが」

「多分刃物としてのジャンルが違うから」

くるくると器用に包丁を回せるのはすごいんだが、正直怖いからやめてほしい。

「とにかく、料理するつもりなら早めに直した方がいいな」

包丁の使い方というものは基礎中の基礎だし、ちゃんと教えておくべきだ。

「どうすればいいのだ」

「えつとだな、握り方に特に問題はないから、あとは……………」

口で説明するのは苦手だ。

なので、実際に動いて示してみることにした。

「ちよつと触るぞ」

「ん」

ラウラの背後に回りこみ、後ろから包丁を握る手にそつと触れる。ちよつと首を横に曲げて、彼女の顔で視界が遮られないようにした。

「まず、さつきみたいに思い切り振り下ろす必要はない。包丁つてのは基本的に、上下じゃなくて前後の動作で切るわけだから」

力を入れすぎると軸がぶれがちだから、そこも気をつけないとな。「で、左手の方は食材を固定するんだけど、指を切らないように手は丸めておくのがコツだ」

「……………こうか」

「そうそう、うまいじゃないか。じゃあ早速一緒に切ってみようぜ」ラウラの両手に俺の両手を添えて、ゆつくりと大根を切る作業にとりかかる。

トン、トン、と、小気味いい音がまな板から響いてくる。

「……………」

真剣な顔つきで手を動かすラウラ。

一方俺は、今さらながらある重大な事実に気づいていた。

……………この体勢、わりと大胆じゃないか？

「さすがだな、一夏。どれもほとんど同じ厚さに切れている」

「お、おう」

今の俺、女の子の体を後ろから抱きしめるような形になっている。背中とか腕から柔らかな感触が伝わってきて、しかもなんだか甘い香りまで匂ってくる。意識した途端、五感が急に鋭くなってしまったような気がしていた。

……………この小さな体で、俺達3人をコテンパンにしたんだよな。いつたいどこにそんなパワーが秘められているんだろうか。

「一夏?」

「えっ!? あ、いや、なんでもないぞ。なんでも」

「そうか。何やら考え事でもしているようだったが」

いかんいかん。向こうは真面目に料理に取り組んでいるというのに、俺がよこしまな気持ちを抱いてどうする。

切り替えよう。邪念を振り払うためにも、ここはひとつ他の話題を。

「そういうえば、なんで急に晩飯作りたと思ったんだ？」

「深い理由はない。学校で枝理達に聞いたことを実践しようと考えただけだ」

「灯下さん達に？」

編入してから1週間で、ラウラはすっかり仲良し3人組の新たな仲間に加わっている。男の俺だけじゃフォローに限界があるから、いろいろと親切にしてくれている灯下さん達には感謝感謝である。

「男は女の手料理で喜ぶらしいと、な」

「あー、なるほど」

「日ごろから、一夏にはうまい食事を用意してもらっている。いい機会だと思って、今日は私が作ってみようとしたのだが……結局お前に手伝わせてしまっているな」

ちよっぴり残念そうに苦笑を浮かべるラウラ。本当は自分ひとりの力でやりたかったんだろうな。でも危なっかしかったのは事実だし、口を挟んでしまったのは許してほしい。

「それでも、ラウラが俺のために頑張ってくれていることに変わりはないだろ。俺は十分うれしいぞ」

「そ、そうか。ならいい」

俺が笑いかけると、ラウラも表情を明るくした。ここまで見た感じ料理の経験はあまりなさそうだし、そんな彼女がこうして食材と格闘しているだけでも、俺に喜んでもらおうと思っって一生懸命やってくれているのが伝わってくる。

それだけで、兄として、男としては幸せな限りだろう。

「実際、男は女の手料理が好きなのか？」

「そうだな……まあ俺は、別に性別は関係ないかな。誰かが俺のために作ってくれたってだけでうれしいよ」

「ほう。ではたとえば、弾が心をこめて作ったものとかでもうれしい

のか」

「そりやもちろん……うん？」

うなずきかけたところで、無意識のうちに言葉が止まった。

頭の中で、エプロン姿の弾が俺に肉じゃがを振る舞う構図が浮かび上がる。

『一夏、お前のために真心をこめて作ったんだ。さ、たんと召し上がれ

♡』

うわ気持ち悪っ！

なんておぞましいものを想像してるんだ俺の頭は。

「どうかしたのか」

「いや……そうだな。やっぱり、女の子が作ってくれた方がうれしいな」

その日の夕食は、アツアツのおでんだった。

少し味つけが濃すぎるような気もしたけど、十分おいしかった。

夏祭り

7月。

梅雨がようやく明けて、カラッと太陽が照りつける夏本番が到来した。

「二夏。この問題だが」

「ああ、そこはだな——」

月頭の期末試験はすでに終わったが、俺とラウラは日曜の昼間から勉強に励んでいた。

中3の夏、受験生の夏である。

「1年前の今頃は、まさか日本で高校受験に備えることになると思いもしなかった」

「はは、そりやそうだろう」

最近、彼女は自分から過去を思い出すことに抵抗がなくなったように見える。本人なりに、切り替えがついたということなんだろうか……そんなことを考えながら、テキストに目を通す。

春からだいたいのかえはまとまっていたけど、ここに来て俺は第一志望を藍越学園に決めた。いろいろな条件を見て、やっぱりあそこに1番行きたいと思ったためだ。

「でも、本当にお前も藍越でいいのか？ もっと他の高校を調べてからでも」

「この家から通える距離にある。校風は自由。学費も安い。そして、お前や枝理達が目指している学園だ。他を選ぶ理由はない」
「なら、いいんだけどな」

ラウラの学費については、軍隊にいた頃もらっていた給料を切り崩すつもりらしい。自分のためにほとんどお金を使つてこなかったので、たっぷり貯蓄が残つているとのこと。

千冬姉は中学や高校くらいただで通わせてやると言っていたが、ラウラが譲らないので彼女本人が払うことになっている。そこは最低限のけじめなのだ、強く訴えていた。

「しかし、ラウラは頭いいよなあ」

春まで軍隊にいて、日本の学校に通い始めてから1ヶ月も経っていない。

だというのに期末試験の成績は結構よかったし、数学なんかは学年でも上位に食いこんでいた。

文系科目は得意じゃないみたいだけど、そこも時間が経てば解消されていくんじゃないかと思う。俺も置いてかれないように頑張らな

いと。

「急に褒められると、戸惑うな」

「事実だしな」

互いに言葉を交わしながらも、それぞれ問題を解いたりテキストを読みこむ作業を続ける。

「……褒めるついでに」

ふと、ラウラのシャーペンを動かす手が止まった。

気になったので顔を見ると、視線がせわしくなくあっちこっちに動いている。

「褒めるついでに、撫でてくれないか。頭」

それはひよんな出来事から始まった、通算何回目かのお願いだっ

た。

「毎度毎度、そんなに照れなくてもいいと思うんだが」

「……うるさい」

「ほら、なでなで」

「ひうつ!? い、いきなり始めるな!」

頬を染めながら抗議の声をあげるラウラを無視して、小さな頭を優しく撫でる。

もとは俺の突発的衝動がきっかけだったこの行為だが、あれ以降は不定期にラウラが求めてきて、俺が応える感じになっている。

自分から頼むくせに撫でられることにいまだ抵抗があるらしい彼女の態度がいじらしく、ついつい積極的に動いてしまうのだ。でも、実際のところはこっちも結構恥ずかしい。

「しかし、本当にきれいな髪だよな」

「特別な手入れは何もしていないのだが……」

相変わらずの触り心地のよさ。ほのかに漂うシャンプーの香りが、いい具合に鼻腔をくすぐる。匂いを嗅ぐなんて行為は、変態チックなのでさすがにしない。

「そういえば、シャンプー変えたんだよな」

「ああ。花梨に薦められてな」

数日前まで俺や千冬姉と同じものを共有していたんだが、気がついたら浴槽にシャンプーの容器がひとつ増えていた。個人的には、こっちの香りの方がラウラに合っているように思える。

「……不思議なものだ」

さわさわと右手を動かし続けていると、ラウラが感慨深げなため息とともにぼつりつぶやきを漏らした。

「不思議？」

「ただ頭を撫でられているだけなのに、どうしてこうも心が落ち着くのだろう」

「そんなにいいのか」

「でなければ、何度も頼んだりはしない」

そう言つて、ラウラは困つたように笑う。自分でも抑えがきかないとか、そんな感じなのだろうか。

「ちなみに、他の人に撫でてもらったりしたことはあるのか？」

ふと気になったので、率直に尋ねてみた。

「……………」

「あれ？　なんか変なこと聞いたか？」

なぜか呆れたような顔をされてしまったので、少し困惑する。

「こんな恥をしのばなければならぬこと、お前以外に頼むわけがないだろう」

「あ…………そ、そうか」

ぶつきらぼうな口調で、そっぽを向いて答えるラウラ。心なしか、耳が赤くなっていた。

そうか、俺だけに撫でもらってるのか。

…………なぜかはわからないけど、うれしいことだと思ふ自分がいた。「おっ」

ちょうどその時、玄関の鍵が開けられる音が聞こえてきた。

同僚の先生とお茶をしてくると言って、昼前に出かけた千冬姉が帰ってきたのだろう。

今回のなでなではここまでだな。

そう思つてラウラの頭から手を離すと、彼女は名残惜しそうに俺の手の動きを見つめていた。

でもそれも一瞬のことで、千冬姉がリビングに入ってくると笑顔で出迎えていた。

「おかえりなさい、姉さん」

「おかえり」

「ただいま。勉強していたのか、感心だな」

満足げに微笑みながら、千冬姉はこじやれた模様入りの紙箱を机の上に置いた。

「行ってきたカフェのケーキがおいしかったから、お前達にも買ってきた」

「おお、ケーキか！　ちょうど甘い物が欲しかったところなんだ」

「ありがとうございます」

時計を見るともうすぐ3時になるし、一息入れるとしよう。おやつ
のケーキをいただいて英気を養うのである。

「そういえば、同僚の先生ってどんな人なんだ？」

「IS学園に行く以前から面識のあった女性だ。年下だが、教師としてはあちらが先輩だな」

「へえ。IS学園の先生やってるってことは、その人もすごかったりするのか」

「日本の代表候補生だった時期もあるほどの実力者だ。ただ、普段は多少気が弱すぎるのが弱点だな」

代表候補生って、あれだよな。字面からしてトップクラスの実力者ってことだよな。

うーん、やっぱり俺とは住む世界が違う感じがする。

「IS学園って、職員にも男の人はいないのか？」

「教職員は全員女性だが、一部の用務員などは男性だ」

「そっか。じゃあまるつきり出会いの可能性がないわけじゃないんだな」

「……全員のいい歳したオジサマ達だがな」

「ありや、それは残念。」

「一夏は本当に姉さんの恋愛事情を気にしているのだな」

「そりやあ心配もするだろ。今まで彼氏のひとりもできたことないんだぜ？」

「だが、半端な男なら姉さんと付き合うことを認めないのだろうか？」

「当然だ。俺が任せられると判断した人じゃないと駄目だ」

「面倒くさいなこの弟は……」

肩をすくめてため息をつく千冬姉。そんなこと言っても、放っておいたら一生独身で過ごしてしまいそうな生活を送っているそっちにも責任はあるんだぞ？

「しかし、代表候補生ですか。生徒にも一定数はいるのでしよう？」

「そうだな。私が担当しているクラスにも、生意気なのがひとりいる。粗削りな部分も多いが、実力は確かだ。順調に伸びるといいのだが」
「なるほど」

一方ラウラは、千冬姉からIS学園の生徒についての話を聞いていた。

ISに関する話題も問題ないらしく、最近はよくこういった会話をしているのを耳にする。

千冬姉もそんなラウラの態度がうれしいのか、普段よりも饒舌気味に答えるのがお決まりになっていた。

*

そうこうしているうちに夏休みに入った。

3年に進級した時点でかなり量を減らしていたアルバイトも完全に辞めて、いよいよ受験勉強に本腰を入れる時期がやってきたのである。

毎日毎日、長時間机に向かってテキストを読んだり問題を解いたり

する日々の繰り返し。もちろん、食べて風呂入って寝る時間以外は全部勉強！なんて極端なことはしていないが……普通の中学生にとっては、十二分に辛い。

「ホント、だるいよなー」

「まあまあ。そういう日頃の鬱憤を晴らすために祭りに来たんだし、今日は受験の話はなしにしようぜ」

「ん、そうだな」

虚空に向かってつぶやく弾を諭すと、あつちも気持ちを切り替えて明るい表情になった。

夏休みも折り返し近くに差し掛かった8月中盤。毎年この時期に近所の神社で開催される夏祭りに、俺達は足を運んでいた。

すでに夕陽が沈んでからそこそこ時間が経っており、境内のあたりはどんどん人が増え始めている。

その人混みをきよろきよろ眺めながら、数馬が口を開いた。

「女子達はまだかねえ」

「あつちは浴衣着てくるんだろ？ 多少時間がかかるのは仕方ないさ」

待ち合わせをしているのは、灯下さん、人里さん、中入江さんと、そしてラウラ。

なぜ同じ家に住んでいる俺とラウラが一緒に来ていないのかというと、彼女の浴衣選びを女子達が手伝いたいとお願いしてきたのが発端である。

初めて日本で夏を過ごすラウラは、当たり前だが浴衣を持っていなかった。最初は事前に俺と2人で買いに行こうということになっていたのだが、話を聞いた灯下さん達が任せろと言ってきたので予定変更。ちよつと慌ただしいが、当日の昼間に買って祭りでお披露目、という形になったのだ。

なので俺も、ラウラがどんな姿でやって来るのかはまったくわからないのだが……

「お、あれじゃないか？」

「みたいだな。おーい！」

まだ見ぬ妹分の浴衣姿に思いを馳せていると、弾と数馬が彼女達を発見したらしい。

「ちよつと遅れちゃったね。ごめんなさい」

人の波を抜けて、謝りながら人里さんが現れる。それに続くように、残りの3人も次々と出てきた。

「おおつ、これは……!」

「毎年見てるけど、やっぱり女子の浴衣はいいなあ」

「そのふたりー、あんまり露骨にジロジロ見ると引いちゃうよ?」
夏にしか見られない服装を目にして鼻の下を伸ばす弾と数馬に対して、灯下さんから厳しいお言葉が飛んできた。

でも実際、2人の行動を馬鹿にできないくらい、彼女達の浴衣姿はよく似合っていた。

その中でも特に俺の目をひいたのは、やっぱり。

「どうだ一夏。似合っているか」

ちよつとはしゃいだ風に尋ねてくる、透き通った白い肌を持つ少女。

3人が派手目の色の浴衣を着ているのに対し、彼女は花柄で彩られた濃い藍色のものを身につけていた。落ち着いた色合いが、彼女自身のイメージに合っていてとてもいい。

いつもは真っ直ぐ伸ばしている銀色の髪は、頭の上でおだんごヘアにまとめられていた。

「……………」

普段とまったく異なる新鮮な姿に、思わず言葉を失ってしまう。

「一夏?」

「ああ……うん。すごく似合ってるぞ。その、きれいだ」

「ふふ、そうだろう。3人が頑張って用意してくれたのだ」

「ラウラちゃんは元がいいから、おしやれのしがいがあるんだよね」
満足げな表情を浮かべるラウラと灯下さん。褒めてもらえてうれしいようだ。

……でも本当に、思わずドキツとしてしまうくらいきれいだ。

「男子は相変わらず地味な格好だね」

「毎年のことなんだから、気にしないでよ」

思いつきり普段着の俺達に人里さんがツツコミを入れるが、数馬が苦笑を浮かべながら軽く流した。

ラウラを除くこの6人は、中学に入ってから毎年一緒に夏祭りに来ている。理由は2つのグループにまたがって存在していた女の子がいたから。当人は引越してしまっただけ、彼女が作ったつながりは今年も健在だ。

「いつまでも立ち止まってないで、そろそろ移動しないか？」

弾の呼びかけに従って、俺達は思い思いにしゃべりながらゆっくり歩き出した。

*

パン、とコルク銃から弾丸が発射される。

3等の的が倒れる。

パン、とコルク銃から弾丸が発射される。

2等の的が倒れる。

パン、とコルク銃から弾丸が発射される。

1等の的が倒れる。

「ほら、全弾命中だ」

「くうく、もってけドロボー！」

コルク銃を返還するラウラと、悲鳴をあげながら景品を手渡す射的屋のおじさん。

「すごいなお前」

「この程度、造作もない。それより、ルールを守っただけなのになぜ泥棒呼ばわりされたのだ？」

「ははっ、あれはノリみたいなものだから気にするな」

不思議そうに首をかしげる彼女に対して説明しながら、とぼとぼと倒れた的を戻しに向かうおじさんの背中を眺める。……景品コーナーの顔ぶれ、随分寂しくなったな。

「うわ、このソフト俺が5000円払って買ったやつだ」

「弾だと手に入れるのに5000円かかるところを2000円ですつたわけだな」

「ラウラちゃんうますぎでしょ！ スナイパーだよスナイパー！」

「あ、ああ。射撃には自信があるからな」

盛り上がるギャラリーにちよつと面食らいながらも、笑顔を返すラウラだった。元軍人の面目躍如つてところだろうか。

「次は輪投げでもやってみるか？」

「ん、どんな遊びだ？」

「行けばわかるよ」

その後もいろんな屋台をまわって、ラウラは景品をゲットし続けた。ちよつとした祭り荒らしである。

「おい坊主。なんでお前が連れてくるお嬢ちゃんは決まってああなんだ」

げつそりした顔で恨み言を吐いてきたのは、2件目の射的屋の店主。そういえば、鈴のやつもこういう遊びは大の得意だったよな。

「えらく大荷物になっちまったな」

「すまない。少し手加減するべきだったか」

「いいんだよ、祭りは楽しんでナンボだ」

「そうか。……うむ、この飴は甘くてうまい」

リング飴をぺろぺろと舐めながら歩く姿を見ると、なんだか心が癒される。

初めて会った時からは想像もできなかった光景だ。普通に喜怒哀楽を顔に出して、普通に学校に通って、普通に友達を作って。

「……あれ」

そこまで考えたところで、その友達の姿が見えないことに気づいた。

俺達2人は最前列を歩いていたはずだが、どこかではぐれてしまったらしい。

ラウラも事態を把握したようで、俺の判断を仰ぐようにこちらを見る。

「とりあえず、ちよつと休憩するか」

こうも周りが騒がしいと、電話しても声が聞きとりづらいだろう。屋台が並ぶ通りを外れて、俺達は人の少ない場所まで移動する。ちようどいいところに芝生があったので、そこに腰を下ろした。「歩きっぱなしだったし、休むにはいいタイミングだったかもな」とりあえず弾に電話したところ、ここから結構離れたところにいることがわかった。

向こうがこっちに来てくれるらしいので、しばらくゆっくりしていよう。

「足、痛くないか」

「ん……少し、親指の付け根辺りが。だが大したことはない」

「下駄なんて初めてだろうからな」

鼻緒でこすれてしまったのだろう。

下駄を脱いでもらって確認したところ、それほど足が赤くなっていたわけでもないので大丈夫っぽい。

「あんまり痛いようだったら、また言ってくれ」

「ああ」

そう答えて、微笑みを浮かべるラウラ。

「……………」

「どうかしたか？ ジロジロと見て」

「いや、今さらなんだけどさ……本当、よく笑うようになったって」人形のようにだと評していた頃が、もはや懐かしいくらいだ。

変わったと思う。もちろん、いい意味で。

「お前のおかげだ」

目を細めて、ラウラは俺の瞳を見つめ返す。

なんていうか、今までにないほど優しい声だった。

「あの日のお前の言葉が、私を救ってくれた」

あの日、か。

ラウラを外に連れ出し、女子達に振り回されて、最後に公園に行くて。

そこでの会話が、俺達の距離を大きく変えた。

「わからないことの方が多かった。初対面の私に楽しそうに話しかけ

てくる枝理達、それを後ろから見ているだけの弾と数馬。そして、私にあんなことを言ってきた一夏。みな、その意図が理解できないものばかりだった」

「でも、お前は俺の言葉に応えてくれた」

「……不思議と、響いてきたのだ。その理解できない言葉が」

空を見上げる彼女につられ、俺も頭上に広がる星空を眺める。

雲ひとつないおかげで、元気よく輝く星達がたくさん見えた。

「知りたいと思った。お前や姉さんのこと、周りの人間のこと。だから私は、いろいろなものに目を向けようと決めた。理解できないものを、理解するために」

「それで、どうだった？」

お互いに、相手の顔は視界に入っていない。

それでも俺は、多分ラウラは穏やかな表情をしているんだろうなと、なんとなくわかった。

「なかなか、わかってきた気がする」

「そうか。よかった」

「そうだな……よかった」

そこでいったん、会話が止まる。

しばらくの間、2人とも無言で空を見つめていた。

「一夏」

「ん？」

沈黙を破ったのは、さつきよりもなんだか弱々しいラウラの声だった。

「私は、ここにいていいのだろうか」

びっくりして、ほとんど反射で彼女の方に振り向いた。

向こうも、俺の顔をじつと見つめている。冗談とかではなく、真剣な眼差しだった。

「ここは……織斑の家は、居心地がよすぎる。それゆえに、考えてしまうのだ。今の時間は、何かの間違いで生まれたものではないのかと。夢みたいなものではないのかと」

「ラウラ……」

不安を隠せない顔つきを見た途端、気づけば俺の口は勝手に動いていた。

「そんなわけないだろ。お前はもう、織斑家の一員だ。心配なんてしないで、ずっとここにいればいい」

「本当か」

「本当だ」

「本当に、本当か」

「何度聞いても同じだぞ。本当だ——っ!？」

本当に、突然だった。

念を押すようなラウラの問いにうなずいた瞬間、右肩に重みを感じた。

「安心した」

彼女が、俺に体を預けている。

もたれかかって、頭を俺の肩にくっつけていた。

「ら、ラウラ?」

「撫でて、ほしい」

どぎまぎしている俺に向かって、ラウラは甘い声でお願いをしてくる。

密着具合はかなりのもので、女の子特有の香りがさらに心臓の鼓動を速めていた。

「……………」

本当は、もっといろいろ考えるべきことがあるんだと思う。

ラウラには、進む道がきつといくつもある。心の傷が完全に癒えたら、ドイツに戻るといふ選択肢だつてある。

今まで一緒に過ごしてきて、彼女には特別な才能があるのもなんとなくわかつている。俺のような普通の中学生以上に、たくさんの可能性を持っている。

だから、今の穏やかな日々はどこかで終わってしまうのかもしれない。

「一夏?」

でもこの時の俺は、そういう頭を使うようなことは全然考えられない。

くて。

「ああ、わかった」

いつものように、ラウラの頭を優しく撫でる。違うのは、彼女の髪型と近づき具合だけ。

だというのに、俺はどうしようもなくドキドキしてしまっていた。

逆に、普段照れている彼女の方は、ものすごく安らいだ感じの表情を浮かべている。

「やはり……お前の手は、落ち着く」

こっちは全然落ち着けない。

いつもは見えないラウラのうなじに視線を向けただけで、また体温が上がった気がした。

「そ、そうか」

体が熱い。

火照った頭は、とりとめのない思考を組み上げようとしては消し去っていく。

そんな状態の俺は、ただ隣の少女の温もりを感じているだけだった。

——ほどなくして弾達が到着し、俺達は寄り添っている姿をバツチリ目撃された。めっちゃくちゃ冷やかされて恥ずかしい思いをしたのだが、それはまた別の話。

関係

中学最後の夏休みが終わり、新学期に入った。

この時期になると、生徒達は10月頭に控えた文化祭の準備に追われて忙しい日々を送るのが通例だ。それは受験を控えた3年生も例外ではなく、むしろ最後の思い出づくりにしようとする張り切っているメンバーも多い。

「やっぱり美人だよねえ、この子」

「セシリア・オルコットかあ。この見た目のよさに加えて代表候補生って、神様は不公平よね」

休み時間にぼんやり周囲を眺めていると、ラウラの席を取り囲む形で人里さん達が集まっているのが目に留まった。どうやら誰かが持ってきたらしい雑誌の中身について話してるみたいだ。

別に盗み聞きの意味があるわけじゃないんだが、他にやることがないのもあって勝手に会話が耳に入ってきた。

「イギリスの代表候補生か……」

「ん？ ラウラちゃんどうかした？」

「いや、以前このセシリア・オルコットの試合映像を見たことがあるのだが、基本的に忠実なスタイルという印象だったのだ。だから苦労するかもしれないと思ってな」

「どういこと？」

目をぱちくりさせながら尋ねる灯下さんに対し、ラウラは淡々と自分の考えを述べる。

「イギリスの機体は、基本的に最新技術重視で少々トリッキーなものが多い。決してバランスを軽視しているわけではないのだが、この者には合わない可能性があるということだ」

「へえ、そうなんだ。じゃあバランスが取れてるのはどこの国？」

「やはりラファールを開発したフランスだろう。他には、中国も機体全体の安定性に気を遣っているように思える」

「なるほどー」

ぱちぱちと小さく拍手を鳴らす灯下さん。人里さんと中入江さん

も、感心したような顔つきでラウラを見つめていた。

「ラウラちゃん、ISに詳しいんだ」

「なんか先生みたいだったよ」

「……まあ、ISについてはいろいろと興味があつてな」

昔ISを動かしていたという事実は伏せて、誤魔化すような笑みを浮かべるラウラ。

「空を自由に飛び回ることが出来る。あれは、素晴らしい発明だ」けれど、決して嘘を言っているわけではないように見えた。

今の感慨深い表情は、彼女のISに対する本心を表している。俺にはそう思えた。

「おーい、一夏」

ちょうどその時、トイレから帰ってきた弾が俺の席にやって来た。

トイレというのは推測にすぎないが、授業が終わった瞬間廊下に急いで飛び出していたので間違いないんじゃないかと思う。

「どうした」

「お前、文化祭の劇で何やるつもりだ？」

うちのクラスは、文化祭の出し物で劇をやることになっている。題目は、先日のホームルームでの話し合いにより『シンデレラ』に決まった。

「何って……普通に裏方かな。演技苦手だし」

「つまんねー回答だな。王子様やれよ、王子様」

「はあ？　なんで俺が」

「だって、シンデレラ役はラウラちゃんになりそうなんだぞ？」

抗議の声をあげようとしたら、それを遮る形で驚きの事実を伝えられた。

「マジか」

「だって見た目ぴったりだろ。シンデレラって西洋の雰囲気たつぷりの話だし。あの子を推薦しようって奴、かなり多いぜ」

「そうなのか……でも、それと俺が王子様をやるのとは関係なくないか」

確かに俺も、外見だけならラウラがシンデレラ役をやるのに異論は

ない。

けど、だからといって俺まで主役級を担当する必要はないはず。

という考えを素直に言うと、弾にニヤニヤしながらこう返された。

「いいのカー？ 劇とはいえ、ラウラちゃんと他の男子が結ばれるんだぞ？」

「劇なんだから当たり前だろ」

「本当にいいのカー？ 嫉妬とかない？ なら俺立候補しようと思うんだが」

「む……」

何度も念を押されるように尋ねられたので、心の中でよく考えてみる。

ラウラが、他の男子と……

あれ。なんか腑に落ちない感じがする。

*

改めて振り返ると、そういう素振りは何度も見せていたような気がする。

IS学園の授業の内容や生徒について、千冬姉によく尋ねていたこと。

学校からの帰りに本屋に寄ると、俺が漫画の新刊を探している間は、大抵IS関連の雑誌の前に立っていたこと。

「なあ、ラウラ」

秋の涼しさを感じ始めた木曜日の夜。

リビングのソファに座るラウラの膝の上には、『インフィニット・ストライプス』というタイトルの雑誌が広げられていた。

「どうした？」

「その雑誌って、ISの特集してるやつだよな」

「ああ。ただ、どちらかというとISそのものではなくISに乗る人間の方について詳しく書かれている。今回も一番大きな記事はイギリスの代表候補生に関するものだ」

俺が声をかけると、彼女は雑誌から視線を上げて丁寧に説明をしてくれた。

「ちよつと聞きたいんだが」

ラウラが初めて家にやって来た日。俺は千冬姉から、ラウラの前でISの話はしないようにと頼まれた。理由は、彼女の傷ついた心をむやみに刺激しないため。

……時が経つにつれて、ラウラは自分からISについての話題を口にするようになった。

もちろんそれは、彼女の心がある程度癒えた証拠なんだと思う。辛い記憶を連想させてしまう言葉に対して、怖がることなくなったんだろう。

でも、単純にそれだけじゃない気がする。これだけ積極的にISの情報を仕入れているということは、ラウラにとってのISは、ただの嫌な思い出の代名詞などではなくて。

「好きなのか？ IS」

向かいの椅子に腰を下ろし、ラウラの目を見て尋ねる。

俺の質問に対して、彼女は少しの間目を伏せ、それから微笑を浮かべて口を開いた。

「そうだな。はつきり言ってしまうえば、好きということになるのだろう」

返ってきたのは、肯定の言葉。

「軍にいた頃から、私はISというものが気に入っていた。ただ、なぜ気に入っていたのか、本当の理由を知ったのはここに来てからだ」

「本当の理由？」

「最初は、画期的なまでに優れた兵器だから魅力的に感じたのだと思っていた。だが奇妙なことに、軍を離れた今も私はISに興味を抱き続けている。もはや、兵器としての性能など気にしていないというのに」

軍の人間として、使える兵器を好きになったわけじゃなかった。そういうことだろうか。

だとすると、ラウラがISを好む理由というのは。

「単純な感情だったのだ。あれだけの動きを人間にとって可能にした存在に、自由というものを感じ、魅了された。きつとそれだけなのだろう」

「それは、俺もわかるかもしれない。ISってすごいもんな」

人生で一度くらいは乗ってみたいと思うけど、あれは男には動かせないからどうしようもないんだよな。東さんも、その辺なんとかしてくれればいいのに。そんなことを考えた回数も結構多い。

「夏もわかってくれるか」

俺の反応を見て、ラウラは心底喜んでるようだった。気持ちを共有できる仲間ができてうれしいのかもしれない。

……こいつは、本当にISが好きなんだろう。

「なら」

頭の中に浮かんだ、ひとつの考え。

それは、もしラウラがISに関心を持っているのならば、ずっと俺の心の中でくすぶっていたものだった。

「IS学園に行くとか、どうだ」

言った瞬間、ラウラの瞳が驚きに染まるのが見て取れた。それくらい、唐突な提案だったと自分でも思う。

「本気で好きなら、追っかけてみるのもいいんじゃないか？ もちろん、事故で満足に力を出し切れないのは知ってるけど……パイロットだけじゃなくて、整備士も育てるんだろ、あそこ。そっちに興味があるんなら」

「……………」

俺の言葉が途切れるまで、ラウラは黙って話に耳を傾けていた。

そして、全部聞いたうえで答えを返す。

「確かに、整備や研究方面に興味がないわけではない。それに実際のところをいえば、実技でもそこそこに動ける自信は今でもある。あくまでそこそこであって、上の連中に通用することはないがな」

「だったら」

「だが、行くつもりはない」

きつぱりと、彼女はそう断言した。すました顔で、はつきりと。

「今は、お前達と一緒にいたい。だから、藍越以外を選ぶことはない」
「……そうか」

真面目な表情を崩して、穏やかに笑うラウラ。それにつられて、俺も笑い返した。

でも、引つかりはとれないままだ。むしろ今のやりとりで、余計に大きくなってしまった。

……ラウラが笑うまでの、ほんの少しの間。

彼女がどこか寂しげな、まるで何かを諦めるような顔をしていたのを、俺は見逃さなかった。

*

「千冬姉。聞きたいことがあるんだけど、いいか」

土曜日の昼下がり。

ラウラが自分の部屋に戻っている間を見計らって、俺はリビングでコーヒーを飲んでいる千冬姉に話しかけた。

「どうした、改まって」

「ラウラのことなんだけど……あいつが今から準備したとして、IS学園の入試に合格することってできるのか？」

木・金の2日間で、できる限りIS学園について調べてみた。

それで、見た限りではラウラが通うのに特に問題があるようには思えなかった。

だから、今こうして千冬姉に相談している。

「あくまで、一教員としての意見にすぎないが」

コーヒーカーップをソーサーに置いた千冬姉は、俺を見据えてゆっくりと息を吐いた。

「十分パスできるだろう。もともとISに関する知識は豊富で、実力のほども入試レベルであれば問題ないと言っていい。……だが、なぜそんなことを聞く？」

「それは……」

「ラウラに、IS学園に行ってほしいのか」

返答の仕方に悩んでいると、千冬姉が全部見越したような問いを投げかけてきた。

一番大事な核心の部分を話せと、そう言っているのだろう。

「俺は」

だから俺も、考えに考えた末の結論を素直に述べる。

「あいつのためになるのなら、行くべきだと思う」

一昨日、IS学園ではなく藍越を選ぶと言った時に、ラウラが見せた表情。

あれが、彼女のISについて学びたいという気持ちの表れだとしたら。

「確かに、俺達とは別々の学校になっちまう。IS学園は全寮制だから、この家にもいられなくなる。俺だってそれは寂しいし、嫌だ」

もうすぐ、ラウラと暮らし始めて半年になる。

15年生きてきた中での、たった半年。だけどその半年で、俺にとっては彼女がいる生活が当たり前になっていった。

その当たり前を失うのは、やっぱり辛い。

「でも学校が違うからって、一生の別れになるわけじゃない。休みの日に会うことくらいはできるんだ。だったらそこは我慢して、授業内容の違いを考えたほうがいい」

藍越とIS学園じゃ、やることが全然違う。

これは、休みの日に融通をきかせるとか、そういうことでどうにかなるような問題ではない。

「だから——」

締め言葉、俺は最後まで口にすることができなかった。リビングのドアあたりで、何か物音が聞こえてきたからだ。

「あ……」

振り返ると、彼女がいた。

壁に寄りかかって、弱々しい瞳で俺を見つめるその少女は、悲しげな顔でゆっくりと口を開く。

「……夏は、私と一緒にいたくないのか」

いつからそこにいたのか、詳しいところはわからない。

けれど、今の話の大事な部分は、確かにラウラに聞かれてしまった。それだけははつきりとしている。

「違う。俺だって、お前と会える時間が減るのは嫌に決まってる。でも全然会えなくなるわけじゃないんだし、ラウラがやりたいことを考えるのなら」

「もういい!!」

ここまで声を張り上げた彼女を見るのは、本当に初めてだった。肩を震わせ、拳を握りしめ、顔をうつむけ。

それでもあふれ出してくる激情に、俺は気圧されるだけ。

「ずっとここにいればいいと、言ってくれたではないか」

思い出すのは、夏祭りで2人きりになったあの時間。

不安な様子を隠せないラウラに対して、俺は確かにその言葉を口にしていた。

でもそれは、物事を深く考えることもなく、ただ彼女の寂しそうな顔を消し去りたい一心で出たもので。

「失いたくない……」

無責任。

重い3文字の言葉が、心にのしかかってくるような気分だった。

「外に出てくる……!」

「お、おいっ」

俺の制止を聞くことなく、廊下へ出たラウラはそのまま家から飛び出してしまった。

玄関のドアが叩きつけられるように閉じる音が、痛いほど耳に残る。

「……最低だ」

残された俺は、後悔と自己嫌悪でいっぱいになった感情を吐き出すことしかできない。

傷つけてしまった。もう繰り返さないと強く思ったのに、また俺は間違えてしまった。

「こんなんじゃ、兄貴失格だよな」

ずっと静観していた千冬姉に向かって、同意を求めるように尋ね

る。

俺はラウラのことを、妹みたいなものだと考えていた。だから兄貴分として、あいつの進路はよく考えてやるべきだと思っていた。

……勝手にあいつのことを思いやった気になって、それで辛い思いをさせてしまうんじゃない。本当に救いようがない。

「……ひとつ、思うことがある」

千冬姉の返事は、肯定でも否定でもなかった。

ただ真剣な眼差しで、俺に鋭い視線を送り続けている。

「兄である必要は、あるのか」

「えっ……？」

「お前とあの子の関係を、その枠に無理にはめこむ必要はあるのか」

それは、予想すらしていなかった問いだった。

意図を理解できない俺に向かって、千冬姉はさらに言葉を続ける。

「お前はまだ若い。確かに、兄としてラウラを導くことは難しいのかもしれない」

「……………」

「だが、並んで歩くことならどうだ？」

並んで、歩く。

ラウラの前に立つのではなく、隣に。

それがどういふことを考えて……俺は、自分の体が熱を帯びていくのを感じた。

「理解したようだな」

悪戯っぽく笑って、千冬姉は俺の頭を優しく撫でる。

こんなことをされたの、本当に久しぶりだ。でも心地よかった。

「今のラウラは、手に入れたこの場所を失うことを恐れている。決して私達のことを信用していないわけではないのだろうが、それでも不安が拭えないのだ。ここを離れば、すべてを失ってしまうのではないかと」

「そんなこと……」

そんなこと、あるわけがない。

ラウラがこの家を出て行ったとしても、俺はあいつとの関係を断つ

つもりなんて毛頭ない。それは、千冬姉やあいつの友達だって同じなはずだ。

「だから、その不安を取り除いてやれ。言葉だけで足りないのなら、行動で示せ。そして、そのうえであいつに答えを出してもらえばいい」俺が今、何をなすべきなのか。

その道しるべを、千冬姉は与えてくれた。まさにこれが、姉の仕事というやつなのだろう。

俺には、こんな格好のいい真似はできない。

でも、何もできないわけでもない。

「さて、どうする？ お前が行かないのなら、私がラウラを迎えに行くが」

「いや。俺が行く」

俺がきつかけで起きたことだ。俺がなんとかしたい。

それになんとなく、この役目は誰にも譲りたくないと思えた。

「なら急げ。早くしないと日が暮れてしまう」

「ああ、行つてくる！」

千冬姉の言葉を背に、俺は靴を履いて玄関から勢いよく足を踏み出した。

すぐに駆け出し、移動しながらラウラの姿を探し求める。

「あいつ、足速いからな……！」

運動神経がいいから、今頃どこまで行っているのかわかったもんじゃない。

かたや俺は、ちよつと走っただけでもう息が乱れ始めている。

「鈍りすぎだろ」

バイト辞めて机に向かっていた弊害を、こんなところで痛感する。受験生だから仕方ないとはいえ、もどかしいことこのうえない。

「くそっ！」

泣き言を言っている場合じゃない。

体力が落ちていようが、今はただ走り続けるのみ。

*

そうして足を動かし続けて、何分経っただろうか。

「ぜー、ぜー」

坂道を勢いよく登りきったところで、完全に息が切れてしまった。今まで休むことなく働いていた下半身が、ついに限界を迎える。

「はあ、はあ」

でも、十分だ。

息を整えながら、俺は視線の先にあるものを真っ直ぐ見つめる。

「……いた」

夕陽が照りつける高台の公園。俺と彼女が初めて心を通わせた場所。

その一番奥、街をもっともよく見渡せる位置で、銀色の髪が風になびいていた。

そこから見える景色を眺めているであろう彼女には、背後にいる俺の姿はまだ認識できていないはず。

「ラウラ」

声をかけた瞬間、彼女の肩がびくりと震えた。

「く、来るな」

「嫌だ」

拒否されるのはある程度予想していたので、ためらうことなく前に進む。

こちらを振り向いた彼女は、悲痛な表情で俺に訴え続ける。

「駄目だ。今お前と話したら、また物わがりの悪いことを言ってしまう」

一歩、また一歩。俺はラウラに近づいていく。

「わかっている。わかっているんだ。お前が、私のことを思っているからこそ、あんな話をしたのだと。……だが、私にはどうしても耐えられない」

ラウラは、俺に怒っているわけじゃない。俺のことを、信じられないわけじゃない。

「怖いのだ。この場所を失うことが、たまらなく恐ろしいのだ」

そう。ただ彼女は、失うのが怖いだけなんだ。

「お前や姉さんが、どれだけ優しい言葉をかけてくれても、不安が消えない。いつから私は、ここまで弱くなってしまうたのだろうな」

自嘲の笑みを浮かべて、彼女は声を震わせる。

そんな表情、俺は見たくなかった。

「ごめん」

責任は、俺にある。考えなしに口を開いた、俺に。

……もう、ラウラとの距離はほとんど残ってない。濡れた瞳を、しつかり見ることができる。

「一夏は悪くない。悪いのは」

ついに、彼女の目の前にまでやって来た。

その瞬間、俺は。

「ラウラ」

「……………っ!?!」

声にならない叫び。

それを無視して、俺はラウラを正面から思い切り抱き寄せた。

「俺には、お前の兄は無理みたいだ」

間違えず、妹を導くことができる兄貴には、なれない。

千冬姉に言われて、もう一度よく考えてみた。

俺はラウラを、どう思っているのか。

いい兄貴でいたい——その気持ちの奥に、どんな感情があったのか。

「でも、一緒に歩くことならできる。お前の道案内はできなくても、間違うことがあっても、一緒に悩んで道を選ぶことはできるんだ」

サラサラの髪を撫でた時。ふと彼女の匂いが鼻腔をくすぐった時。

浴衣姿でもたれかかってきた時。

いつも俺はどきどきして、胸の鼓動が高鳴っていた。

それが何を意味するのか。いくら俺が物を知らない中学生でも、いい加減わかる。

「好きだ、お前のこと。妹とか、友達としてじゃない。ひとりの女の子として、好きだ」

「なっ……え、な」

俺の告白に、まともな言葉を返すことができないラウラ。抱きしめているから顔は見えないけど、きつとめちやくちや驚いているんじゃないかと思う。

「ラウラはどうだ？俺のこと、好きか」

「あ、わ、私か？」

「ああ」

ただでさえ人生初の告白をかましている最中だというのに、その告白の相手を抱きしめているおかげで体が恐ろしく熱い。女の子の体って柔らかいとか、そんなことを意識していると本当にどうにかなってしまいそうだ。

「私は、その……お前といると心が安らぐし、お前がそばにいないと時々不安になる。そして、今は経験したことのないほど体が熱を帯びている」

ぼそぼそと、小さな声ではあるが答えてくれるラウラ。

「これを、好きだと言うのなら……私は、お前のが好きなのだと思う」

「そうか。よかった」

腕の力を緩めて、少しだけ距離をとる。

真っ赤になったラウラの顔が、視界に入ってきた。

「なら、付き合ってくれないか。俺と」

「付き合う……恋人になれということか」

「もちろん」

ラウラも俺と同じ気持ちだったことが、本当にうれしい。

両思いなら、付き合ってたってなんの問題もないだろう。

「それは、かまわないが……だが私は、恋人が何をするものなのか、よくわかっていないぞ？」

「そんなの、俺だって同じだ。これから一緒に知っていけばいい」
「なら、いいのだが」

一瞬声が裏返っていたが、OKの返事をもたらえた。

これで俺達は、晴れて恋人同士になったというわけだ。

というわけだ、なんて言ってるけど、実感らしいものはあまり湧いてこない。これからわかってくるものなんだろうか。

「知ってるか？ 恋人っていうのはさ、離れててもお互いを想う気持ちには全然弱まらないらしいんだ」

遠距離恋愛とか、よくある話だしな。月に1回、あるいはもつと少ない頻度でしか会えなくても、彼らは互いに愛し合うことができる。

「だから、そう心配するなよ。ちよつと離れたくらいで、俺がお前を大事に思う気持ちは変わりようがないんだから」

「一夏……」

「もちろん、他のみんなだって同じだ。ちよつとやそつとで、お前を見捨てたりなんてしない」

不安を、恐れを、どこかにやってしまいたい。

その一心で、俺はもう一度ラウラの体を強く抱きしめた。

「本当に、大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。俺を信じてくれ」

「……そうか」

不安げな色を含んでいた彼女の声が、穏やかな調子のものに変わっていく。

「IS学園に行きたいという気持ちは、確かにある。あの場所で学びたいというのは、本当だ」

「ああ」

「別々の進路を選んでも、お前は私を見捨てないか」

「当然だ。離れていたって、一緒に歩くことはできるんだからな」

寂しいようなら、毎日電話したっていい。今の世の中、連絡をとる手段なんていくらでもある。

「それなら……」

今までの兄妹という関係では、届かないものがあつたのだろうか。形はそれらしくても、血がつながっていないという事実は残るし、正式な手続きを踏んだわけでもない。

だから、本物になりきれなかったのかもかもしれない。ラウラの不安を消し去る、確かなものが得られなかったのかもかもしれない。

もちろん、時間をかければまた違った結果になると思う。本物の家族になれる可能性だって、ゼロじゃないと言える。

……ただ、半年という時間では、足りなかったというだけだ。

「それなら、私も選べるかもしれない。離れるという選択肢を」
恋人に血のつながりは必要ない。間違いなく、本物の関係になれるものだ。

そして、彼女はそれを信じてくれた。

そのことが、本当にうれしい。

「ありがとう、一夏。好きだ」

抱きしめていた体を離して、ラウラの表情をうかがう。

……それはもう、このうえないほどの満面の笑みを浮かべていた。どうにも歯止めが効かなくなつて、すぐまた彼女の背中に腕を回してしまふくらいの可愛らしさだった。

*

1週間後。考えを固めたラウラは、千冬姉にIS学園の入試を受けることを報告した。

千冬姉は満足げにうなずくと、ラウラの頭をぽん、と叩いた。頑張れ、という言葉とともに。

そこからは、俺もラウラも受験に向けての準備に明け暮れた。志望校は違つても、勉強が必要なことに変わりはない。

そしてその傍ら、一緒に過ごす時間を大切にすることも忘れなかった。来年の春になれば、毎日同じ家に帰るといふこともなくなつてしまふから。

入試までの半年弱の間、俺達はかけがえのない日々を大事にして。そうして迎えた、次の年の春。

俺は前代未聞の出来事を経験し、思い描いていた人生は大きく形を変えることになる。

『世界で唯一ISを動かせる男』という肩書きとともに。

魔法

『昔々のとある国。シンデレラという名前の、それはそれはかわいいそんな娘がいました』

ナレーシヨンの声とともに、用意されていた照明が一斉にステージ中央を照らし出す。

文化祭本番。数ある体育館のステージイベントのひとつであり、私達3年2組の出し物である『シンデレラ』の演劇の幕開けだ。

「シンデレラ！ まだ廊下の掃除が終わらないの！ こののろま！」
「本当に使えない子ね」

『シンデレラは毎日、意地悪な姉達にこき使われ、馬鹿にされています』
た』

ステージの床を雑巾で拭く私——シンデレラに向かって、偉そうな姉2人が罵倒の言葉を浴びせる。

「ご、ごめんなさいお姉様。もうすぐ終わりますから」
姉の威圧に怯える様子を見せながら、弱々しい声を喉から絞り出す。

先月の話し合いで『多数決により、シンデレラ役はボーデヴィツヒさんに決定です』と宣告されて以降、私は哀れな娘シンデレラを演じる練習を続けてきた。

その成果を出すのが今日。特別なことは何もいらぬ。普段通りに演技を行えばいい。

「まったく、どうしてこんなのが家にいるのかしら」
「私達は舞踏会の準備で忙しいというのに」

金髪のカツラを振り乱しながら、大股で去っていく姉達。

ちなみに演じているのはなぜか弾と数馬だ。女子達が性格悪い女の役はやりたくない和希望した結果、気づいたらあの2人に役が振られていた。本人達はノリノリなので問題はないと思う。

「ああ、なんてこと。今日はお城で舞踏会があるというのに、私はいつも通り掃除をしているだけ」

私はカツラはしていないが、左目にカラーコンタクトを入れてい

る。シンデレラに眼帯を付けさせないための措置だ。

『姉達がお城に出かけ、途方に暮れていたシンデレラ。そんな彼女の前に、魔法使いが現れます』

「どうかしましたか。お嬢さん」

魔法使い役の枝理が、笑みを浮かべて私に語りかける。フードを被っているため、表情のすべては見ることができない。

『シンデレラをかわいそうに思った魔法使いは、魔法で素敵なドレスとかぼちやの馬車を用意してくれました』

10秒ほど照明が落ち、魔法使いが長い呪文を口ずさむ。そうして場をつないでいる間に、私は急いでみすばらしい衣装を脱ぎ捨て、裏方の誰かが持ってきたドレスに着替え、ガラスの靴（という名目の白いヒール）を履く。

やがて照明が明かりを取り戻した時には、鮮やかな格好をしたシンデレラと、かぼちやの馬車（のハリボテ）がステージ上に現れていた。「魔法は12時の鐘とともに解けてしまいますから、注意してくださいね」

魔法使いの忠告を受け、シンデレラはお城の舞踏会に向かう。この舞踏会は、王子の妻を決めるためのものでもあり、国中から美少女が集まっているのだ。

『数々の令嬢の中でも、シンデレラの姿は目立っていました。もちろん、よい意味で』

魔法、か。

持たざる者だったシンデレラの運命は、魔法にかけられたことによつて大きく変わった。

……私と同じだ。そんなことを思った。

言ってみれば、私にとつての魔法は織斑家という存在だ。あの場所で暮らすことで、私はシンデレラと同じく変わることができたのだ。

『そんなシンデレラに、王子が魅入られたのは当然のことでした』

ステージの中央へ、ゆっくりと歩いてくる王子。

役を演じるのは、校内一の天然ジゴロなどという、私を不安がらせる呼び名を持つ男。

「その美しい方。私と、踊っていただけませんか」

恭しく礼をする一夏。大量の観客に緊張しているのか、練習の時よりもしゃべりがぎこちない。

「はい。喜んで」

この配役は、私にとっても喜ばしいものだ。

……一夏は、現実でも私の王子様のようなものだから。

以前そのことを冗談交じりに伝えたら、顔を真っ赤にして照れていた。

そこで無言で抱きしめでもすれば、もつと格好がつくというのに。

『時間を忘れて王子と踊っていたシンデレラですが、気づけばもうすぐ12時。魔法が解けてしまう約束の刻です』

かけられた魔法は、所詮ひと時のものにすぎない。シンデレラの華やかな衣装は、儚くも消え去ってしまう。

『突然王子のもとから逃げ出してしまったシンデレラ。彼女が落としていったガラスの靴を手がかりに、王子は愛する人を探し求めます』
私も同じだ。いつまでも、居心地のいい織斑の家に留まっていられるわけではない。

魔法は、いつか必ず解けてしまう。

『国中を探し回り、王子はついにシンデレラが住む家にたどり着きました』

だが、心配することはない。

「あなただったのですね。あの時の美しい人は」

「……はい」

魔法が消えても、王子様はシンデレラを見捨てない。

真摯に愛して、そばにいてくれる。

『ガラスの靴の持ち主を見つけた王子。2人は誓いのキスをかわし、いつまでも幸せに暮らすのでした』

ステージの中央。悔しがる姉達が見つめる中、シンデレラと王子は互いの顔を接近させる。

もちろん、本当に口づけをかわす予定にはなっていない。これはあくまで、文化祭の演劇に過ぎないのだから。

観客から私達の口の部分が見えないように立ち回り、うまい具合にキスをしているような外形を作り上げる。

それと同時に劇も終演。ステージの幕がゆつくりと降り始めた。

『めでたし、めでたし』

拍手が響く中、私と一夏は互いに視線を絡ませる。

距離が近い。本当に、あと少しで唇と唇が触れてしまうくらい。

だんだんと、体が熱を帯びてくるのを感じる。

「……………」

キスの意味は、知っている。恋人同士が、互いの愛を確かめ合う行為だ。

私と一夏は、恋人関係。だが、キスを行ったことは一度もない。一夏が『まだ心の準備ができていない』と言うからだ。

望まぬ行為を、無理に強要するつもりはない。だから、私は一夏にキスを求めない。

……………でも。

今の私は、ラウラではなくシンデレラ。そして目の前にいるのは、一夏ではなく王子。

少しくらいのわがままは、許されるだろうか。

「王子様」

幕が下がり、私達の上半身が隠れた瞬間。

「んっ」

シンデレラは、王子に向かって一歩踏み出した。

「……………!?!」

驚きようが、息遣いで伝わってくる。

それを無視して、唇を押しつけ続けた。

随分強引なシンデレラだと、我ながらおかしく思う。

「んむっ……………」

周囲の音が、徐々に聞こえなくなる。

柔らかくて、甘くて、しびれるような感触。ずっと貪っていたと思えてしまう、そんな感覚。

それが私の、初めてのキスの味だった。

——もちろん、私達のしたことは舞台袖にいたクラスメイトに一部始終見られており、あとで一夏は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

私達が付き合っているのは事実なのだから、もっと堂々としていればよいのだ。

王子に対する、私の数少ない注文のひとつである。

*

進む学校が違っても、一夏との関係は変わらない。

別々の場所で暮らそうとも、きっと心は離れない。

そう強く思い、私はIS学園へ入学することを決意したのだが。

「あー、緊張した。自己紹介でこんなにどきどきしたの、初めてだ」
4月。

どういうわけか、私と一夏は同じ学園に通っている。

「仕方ないだろう。ISを動かせる男など、今までひとりもいなかったのだから」

まったく、今思っても嘘のような話だ。

まさか一夏が、女にしか扱えないはずのISを起動させられるとは。

そして、一夏自身の身柄の安全のために、IS学園に在籍することになるとは。

……私にかけられた魔法は、まだ解けていないのかもしれない。

一夏にとつては災難以外の何物でもないだろうから、手放しでは喜べないが。

「俺、これからやっていけるのか……?」

「そう落ち込むな。困ったことがあれば、いつでも私が力になってやる」

「ラウラ……お前だけが頼りだ。本当にいてくれてよかった」

入学式直後のホームルームを終えた休み時間。泣き言を漏らす一夏を励ましていると、周囲の連中の好奇の視線が集まってきた。だ

が、それを気にする必要はない。

「……不思議な気分だ」

「不思議？ 何がだ」

「今まで、私はお前に頼ってばかりだったからな。だが今回は、私が頼られる番だ。それが不思議で、なんとなくうれしい。一夏の力になれることが、うれしい」

「ラウラ……ありがとうな。うん、元気出た」

暗い気持ちを捨て去るように、一夏は私に向かって笑いかけた。もう大丈夫だろう。

「よし。じゃあ早速あいさつに行ってくる」

「あいさつ？」

「ああ。あそこの窓際の席にいるの、昔近所に住んでいた幼なじみなんだ。話したことあるよな？ 篠ノ之箒って子のこと」

……ある。すっかり覚えている。

篠ノ之箒。ISを開発した稀代の天才、篠ノ之束の妹で、以前は一夏とよく遊んでいた仲らしい。

彼女との思い出を語る時、一夏は大概うれしそうだった。

「……………」

一夏に注目しているクラスメイトの中で、一際強い視線を送っている女。あれが篠ノ之箒か。

顔立ちは整っており……胸は、かなり大きい。

「待て、私も行く」

「え？ ラウラも？」

「お前の大事な幼なじみだ。きちんとあいさつをしておかなければな」

どうにも胸がもやもやするので、一夏について行くことにした。

「そうか。じゃ、一緒に行くか」

席を立て歩き出す一夏。それに並ぶような形で、私も篠ノ之箒の座る席へ向かう。

あたりをぐるりと見渡すと、ひとりの女生徒と目があつた。見覚えのある顔——イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットだ。

「何が、起きるのだろうか」

意図せず、そんなつぶやきが漏れてしまった。

これから先、様々な出来事が待ち受けているであろうことは、容易に予想できる。

私の隣に立つ男は、それだけ特別な存在になってしまったのだから。

時には、困難な壁が立ちはだかることもあるかもしれない。それこそ、想像もできないような大きな壁が。

だが、それでもきつと、大丈夫だと言える。

2人で並んで、一緒に歩いていけば。

好きな人と、ともにいられれば。

そうだろうか？ 一夏。

番外編 選択

とある夏の日。

ラウラが俺の通う中学に転入してきて、しばらく経ったころ。

「あつっー……」

「なんでこの炎天下の中グラウンドを走り回らなきゃならないんだ？」

「本気で熱中症になりかねんよ、これは」

昼休み直後の5時間目という、もつとも暑さが厳しい時間帯に行われる体育のサッカー。

15分間ボールを追って走り回った後、男子達は給水タイムをとっていた。

俺も弾と数馬と一緒に移動し、おのおの近くに置いていた水筒から水分補給を行ったところだ。

「女子の方はどうなってるかね」

喉をしっかりと潤してコートに戻る途中、弾がもうひとつのコートの方へ視線をやった。

男子よりも先に給水タイムをとっていた女子達は、すでに試合を再開している。男子以上にやる気の有無がはつきり分かれており、積極的にボールを追う人もいればほとんど同じ場所に立ちっぱなしの人もいた。

「おおっ」

その中で、ひときわ目立つ存在がひとつ。

「すごいな、ラウラさん」

「あの距離からシュート入るのか」

コートの中央付近でボールを拾ったラウラが、流れるようなドリブルからあつという間に得点を決めてしまった。

その光景に感心したような声を漏らす数馬と弾。

俺はというと、すごいと思うと同時に、まあこのくらいなら軽々

やっちやうんだろうな、なんて感想も抱いていた。

「さすがというか、なんというか」

以前男3人で襲いかかった時も、軽くあしらわれてしまったし。

小柄な体を補うには十分すぎるほど、運動神経がずば抜けている。

同じチームの女子とハイタッチを交わすラウラを見ながら、いつの間にか俺達は足を止めていた。

「しかし、ああやってスポーツで躍動している女の子はエロい。なあ数馬」

「同意見。普段と髪型が違うのも加算ポイントに入る」

「……そうなのか?」

長い髪が邪魔になるのだろう。体育の時間は、ラウラはいつものストレートを後ろで束ねている。

でも、それだけでエロいという発想に果たして行きつくのだろうか。

「わからないのか一夏。半袖短パンで汗をかく美少女の素晴らしさが」

「ほら、もっとよく見てみる。ラウラさんの体つきを」

がしつと肩と頭を2人につかまれ、視線を固定されてしまった。

「むう……」

確かにラウラは可愛いけど、毎日家と学校で顔を合わせているわけだしなあ。

頑張ってる姿は魅力的だけど、遠くから見ただけでどきつとするこ

とは――

「ラウラちゃんの胸……」

「ラウラさんのふともも……」

「ラウラちゃんのふくらはぎ……」

「み、耳元でささやくな気持ち悪い!」

催眠音声みたいなしやべり方に苦しめられているうちに、コートにいた先生からお呼びがかかったために、この話は打ち切られた。

まったく、2人とも悪乗りがひどい。

*

夏の体育はやっぱり疲れる。

くたくたになって教室に戻ってくると、俺は席について大きく息を吐いた。

「ふうー」

「疲れているようだな。一夏」

頭上から聞きなれた女の子の声が降ってきたので、顔を上げる。

「こう熱いとな……あれ」

声の主は、思った通りラウラだった。

でも、髪型がいつもと違う。

「髪、くくったままなのか」

「ああ、これか？ たまにはこのままで過ごしてみたらどうだと、花梨に言われてな」

「へえ」

今のラウラの髪型は、ストレートではなくポニーテール。サッカーをしていた時と同じだ。

「似合っているか？」

「おう。運動している時以外はいつもおろしてるから、新鮮な感じがする」

「そうか」

うれしそうに笑うラウラ。

「なら、いつものと比べるとどちらがいい」

「え？ そうだな……うーん」

ストレートのラウラと、ポニーテールのラウラか。

銀色の髪がすらつと伸びているのもきれいだが、今みたいに体の動きに合わせてひよこひよこ髪が動くのも可愛い。

どっちがいいと聞かれると……

「まあ、両方同じくらい好きかな。うん」

「同じくらいか。むう」

はつきりした答えが欲しかったのだろうか、ちよつと残念そうな顔

になる。

とはいえ、考えてもなかなか決められないしなあ。

「ねえ」

ちよつと沈黙が続いていたところ、横から割りこんでくる声が。

「灯下さん」

「前から思ってたんだけど、織斑くんはちよつと優柔不断なところがあると思うのよ」

「え、いきなりなに？」

ラウラの隣に立った灯下さんは、椅子に座っている俺を腕を組んだまま見下ろす。

「いきなりじゃないよ。鈴のもどかしい頑張りを見守っている時からずっと思ってたんだから」

「は、はあ」

鈴のもどかしい頑張りってなんだ？　いまいち思い当たる節がないんだが、とりあえず灯下さんはいたって真面目だった。

「ラウラちゃんもそう思うでしょ？」

「わ、私か？　そういうことはよくわからんが……まあ、どちらでもいいと答えることが多いような気がしないでもない」

「だよね」

ラウラにも半分肯定されてしまった。

自分ではそうは思わないんだが、俺って優柔不断なんだろうか。

「というわけで、放課後私がチェックします」

「……………ええ？」

*

6時間目が終わり、迎えた放課後。

「では織斑くん。これから私が出す2択に対してきちんとなんて答えを出してください」

俺の席にやって来た灯下さんの手には、何やらメモらしきものが握られている。

そして、彼女の両脇を固めるように人里さんと中入江さんが立っていた。

「ちゃんと全部答えられたら、優柔不断の汚名は返上ってことで」

「……わかった」

正直あまり乗り気はしないのだが、断らせない威圧感を3人から感じるので素直に従うことにする。

「ラウラちゃん。あそこの4人は何やってんだ？」

「何やら一夏の優柔不断度をチェックするらしいぞ」

「ふーん。面白そうだから俺達も見せてくか」

俺と親しい面子も集まってきて、教室の隅にそこそこ大きな集団ができてしまった。

遠巻きに様子をうかがっているクラスメイトもちらほらという。

「ではまず第1問。ラーメンとおでんはどちらが好き？」

「うーん。ラーメンは味噌がうまいし、でもおでんも具の種類が多くていいよな」

「ちゃんとどつちに決めないと駄目だからね」

「わかってるよ」

急かされても答えは出ない。

じっくり考えて、どちらかを選ぶとするなら。

「ラーメンかな」

「ふむ。ラーメンってことは、こつちに1票ね」

「1票？」

「あ、織斑くんは気にしないでもいいよ」

灯下さんのつぶやきが気になったのだが、人里さんに軽く流されてしまった。

「じゃあ次。中国とドイツはどつちが好き？」

「食べ物次は国か」

ドイツという単語にラウラが反応していたが、過去を恐れるとかそういう態度ではないようなので放っておく。

「どつちもたいして詳しいわけじゃないけど、ドイツかな。国旗がかっこいい」

「理由はどうあれ、答えを出すことが大事だからね」

「今度はこっちに1票つと」

思いつきみたいなの理由だったが、別にOKらしい。相変わらず、何かぶつぶつ言っているのが気にかかるけど。

「第3問。アジア人の女の子と白人の女の子、どっち？」

「……うん？」

なんか、質問の傾向変わってないか。

「ほら、早く早く」

「えーつと。これ、別に答えられなくても優柔不断にはならないような」

「いちいち細かいことは気にしない！」

「ええー……じゃあ、アジア人？ 別に白人だからって差別するわけでもないけどな」

大事なのはそれ以外の部分だし。

フォローの意味もこめてラウラの方を向いて笑いかけると、あっちも微笑みながらうなずいた。わかっているさ、のサインらしい。

「第4問。元気系とクール系、女子の性格としてどっちが好き？」

「また女の子の話？」

「これも一概に一方を選べるような問いじゃないと思うんだが……」

「クール系？ 俺じゃ逆立ちしてもなれない性格だし」

「おー、また並んだ。じゃあ次は……ええと、体型については2人ともアレだから聞かなくてよし」

周囲と相談しながらうんうんとうなずく灯下さん。

「それじゃ、第5問だね」

「まだやるのか？」

「ごめんごめん。これで最後だから」

両手を合わせて謝りながら、彼女は5つ目の質問を口にした。

「ツインテールとストレート。どっちが好き？」

「つて、また髪型の話か」

本当、これに関しては決め難いんだよなあ。

「……なあ、弾。これってやっぱり、そうだよな」

「相当あからさまだしな。完全にあの2人の比較をやってる」

「弾も数馬も、何をぶつぶつ言っているのだ？」

ギャラリーの会話が耳に入ってくるが、あっちもよくわからないことを話していた。

「どっちもいい。じゃ、駄目なんだよな」

「うん」

そうは言っても、髪型なんてその人に似合う形が一番いいんだろうし。

それ単体で好みを選ぶのは、どうにも難しい。

何か、俺にとって『これだ！』と言えるようなお気に入り髪型は

「……あ」

「決まったの？」

3人の顔を見ていて、あることに気づいた。

「いや。灯下さんの髪型なら、迷わず好きって言えるんだけどなーと」

「……え、ええっ!?! 私っ!?!」

サイドポニーって言うんだっか。髪を束ねて、横に垂らしたあの形。

俺の好みと言えば、これだ。どこがどういいのかと聞かれると答えられないけど。

「いいよな、それ」

「えっと、それはどうもありがとう。うん」

自分に話が振られるとは思っていなかったのか、慌てた様子の灯下さん。若干照れているようにも見える。

「そ、そっか。織斑くん、私の髪型が好きなんだ……って、ちがーう!!」

「うおっ」

急に大声出されるとびっくりする。

「そういう風に話を逸らしちゃ駄目！ ちゃんと2択に答えなきゃ」

「えー」

「はい。今の態度がよろしくないなので2問追加です」

「えーっ!?!」

結局、その後もいろいろあつて帰りはだいぶ遅くなつてしまつた。

*

「早く帰つて夕飯の用意しなくちやな」

「大変だつたな。お疲れ様だ」

みんなと別れて、ラウラと2人の帰り道。

今日の献立を頭に浮かべながら、彼女の隣を歩く。

「夕食の準備は、私も手伝うからな」

「ああ、頼りにしてる」

地道に練習を重ねたおかげで、今ではラウラも一人前に料理ができるようになった。まだレパートリーは少ないけど、俺がずっと見張つていなければならぬ状況からは卒業している。

「一夏」

「ん？」

「先ほど、枝理達にいろいろ言われていたようだが……私は、優柔不断でも一夏のことが好きだ」

「……………」

不意打ちに近い、真つ直ぐな言葉と笑顔だつた。

ラウラは本当に、思ったことを素直に口にする。

「ば、馬鹿。面と向かつて照れるようなこと言うな」

「む？ 好きなのに好きと言って何が悪い。あと顔が赤いぞ」

「いや、それはだな」

ラウラの『好き』は、もちろん家族としての『好き』なのだろう。

そうだとわかつていても、思わずドキリとしてしまうのは止められないわけだ。

純真無垢な妹分に理由を説明するのは、なかなか骨が折れる作業だつた。

*

そんな感じの、夏の日の思い出の1ページ。

春休みになって唐突にそれを思い出したのは、今現在俺が置かれている状況が原因だろう。

「一夏。小柄でスレンダーな女とグラマーな女、お前はどちらが好みなのだ？」

2人きりの自宅のリビング。

ソファアームに座って一緒にテレビを見ている最中、小柄な恋人にそんなことを尋ねられた。

「急にどうしたんだよ」

「一般的に、男はスタイルの優れた女に惹かれやすい。お前はどのようなかと思ってるな」

じーっと視線を送ってくる。割と真面目な調子の言葉に、俺はちよつと戸惑った。

「……どっちにも、それぞれのよさがあると思うぞ。うん」

「逃げるな。2択で答えてもらわなければ困る」

「だつてお前、前に言つてただろ。優柔不断な俺も好きだつて」

「時にははつきりとした判断が必要になることもある」

それって果たして今なんだろうか、と思わなくもないのだが。

じりじりと距離を詰めてくるので、言いづらいけど素直な気持ちの口にすることに決めた。

「体型だけで言えば、グラマーな方が好きです」

「……………」

ぴし、とラウラの体が固まった。

……怖い。何が怖いかって、完全に無表情なのがめっちゃ怖い。い。

「えっと、怒ってる？」

恐る恐る様子をうかがうと、彼女はゆっくりと首を横に振った。

「私が無理に聞いたのに、望みの答えを得られなかっただけで怒るのは理不尽が過ぎるだろう」

「そ、そうか」

「だが」

ほっとしたのもつかの間。

なぜかラウラは、ニヤリと笑みを浮かべてさらに距離を詰めてきた。

「ら、ラウラ?」

「この間、枝理達にアドバイスをもらった。たまには積極的に行った方がいい、とな」

「それってどういう——」

身構える俺に対し、ラウラは機敏な動きを披露して。

「……え?」

すとん、と、俺の膝の上に腰を下ろした。

「どうだ。小柄だところこういうこともできるのだ」

「む……」

確かにこれは、すっぽりと膝に収まるお手頃サイズ。この状態でも余裕でテレビ画面が見える。

「だ、抱きしめるのも簡単だぞ」

今度の売り文句は、ちよつと照れ気味だった。

期待に込めて後ろから腕を回すと、女の子の柔らかい感触が全身に伝わってくる。

「……正直、癖になりそう」

「そうだろう、そうだろう。やはりグラマーなど必要な……ひふっ!」

馬鹿、急にくすぐるな、ふふっ」

そのまま番組が終わるまで、ずーつとくっついていちやいちやしていた。

小さな恋人というのも、いいもんだ。

……小さいのがいいと言っても、ロリコンじゃないからな。

織斑千冬の日記

4月15日（月） 晴れ

今日から日記をつけることにした。

特に大層な理由はなく、ただ同僚に薦められたのがきっかけだ。

……さて。早速だが、何を書けばいいものか。

こうして机に向かっているだけでも、特に内容が思い浮かばない。明日に備えてさっさと寝た方がいいのでは、と考えてしまう。

しかし、それでは勢いで買ってしまった日記帳が丸々無駄になる。

それはそれでもつたいないので、やはりどうにかして続けてみることにしよう。

とりあえずは明日、真耶にどんなことを書けばいいのか意見をもらうことにする。

……結構文字数が稼げたので、今日はこれで終わりにするか。

4月16日（火） 晴れ

真耶によると、些細なことでもいいのでその日の出来事や感じたことを書きつければいいらしい。

未来の自分が読み返して、『あー、あの時はこんなことがあったんだなあ』とか思い出にふけることができるような内容が望ましいのと。

……つまり、なんでもいいということだな。

では早速、今日の出来事を振り返るとする。

今日も生徒達が騒がしかった。私を慕ってくれているということ自体に悪い気はしないのだが、もう少しだけTPOをわきまえてもらいたいものだ。学園で千冬お姉様はないだろう、千冬お姉様は。

あとは……そうだ。この学園の食堂は、いい。今日は昼に肉そばを食べたが、おいしかった。

4月17日（水） 雨

相変わらず、一部の生徒がはしゃぎすぎているように思える。まだ

1年生だからと黙認していたが、もう少し厳しい態度をとるべきなのかもしれない。

それはそうとして、家に置いてきた2人はうまくやっているだろうか。

意気消沈しているラウラの姿があまりに痛々しかったため、日本に連れ帰ってしまったのだが……考えるまでもなく、最も負担を強いられることになるのは私でなく一夏だ。

ろくに家にも帰らない。突然見ず知らずの少女の世話を押しつける。まったくひどい姉だ。親の顔が見てみたい。

すまないと思うが、私が留守の間は一夏にラウラを任せるしかない。罪滅ぼしにもならないが、今度の休日は先生方おすすめのレストランに連れて行ってやろうと考えている。

ご飯と言えば、ここの食堂のラーメンはおいしい。今日は味噌を食べたが、今度はしょうゆに挑戦してみようと思う。

4月20日（土） 晴れ

私がラウラを日本に連れてきて、ちょうど2週間が経った。

わかっていただけだが、さすがにこの短期間であの子の心が回復することはなかった。

何か尋ねれば答えてくれるが、それだけだ。一夏に対しても、心を開いている様子はない。

気長にやるしかないのだろうな。私にできることと言えば、今日のように家にいる時は、積極的にラウラに語りかけることくらいだ。

……ああ、そうだ。おすすめされたレストランの料理は、とてもよかった。一夏も満足していたようだ。

ラウラは無反応だったが……ほんの少しだけ、頬が緩んでいたような気がしないでもない。願望込みで。

5月3日（金） 曇り

ラウラが来てから、もうじき1ヶ月。

世間はゴールデンウィークに浮かれているが、私は今日も仕事に追

われていた。

デスクワークはあまり得意でないのに、先輩方は私に仕事を押しつけすぎではないだろうか。特に平坂先生、『ブリュンヒルデだからいけるいける』は理不尽だと思う。あれは決して雑務王の称号ではない。

今日はやけ食い気味に食堂のデザートを堪能した。ストレスの溜まった体には、甘い物がよく効く。

5月11日（土） 雨

今週末は仕事が忙しく、家に帰ることができない。

一夏達は元気にやっているだろうか。先ほど電話はしたのだが、やはり直接顔を見ないと落ち着かない。

……なんだか、こうして文字にすると恥ずかしい。私は、世間一般で言うブラコンには当てはまらないはずだが。若い男女の2人暮らしを心配するのは当然だし、何もおかしなところはないな、うん。

今日の夕食はカレー等を食堂で食べた。が、カレーに関しては一夏の味付けの方が好みだな。

5月18日（土） 晴れ

久しぶりに家に戻ると、ラウラの部屋で一夏とその友人がひっきり返っている光景が目に入った。

何事かと思えば、ラウラを外へ連れ出そうとしたとのこと。

それでなぜこのような状況になっているのかは理解できなかったが、目は本気だったので行かせることにした。

昔から、こういう時の一夏は何かをやらかしてくるからだ。

結果として、私の判断は正しかった。

夜になって帰ってきたラウラの態度が、明らかに以前と異なっていたからだ。

ぎこちないながらも、自らの感情を表に出すあの子の姿を見て、私もほっと胸をなで下ろしたものだ。

『ただいま』なんて言ってもらった時は、頬が緩んでしまうのも仕方

がないだろう。

本当によかった。一夏にはお礼を言わなければな。

……やはり、私の弟には不思議な魅力があるのかもしれない。調子に乗るだろうから、本人の前では絶対に言わないが。

それと、今日の夕食はカレーだった。やはり食堂のものよりも口に合った。

5月25日（土） 晴れ

ラウラに姉さんと呼ばれた。うれしい。

うれしくて日記に手がつかないので、今日はこれだけにする。

夕食、サバの味噌煮。いつも通りおいしかった。

6月14日（金） 雨 今日の昼食：親子丼

1年の更識に、『出席簿アタック』なるものを提案された。あまりに態度が悪い生徒に対しては、多少手荒な真似をしてもいいのではないかと、このことだ。

仮にも年頃の女子に暴力で訴えるのはどうかと思うのだが……まあ、最終手段として考慮には入れておく。

ともかくにも、明日は土曜日。家に帰れる。弟と妹の顔を見て、癒されるとしよう。

6月23日（日） 曇り 今日の夕食：ハンバーグ

本当に、あの兄妹は仲がいい。

会った頃のぎこちないやりとりが嘘のように、一夏とラウラは楽しく笑いあっている。

この前なんて、一夏がラウラの頭を撫でていい雰囲気になっていた。

だからこそ、あの2人がもう一歩進んだ関係になる可能性を考えずにはいられない。

あいつらもいい年だ。そういう気持ちを抱くことは十分ありうる。

……今頭を悩ましても仕方がないか。私としては、見守るしかない

だろう。

弟に先に恋人を作られる結果になった場合、思わないことがないわけではないが。

9月14日(土) 晴れ 今日夕食・諸事情によりスーパーの惣菜日記を見返すと、ちょうど3ヶ月ほど前に、私はそのことについて考えていたらしい。

一夏とラウラが、いずれ恋人同士という関係に落ち着くのではないのだろうか、と。

かくして今日、それは現実のこととなった。

家を飛び出したラウラを一夏が追いかけて、2人一緒に戻ってきた時。

互いが相手を見る目が、どうにも熱っぽいと感じたのだ。

その後すぐ、本人達の口から付き合うことになったという言葉聞いた。

私としては、なんだか妙に感慨深い。一夏はもちろん、ラウラのこととも本当の家族のように考えていた身だから、だろうな。

とにかく、素直におめでとうと言いたい。

9月21日(土) 今日の夕食：オムライス(評点4/5)

ラウラから、IS学園を受験する意思を固めたと聞いた。

あの子自身の人生、あの子自身の選んだ道だ。姉として応援する以外の選択肢はないだろう。

一夏と別の学校に通うのはもちろん寂しいのだろうが、頑張っしてほしい。

無事合格したあかつきには、教師としてしっかりサポートしてやらねば。結構仕事にも自信が持てるようになってきたことだしな。

……ただ、ひとつ言いたいことがあるとすれば。

あまり私が見ているところで、くつつきすぎないようにしてもらいたい。こちらがいたたまれなくなってくるのが辛い。

10月27日(日) 今日の夕食：おでん (評点3/5)

最近、家に戻ると桃色の空気にあてられてしまう機会が非常に多い。

除け者にされている、というわけではない。2人とも、私が帰ってくる嬉んで出迎えてくれるし、ここ1週間の出来事を語ってくれたりもする。

ただ、それでも……ほんの少しだけ、寂しい。

それを紛らすために家の掃除を手伝ったのだが、開始15分で『姉さんはゆつくりしててください』と言われてしまった。

私と一夏で十分なので、と説明していたが、小声で『余計時間がかかるので』とつぶやいていたのもちゃんと聞こえていた。

……なんというか、悲しい。

11月9日(土) 今日の夕食：とんかつ (評点5/5)

以前から、一夏は私に恋人ができないことを心配していた。

それには慣れていたのだが、最近はラウラも加わっているいろいろと言ってくるようになった。

顔を赤らめながら恋人を持つことのメリットを語る妹の姿は可愛らしいのだが、正直私もお腹いっぱいだ。

あいつらめ、自分達が付き合っているからと……いかん、これでは独り身の僻みそのものではないか。

とにかく、今は教師という仕事に集中したいのだ。だから彼氏を作る余裕などない。

よし、今度の言い訳はこれでいくとするか。

12月25日(水) 今日の夕食：クリスマス用にいろいろと豪華だった (評点5/5)

平日だが、冬季休業中ということで家に帰ることができた。

夜には3人でクリスマスパーティーを楽しんだ。私は邪魔かもしれないと思ったのだが、一夏いわく恋人同士の時間は昨日過ごしたとのこと。今日は家族で過ごす1日なのだそう。わが弟ながら格好

のいいことを言うものである。

暖かな空気に、思わず顔がほころんでしまうひとときだった。寝る前に携帯をチェックすると、束から『メリークリスマス!』というメールが来ていた。一応返信しておいた。

4月7日(月) 夕食：かつ丼(評点4/5)

おそらく今年は、私達にとって激動の1年になるだろう。

一夏がISを動かしたと聞いた時から、そういつた確信に近い予感
は抱いている。

まさかあいつが、女子だらけのIS学園に入学することになると
は。

しかも寮の部屋に都合がつかなかったために、女子と相部屋にせざるをえない。

ラウラと同室にすることを選択したが……どうか、若さゆえの劣情に身を任せないことを祈っている。

弟と妹の理性を信じる姉の期待に応えてほしいものだ。

4月23日(水) 夕食：からあげ定食(評点4/5)

一夏とラウラの関係については、本人達が隠さないこともあって瞬
く間に学園中に知れ渡った。

たったひとりの男子が入学した時から彼女持ちだったという事実に
落胆した生徒も多いらしい。

だが、身近に存在するカップルに興味を抱く連中もかなりの数いた
ようで、あいつら2人は学園の人気者になっている。

ただ、私にまで2人のことについて尋ねてくるのはやめてほしい。
本人達に聞けばいいだろう。何が悲しくて弟と妹のいちやいやぶ
りを語らなければならぬのか。

……という思いも叶わず、今日も変わらず私のもとにやってくる生
徒の数は多い。

私も、恋人作った方がいいのだろうか……

*

「へえ。千冬姉こんなこと考えてたのか」

家の掃除をしていたら、千冬姉の部屋にて懐かしい日付の日記が出てきたので読みふけてしまった。姉とはいえ他人の日記なので、本当はよくないことなのだが……残念ながら、欲望に逆らえなかったというわけだ。

「というか飯の記述がだんだん増えてるし。途中から天気省略して料理の採点始まつてるし」

いろいろと面白い内容だったので、ところどころで嘖き出してしまった。

「でもまあ、俺達のこと大事にしてくれてるのは伝わってきたな」

「そうかそうか。それはよかったな」

「うん、本当に……ってうげえっ!? 千冬姉!？」

いつの間にか背後に現れていた日記の持ち主。振り返ると、とても怖い顔でこちらを睨みつけている。

「どうやら私の弟はプライベートという単語を知らないらしい。もう社会人だというのに嘆かわしいことだ」

「ご、ごめん。でも5年も前の日記なんだし、別にそこまで」

「何か言ったか?」

「いえ、何も」

有無を言わさぬ迫力。やはり世界最強は格が違う。

俺はへこへこ頭を下げることでできなかつた。

「一夏、ここにいたか。少し式場のことで話が……うん?」

お叱りを受けていると、俺を探していたらしいラウラが部屋に入ってきた。

「なんだ。また姉さんを怒らせたのか」

「またって、いつも怒らせてるみたいない言い方しないでくれよ」

「はは、すまない。それで? 何をやらかしたのだ」

「こいつが私の日記を無断で見たんだ」

俺の手から取り上げた日記を掲げながら、千冬姉が状況を説明す

る。

……そういえば、あの日記が書かれてたころって、ラウラがまだ髪を伸ばしてたんだよな。

「なるほど。でも姉さんの日記なら、私も盗み見したいですね」
肩にかかる程度の長さの髪を小さく揺らして、ラウラは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

直後、日記を奪おうと伸ばされる右手。しかしさすが千冬姉、ラウラの不意打ちを難なくかわしていた。

「……お前、年々私に対する敬意がなくなってきたくないか」

「夫の悪ガキ精神がうつったのでしよう。つまり一夏のせいです」

「おい、俺に全責任を押しつけるつもりか」

「さあな。私は下で夕飯の準備をしているから、叱られ終わったら降りてこい」

ひらひらと手を振りながら、部屋を出て行くこうとするラウラ。

しかし、そんな彼女の肩を千冬姉ががしつとつかんだ。

「あの、姉さん？」

「いい機会だ。お前にも今一度姉の威厳というものを再確認させてやる」

「……は、はい」

俺の隣に正座させられるラウラ。当然ながら、こいつも千冬姉の威圧感には逆らえないようだ。

「だいたいお前達はだな——」

俺達を見下ろす形で始まる千冬姉の説教タイム。

こうしてお叱りを受けていると、なんだか学生時代を思い出して懐かしくなる。

ちらつと隣をうかがうと、ちょうどラウラも俺の顔を見ようとしていたところだった。

あっちも俺と同じことを考えて、同じタイミングで横を向いたんだろうか。

そう思うとなんだかおかしくなって、2人して噴き出してしまった。

「……………」

そんな俺達を見て、千冬姉は顔をしかめていたが………しまいには、俺達と同じように微笑みを浮かべていた。

何が面白いのか、はつきり説明なんてできないけど。

それでも俺達は、笑っていた。

「まあ、説教は続けるが」

「えー」

「夕飯の準備……」

とにもかくにも、これからも3人仲良くつてことで。

第二部

入学初日

「箒、だよな。久しぶり」

IS学園入学初日。

最初のホームルームを終えた休み時間、俺は小学校の頃の友達に会いさつをしに行っていた。

「覚えてるか？俺のこと」

「……ああ。もちろん覚えてる」

篠ノ之箒。剣道の強い女の子で、昔は彼女と一緒にたくさん遊んだ記憶が残っている。当時は俺もこの子もいわゆる問題児だったため、一部の生徒からは恐れられたりもしたものだ。

「その、久しぶりだな。一夏」

「おう。多分6年ぶりだぞ」

思い出の中の幼なじみの面影を残しつつも、箒の容姿は高校生らしい成長を遂げていた。長い黒髪を後ろで結ったポニーテールは今も健在。個人的にはトレードマークだと思っっているのも、これからもこのままでいてほしい。

「背、伸びたな」

「それは一夏も同じだろう。昔は私の方が大きかったのに」

ちよつとぎこちないしゃべりの箒。もともと口下手なところがあつたし、久方ぶりの俺との会話に戸惑っているのかもしれない。

「え、そうだったか？ 確か昔も俺の方がかかったような」

「……いや、私だろう」

「いやいや。箒はポニーテールのでっぺんのところで水増ししてたから、ちゃんと測れば俺の方が高かったはずだ。間違いない、今はつきり思い出した」

「往生際が悪いぞ。髪の毛を差し引いても私が勝っていた」

「そんなことないって。俺が——」

くい、くい。

「ん？」

徐々に思い出話がヒートアップしかかっていたその時、制服の袖を軽く引つ張られる感覚が。

「……………」

振り向くと、ラウラが無言で頬を小さく膨らませていた。

……しまった。せつかくついて来てくれたのに、幼なじみ同士の会話のせいで置いてきぼりにしてしまっていた。

「一夏。そこにいるのは……………」

ラウラに視線を移し、考え込むような表情を見せる筈。多分自己紹介の時に聞いた名前を思い出そうとしているのだろう。

「すまない、まだクラスの人間の名前を覚えきれていない」

筈も説明を求めているようだし、遅くなっただがちゃんと紹介しよう。

「この子はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ人で、俺と知り合ったのは1年前」

そして、俺に初めてできた恋人。

……なんて、いきなり語るのはちよつと、いやかなり恥ずかしい。はつきり宣言するんじゃないやなくて、遠まわしに伝えていく感じでなんとかいけないだろうか。

「一夏？ どうかしたか」

「いや、なんでもないぞ？ それでだな、ラウラとはがしつ。」

説明を続けようとした矢先、今度は力強く右腕をつかまれた。

「ら、ラウラ？」

「はじめましてだな、篠ノ之筈。一夏からそれなりに話は聞いている」
交錯するラウラと筈の視線。……何か、とても嫌な予感がする。

特にラウラ。いったいなぜそんな決意に満ちた瞳を見せているのか。

「そ、そうか。……はじめまして」

そう、筈が返事をした瞬間だった。

「私は一夏の恋人だ。愛し合っている」

腕をからめてきたラウラは、なんでもないことのようにその言葉を口にしました。

「……………!?!」

固まったのは、目の前で話を聞いていた箒だけではない。

先ほどから、クラス全員が俺の挙動に注目していた。つまり、今の会話にもぼつちり聞き耳を立てていたのだ。

『……………』

恐ろしいほどの静寂に包まれる教室。廊下を歩く他クラスの生徒が、何事かと覗きこむほどである。

俺はというと、恥ずかしいという気持ち以上にこの空気どうすんだという思いでいっぱいだった。

「……………で、なんでお前はそんな満足げなんだ」

「別に問題はないだろう。本当のことを言っただけだ。それとも隠すつもりだったのか？　だとしたらすまな——」

ラウラの謝罪の言葉を、俺は最後まで聞き取ることができなかつた。

なぜなら。

「ええええっ!!?」

「織斑くんってボーデヴィツヒさんと付き合ってるの!？」

「すでに彼女持ちですって!？」

「なんてこと……………たったひとりの男子が傷物だったなんて」

彼女の声をかき消すには十分すぎるほどの叫びが次々と飛び出してきたからである。沈黙の反動からか、ものすごく騒がしい。というか傷物ってなんだ傷物って。

「でもカップルの話って聞いてみたいよね」

「女子校じゃなかなかレアな話題だし!」

「というわけで織斑くん、詳しい話を!」

続々と俺達の周りに集まってくるクラスメイト達。

うーん、これじゃ箒と話を続けるのは難しそうだな。

「ごめん、箒。いろいろ話したいことが残ってるんだけど、また今度に」

両手を合わせながら箒の方を振り向くと。

「い、一夏に恋人？ 恋人に一夏？ 一夏が恋人で恋人が一夏？」

「大丈夫か!? 漫画みたいに目がぐるぐるしてるぞ」

なんだかとても大変そうだった。

*

2時間目は、普通に座学の時間だった。

副担任の山田先生が中心になって、ISに関する話を一生懸命繰り広げていた。

「ふいー……」

「どうだ一夏。ついていけそうか」

「今のところは、ギリギリな」

休み時間になって、隣の席に座るラウラに話しかけられた。ちなみに俺達の席は最前列の真ん中、教卓の真正面という最悪の位置である。窓際で後ろの方の席をもらった箒がうらやましい。

「参考書を無理やり読ませたかいがあったな」

「本当にな」

あの電話帳サイズの分厚い参考書。数週間前にポンと渡され、入学までに全部読んでこいなんて無茶振りをされた時は冷や汗をかいたものだ。

ラウラにいろいろ教えてもらいつつ、なんとか一通り最後まで読破したのだが……まあ、1回読んだくらいじゃなかなか頭には入ってこないわけで。

それでもISについてほぼ何も知らなかった時期からすれば相当な進歩を遂げたと言つてよく、おかげでさっきの授業にもついていった。

「わからないところがあればいつでも聞け」

「サンキュー」

とりあえず、残りの授業も頑張ってみるか。

「ちよつと、よろしくって?」

もう一度教科書に視線を戻したところで、机の前にひとりの女子が立っていることに気づいた。

見上げると、金髪に青い瞳の美少女の顔が目に入る。見るからに育ちのよさそうな雰囲気を放っていて、やっぱりIS学園にはこういう子もいるんだなーなんて考えが頭に浮かぶ。

「えっと、確か……セ……」

自己紹介をしていたのは覚えていて。ただあの時は周囲の視線やらなんやらが気になりすぎていて、正直真面目に聞いてなかったんだよな。だからこの女の子の名前もうろ覚えだ。

「セシリア・オルコットですわ。先ほど名乗ったのですから覚えておくのが礼儀ではなくて？」

「す、すみません」

……結構物言いがきついような。でも自己紹介を聞いてなかったのは実際こちらの落ち度なので、特に反論もできない。

「セシリア・オルコットさんだな。うん、ちゃんと覚え……ん？」

この名前、それにこの顔。どこかで見たことあるような。

怪訝な顔で覗きこんでくる彼女に待ってもらいつつ、記憶を掘り返した結果。

「もしかして、イギリス代表候補生の？」

「あら、さすがにそのくらいのご存知でしたか。ついでに言えばわたくしは入試でも」

「うおっ、本物の代表候補生か！ てことはいろいろすごいんだよね！」

「え、ええ……まあ、当然」

若干食い気味に話してしまったが、無理もない。

詰めこみ方式でISの勉強をしていくにつれ、その複雑さ、奥深さに驚かされた。同時に、その分野においてトップクラスの証である代表候補生という肩書きに対する認識もどんどんグレードアップしていったのだ。

その現物が目の前にいるんだから、ちよつとばかり興奮だつてる。

「聞いたかラウラ。代表候補生だつて」

「今さら何を言っている。私は自己紹介の前から気づいていたぞ」

ラウラに教えてあげたら薄いリアクションが返ってきた。

「そういえば、確かこいつが持ってた雑誌にオルコットさんの写真が載ってたんだよな。」

「まさか雑誌の中の有名人に生で会えるなんて。はは、なんかうれしいな」

「そ、そうですの?」

若干どもり気味な声を出すオルコットさん。俺の反応が大きすぎて驚かせてしまったのかもしれない。

「まあ、わたくしは優秀ですから? 困ったことがあれば、頼み方によつては力になって差し上げないこともなくてよ」

「おお、それは心強いな」

「……こつも素直だと調子が狂いますわね」

「えっ?」

何かつぶやいたようなので聞き返そうとしたところで、授業開始のチャイムの音が鳴り響く。

「では織斑「夏さん。また」

「あ、ああ。また」

ゆつたりとした足取りで自分の席に戻るオルコットさん。動作ひとつを見ても、なんとというか優雅だった。

「いい人そうだったな」

ちよつと口ぶりに引つかかる部分もあるけど、困ったことがあれば力になってくれるようなことも言っていたし。

そんな風に素直な感想を口にしてしていると、隣のラウラが苦笑いを浮かべながらつぶやいた。

「お前には女たらしの素質があるな」

「……いや、なんで?」

*

そして、その後も授業は着々と進んでいき。

「あー……疲れた」

放課後。

学生寮で割り当てられた自分の部屋に入るやいなや、俺は用意されていたベッドに倒れこんだ。

「おい、寝るならせめて着替えてからにしろ。だらしないぞ」

一緒に入って来たラウラに注意されるものの、すでに悲鳴をあげている体と心はこれ以上動くことを許してくれなかった。

……しかし、ルームメイトがラウラで助かった。同じ部屋に住む以上、気心の知れた相手の方がいいのは当然だ。

「今日くらいは勘弁してくれ。ほら、すげーふかふかだし。うちのより寝心地いい」

「まったたく」

はー、癒される。というかこのベッドすごいな。結構値段張るんじゃないだろうか。

「ほんと柔らかいな。生徒全員にこれとは、さすがIS学園」

「……………」

「あ〜……………」

ぼふっ。

「ん?」

横を向くと、いつの間にやら隣のベッドにも住人が生まれていた。

「ラウラも着替えてないじゃないか」

「し、仕方ないだろう。お前がやたら気持ちよさそうにしているのが悪い」

言い訳しながら枕に顔をうずめるラウラ。あっちもお疲れだったのか、ベッドの魔力に抗えなくなっただようだ。

「うにや……確かにふかふかだ」

ごろごろとベッドの上を行ったり来たり。時折こちらから見える緩みきった無防備な表情が、なんとも可愛らしい。

夕食にはまだ早いし、今日からは食堂で食べるから準備をする必要もない。

1時間くらい2人で昼寝するのもありかな。荷物の整理はそれくらいでもいいだろうし。

「不思議だな」

今後の予定を考えていると、向こうのベッドから声をかけられた。

「不思議って、何が」

「初めて訪れた部屋だというのに、まるで自分の家のような落ち着きを覚える」

「そうなのか？」

俺は普通にいろいろと目新しい感じた。家を出て長期間暮らすなんて、これが初めてだし。

「ああ。多分、一夏がそばにいるからだ」

「俺？ ……って、おいおい」

気づけば自分のベッドから抜け出していたラウラは、なんとそのまま俺のベッドに乗りこんできた。

お互い横になった状態で、超至近距離で視線が交わる。

「お前の隣は、落ち着く」

「そ、そうか。うん、それは、よかった」

俺の右手に、彼女の左手が添えられる。

どぎまぎして、俺は途切れ途切れの返事しかできない。

「一夏はどうだ？ 私がそばにいると、落ち着くか？」

「えっと…そりゃ、基本的には落ち着くし、癒されるけど」

でも、こういうシチュエーションになると緊張しっぱなしだ。

好きな女の子との触れあいつているのは、いつになっても慣れない。ずっと手探りの日々が続いている。

そんなヘタレな俺に対して、ラウラの方は直情的で大胆そのもの。最初にキスをしてきたのも向こうからだだし、今だって人のベッドに堂々と潜りこんでくる始末だ。

だからまあ、ある意味つり合いが取れているのかもしれない。

「ふふ、そうか」

俺の緊張を知ってか知らずか、無邪気な笑みを浮かべるラウラ。近くで見ると、顔立ちが整っているのが本当によくわかる。

さつきから騒がしかった心臓の音が、余計にうるさくなってきた。
「一夏……かまわないか？」

何を、とは聞かない。

こういう場面で彼女が欲しがるものは、もうわかりきっているから。

「ああ」

ここ学園の寮だけど、このくらいならセーフだよな？

だいたい、この状況で恋人からの誘惑を断れるはずもない。

そう自分に言い聞かせながら、俺はゆっくりと顔を近づけ――

「たのもー」

くつつくかくつつかないかというところで、ノックとともに廊下から声が聞こえてきた。

「……………」

「……は、はは」

邪魔されて顔をしかめるラウラ。俺はというと、あまりのタイミン
グの悪さに逆に笑ってしまっていた。

「はいはい、今出ます」

ベッドから降りて、来客を迎え入れる。聞き覚えのない声だったが、いったい誰だろう。

「はじめまして、織斑一夏」

ドアを開けると、そこにいたのは制服に身を包んだ女子生徒だった。

白い肌に青い瞳。栗色の髪を肩まで伸ばした、きれいな女の子。一目見て、少なくとも純粋な日本人でないことはすぐにわかった。

「はじめまして。えっと……………」

クラスメイト、ではないよな。あまり自信はないが、こんな容姿の人は1年1組にいなかったと記憶している。

「この部屋、ラウラ・ボーデヴィツヒも住んでいるのよね」

「そうですけど、もしかしてラウラのお知り合いですか」

「お知り合い、か。まあそんなところかしら」

どちらかと言えば落ち着いた口調で、彼女はそう答えた。

それなら本人を呼んだ方がいいと思つて後ろを振り向くと、すでにラウラがこちらにやってきているところだった。

「久しぶりね。ラウラ」

「……………？」

旧知の仲のようにあいさつをする彼女だが、肝心のラウラはなんだか困つた顔をしている。

……………もしかしなくても、この人が誰なのか覚えていないんじゃない。

「その顔、私のこと忘れてるわね」

「うっ……………いや、すまない。どこかで見た覚えはあるのだが」

謝るラウラに対して、彼女はそう怒っている様子も見せずに言葉を続けた。

「仕方ないわね。ドイツ軍I S部隊のニューホープ、氷の女王と双壁をなす存在。こう言えばわかる？」

「む……………ああ!」

「やっと思い出したみたいね」

「いや全然出てこないが」

「じゃあ今のリアクションなんだつたのよ!」

ラウラのボケに今までで一番大きな声で突っ込む女生徒。俺もずっこけかけるような不意打ちのボケだったから、思わず声を張り上げてしまったのだろう。

「冗談だ、今思い出した。エレナ・アベル。かつての同僚だ」

「まったく……………」

かつての同僚。それはつまり、このアベルさんは軍人つてことなのだろうか。

いたずらっぽく笑うラウラに対して、ため息をこぼしているけど

……………

「まあいいわ。とりあえず、完全に忘れられてるなんてことがなくてよかった」

すぐに真面目な顔つきになり、彼女はまじまじとラウラの姿を見つめる。

「あなた、冗談なんて言うようになったのね。昔は全身から刃が生え

てる感じだったのに」

「その刃が折れたのだから、少しは柔らかくもなる」

「そう……それもそうね」

小さくうなずいた後、アベルさんは一瞬俺の方に視線を移す。

「織斑元教官に引き取られたという話は、事実だったようね」

「ああ。今もよくしてもらっている」

そこでいったん会話が途切れ、2人は無言のまま互いの顔を見つめていた。

部屋に置いてある時計の針の音が、やけに響いているような気がした。

「私ね。1組にラウラ・ボーデヴィツヒという名前の生徒がいるって聞いた時、少し期待したの」

先に口を開いたのは、アベルさん。右手で髪の手先をいじりながら、静かな口調でラウラに語りかける。

「でも、刃は折れたままなのね。残念だわ」

「すぐに治るようなものなら、私は今も軍に残っているだろうからな」
「まったくもってその通りね」

完全に2人のペースで話が進んでいるので、俺にとってははいまいち会話の内容がつかめない。

でも、おそらくラウラの目に関する話をしているんじゃないかということは予測がついた。

「私も今日入学したばかりの3組の生徒なの。これから3年間、よろしく頼むわ」

「ああ」

用はすべて済んだのだろうか。

最後に俺に向かって軽く礼をして、アベルさんは部屋を出て行った。

「なあ、今の人は」

「軍にいた時の知り合いだ。もつとも、たいして親しくしていた覚えもないが。当時の私はそういつたつながりを疎んでいたからな」

「……大丈夫なのか？ その、昔の知り合いと会って」

考えこむような表情を見せるラウラが心配で、そんなことを尋ねてみる。

だが、彼女はすぐに微笑んで首を縦に振った。

「過去を思い出したところで、今さら取り乱したりはしない。そうでなければ、I S学園を選んだりすると思うか？」

「それはそうだけど」

でも、やっぱりちよつとだけ心配だ。

日本に來た当初の彼女の姿を知っているだけに、どうしても。

「……信じられないようなら、確かめてみるといい」

「え？」

ラウラの言葉の意図がわからず、間抜けな返事をしてしまう。

「あれだ。精神が不安定だと、体温が下がったり体が震えたりするだろう。実際にそうになっているか、直接触れて確認すればいい」

そう言つて、ラウラはなぜか顔を下に向ける。

表情は見えないけれど、耳が赤く染まっているのは見間違いではないだろう。

つまり、照れている。

「……………」

これ、あれだよな。

遠まわしに、さっきの続きを要求してるって解釈でいいんだよな？

「ラウラ……可愛いな、お前」

「し、仕方ないではないか！ あんなタイミングでアベルが来て、直前でのおあずけを食らうことになったのだぞ！」

必死に弁解する姿もまたいじらしい。

この様子だと、本当に大丈夫みたいだな。

「わかったわかった」

さっきのアベルさんについて、いくつか聞きたいことがあったんだが。

とりあえず、お互いに甘えてからでいいか。

期待

IS学園での生活が始まってから、数日が経過した。

相変わらず他の生徒に注目される機会が多いものの、少しずつ視線の数が減ってきているように感じる。

そうそう、それでいい。俺なんか見ても面白いことないんだから、友達同士で仲良くしていた方がよっぽど有意義な時間を過ごせるというものだ。

その他、未知すぎる学園生活に対して抱いていた不安要素についても、当初危惧していたほどまずい状況にはなっていない。授業にはなんとかついていけてるし、女子だらけのクラスでもコミュニケーションを普通にとることができている。

「織斑くんおはよう」

「ああ、おはよう」

廊下で些細なあいさつができることがこれほど素晴らしいことだとは思わなかった。

そういうわけで、案外ここでもやっていけそうかもしれない、などと考え始めた今日この頃である。

「人気者だな。一夏は」

「そりゃ、ひとりしかいない男だからな。いやでも目立つだろ」

「……こほん。浮気は、禁止だからな」

「禁止されなくてもやらないうって」

同じ部屋に住んでいるので、登校もほぼ毎日ラウラと一緒にだ。

朝からせき払いとともに釘を刺されてしまったが、そんなことしなくても二股かけたりはしない。やる気もないし、度胸もないし。

「まあ、信じてはいるが」

「だったら心配無用じゃないか」

そう言いきったら、それもそうだなとラウラは笑った。俺もたまに似たようなことで不安になるから、こいつの気持ちはよくわかるんだけどな。

「お」

「……あ」

教室に入ったところで、見知った顔と出くわした。向こうはちょうど廊下へ出ようとしていたところらしい。

「おはよう、箒」

自然なあいさつの言葉を口にする俺。

それとは対照的に、あつちはせわしなく目を動かしながら最終的にはうつむいてしまった。

「……お、おはよう」

そして、そのまま早足で教室から去ってしまう。

……今日も、この調子か。

「相変わらずだな」

ラウラのつぶやきに、俺は大きなため息で同意する。

おおむね問題なく進行している学園生活の中で、俺の頭をもっとも悩ませている事柄が、これだ。

ずばり、箒の態度がなんか変。そっけないというかなんとというか、とにかく変なのだ。

話しかけても会話は弾まないし、なかなか視線を合わせてくれない。

昔から寡黙なタイプだったのは事実だけど、同時に堂々とした振る舞いも彼女の特徴のひとつだったはずなのに。

実際、俺以外のクラスメイトとは普通に会話できているようだし。

一番最初に声をかけた時は、6年前とあんまり変わってないと思っただけだなあ。

「なんとかしたいんだけどな」

何か、箒を怒らせるようなことをしてしまったのだろうか。

いずれにせよ、できるだけ早くに解決したい。

*

4時間目が終わって、昼休み。

「箒。昼、一緒に食べないか」

というわけで、思い切って昼食に誘ってみることにした。

「昼、か」

「ほら、今日まであんまり話せてないだろ？ 幼なじみ同士、いろいろ語りたいたいことがあるというか」

「私にかまわず、昔の思い出話に花を咲かせるといい」

俺について来たラウラも、フォローの言葉を口にしてくれる。

「幼なじみ……」

席についたまま、深く考えこむような顔つきになる筈。

「そう、だな。私達は、幼なじみ……ああ、別にかまわないぞ」

「本当か！ じゃあ早速行こうぜ」

「よかつたな。一夏」

いまだに態度はぎこちないし、暗い表情をしているのは気にかかるけれど、とりあえずOKをもらうことができたのは素直にうれしい。

同じテーブルを囲んで食事をすれば、いやがおうにもある程度の間一緒にいることになる。このチャンスをなんとかものにしたい。

心の中で決意を新たにしながら、3人で食堂まで移動する。

「やっぱり混んでるな」

学年問わず、毎日たくさん生徒が集まる学食。いろんな国の料理が置いてあるので、俺や周囲の人達からの評価も上々だ。

少し出遅れてしまったためか、いつも以上に空席の数が少ない。3人まとまって座れる場所はあるだろうか。

「あそこが空いている」

「お、本当だ」

さすがラウラ、目がいいな。

食券を買う前に、先に席取りしてしまおう。そう考え、俺達は奥の方の長テーブルへ歩いていく。

近づいていくと、空席の隣に陣取っているのがうちのクラスの生徒達5人であることに気づいた。

「あら」

その中に、イギリス代表候補生であるオルコットさんの姿もあった。

「ここ、使つてもいいか」

「ええ、かまいませんけど」

「あ、織斑くんだー」

「ボーデヴィツヒさんと篠ノ之さんも一緒？」

許可ももらえたので、席取りを頼んでから食券を買いに行く。

それぞれ好きなものを頼んで、食堂のおばちゃんから料理の載ったトレーを受け取る。

俺はかつ丼（とおまけの味噌汁）、ラウラと箒は日替わり定食だ。

「いただきます」

席に戻って、早速温かいカツを口に運ぶ。……うん、うまい。

「オルコットさん、昼は控えめなのか？」

斜め前に座る彼女のトレーを見て、ふとそんな疑問が頭に浮かぶ。

皿の大きさ、数が少ないし、残っている料理は野菜がメインでヘルシーな感じだ。

「そうですね」

「セシリアはスタイル維持に人一倍気を遣つてるんだよね」

「なっ……そ、そんなんじゃないわ！」

隣の女子の発言に顔を赤くして否定するオルコットさん。

女の子についていろいろ大変なんだなー、とのんきに思う。男は特別な事情がない限り食事管理なんてほとんどしないからな。

「……………」

「む、どうした一夏？ 私の顔に何かついてるのか」

俺の隣でおいしそうにからあげを頬張っているラウラ。思い出す限りでは、彼女がダイエット関連の言葉を口にした記憶はない。

「ラウラは基本的に好きな時好きなかだけ食べるよな」

「そうだな。食べ過ぎて太るようなことも経験がないし、気にしていない」

オルコットさんが恨めしげにラウラを見つめる。太りやすいとか太りにくいとかは個人差があるから仕方ない。

ラウラもラウラで、以前もう少し肉をつけたいと愚痴をこぼしていたしな。おもに胸部のあたりに。

理想のスタイルってのは、誰にとっても得難いものなんだろう。そこまで考えてから、ふと向かいに座る幼なじみの容姿に目が行った。

「箸はどうだ？ 食事のバランスとか、気を遣うタイプ？」

「……別に」

「そ、そうか」

うーむ。やっぱりまだ返事が素っ気ない。久しぶりに再会した幼なじみ同士の会話なんて、所詮こんなものなのだろうか。

「でも、たまにはカロリーとか無視してデザート食べ放題とかしたいよね」

「だね。そのためにも織斑くんには頑張ってもらわないと」

「え、なんで俺？」

女子達の会話の中でいきなり名前が出てきたので、反射的に口を挟んでしまった。

「来月末にクラス対抗戦あるでしょ？ あれに優勝すると学食デザート半年フリーパスがもらえるんだって」

「うちの代表は織斑くんだから、君が頑張ると私達みんな幸せってわけ」

へえ、そんな報酬があったのか。初耳だ。

「フリーパスはともかくとして、織斑さんには勝ってもらわないとわたくしも困りますわ」

「オルコットさんもか」

「わたくしを差し置いて代表になった以上、あなたが無様な結果を残せばわたくしの評価にまで響きます」

「そういうものか？」

「そういうものですわ」

ちよつと睨み気味な視線を送られる。そう言われても、こっちはまだまだズブの素人。来月どうなっているかはまったく予想がつかない。

「オルコットさんが代表になつとけば万事解決だったんだけどな」

「まったくですわ。皆さんが一致団結して織斑さんを推薦しなければ

ば、こんなことには」

ふたりしてため息をつく。初めて彼女と波長が合った瞬間であった。

入学式の日、クラス全員で話し合いにより代表を決めることになったのだが、その時ほとんど全員が俺を持ち上げたのだ。大半の理由が『話題になるから』『面白そうだから』であり、俺は拒否したかったのだが結局勢いに押し切られてしまったのである。

「というか、対抗戦勝ちたいんなら俺を選ぶべきじゃないだろ」

「そこはほら、話が別っていうか」

「ノリだよ、ノリ。えへへ」

可愛く笑つてもごまかされんぞ。それでごまかしがきくのはラウラだけだ。

「一夏なら2ヶ月あればなんとかなるだろう。私が保証する」

口の中が空になったのか、今まで黙っていたラウラが会話に参加してきた。

「本当かよ」

「お前の勉強を見てきたわたしが言うのだ。信じろ」

「ラウラ……」

「間に合わないようならしごき倒してでも間に合わせるだけだ」

「怖っ!？」

地獄を見ないように今から努力した方がよさそうだ。

にやりと唇の端をつり上げる恋人を見て、俺は静かにそう誓った。

「……………」

食事をしながら、おのおの好きな会話を楽しむ中。

箸だけは、黙って箸を動かしているだけだった。

それだけなら、基本的に口数の少ない彼女にとっては普通のことなのかもしれない。

だが、さつきから妙に視線を感じる。多分だけど、俺が他の方向を向いている時にちらちらこっちを見ているっぽい。

「なあ、箸」

なのに、こちらが話しかけると素早く視線を逸らしてしまうのだ。

そして、案の定何を話してもまともな返しが来ない。

……でも、根気強いこうと思う。

こういう状況には、去年のラウラとのやり取りのおかげでかなり鍛えられたからな。ちよつとやさつとじや諦める気にもならない。

*

その日の夜。

なんとか宿題を終わらせたところで無性に炭酸が飲みたくなつたので、寮の廊下に設置されている自販機で何か買ってくることにした。

「ラウラー、なんか飲み物いるかー」

「オレンジジュース」

「炭酸？」

「ノーだ」

「了解」

台所で何かやっているラウラの要望を聞いてから部屋を出る。

ジュース一本くらいはおごつてやろう。普段ご指導いただいているお礼として。

「明日は土曜だから、午前で授業終わりだよな」

午後つて普通に自由時間という解釈でいいんだろうか。それならやりたいこともあるんだが――

「あら、織斑じゃない」

「へっ？」

考え事をしている最中、いきなり声をかけられた。

見ると、目の前に一度だけ会ったことのある女子の姿が。

「アベルさん」

「ええ。私の名前、ちゃんと覚えていてくれたのね」

上下紺色のジャージを身に着けて、エレナ・アベルさんはそこに立っていた。

……とりあえず、露出の少ない格好で安心した。一部の女子達は寮

内に男がいるという意識が薄いのか、やたら目に毒な服装でその辺を歩き回ったりしているのだ。

「どうしたの、ジロジロと。ひよっとしてラウラから私に気が移ったのかしら」

「ち、違うって！　そういうんじゃないよ」

「冗談よ、冗談。そんなにむきになって否定しなくても大丈夫」

笑って手をひらひらさせるアベルさん。そういう方面のからかわれ方はまだ慣れてないから、正直勘弁してほしい。

「でもちようどよかった。今、時間あるかしら。少し話がしたいのだけれど」

「ああ、別に大丈夫だけど」

「それは好都合ね」

くるりと回れ右をして歩き出す彼女。素直について行くと、寮の外まで出てきてしまった。

少し形の欠けた月が、雲から顔をのぞかせている。

「あまり他人に聞かれたくない話だから」

「そんな話を、俺に？」

「そう。ラウラの恋人である、あなたに」

俺とラウラが付き合っているという情報は、すでに学年中、下手したら学園中に広まっている。

だから、アベルさんがそのことを知っていても特に驚きはなかった。

「えっと、アベルさんはラウラの同僚だったんだよね」

「ええ。ドイツ軍I S部隊の一員として、あの子とは何度も模擬戦を行った仲よ。あの子は軍を抜けてしまったけれど、私は今でもあそこに所属しているわ」

「どうしてI S学園に？」

「代表候補生に選ばれた関係で送りこまれたの。まさかラウラと再会できるとは思ってもいなかったけれど」

彼女も、オルコットさんと同じく代表候補生なのか。

ということは、やっぱり専用機も持っているんだろうな。しかも相

当な実力者というやつだ。

「……あの子、元気にしてた?」

声のトーンを落として、アベルさんは俺に尋ねる。
不安げな瞳がこちらに向けられていた。

「日本に来て最初の頃は、ずっと落ちこんだままだった。でもある日を境に打ち解けられて、あいつはどんどん前向きになっていった。今じゃすっかり昔の面影ゼロだ」

「そう……よかった」

俺の話聞いた彼女は、緊張が解けたのかほつと息をつく。
それだけで、俺にはこの人が何を考えていたのかよくわかった気がした。

「ラウラのこと、心配してくれてたんだな」

「あの子は……ラウラは、私のライバルだったから」

小さくうなずいたアベルさんは、両手を前で組んで俺の言葉に答える。

「一方的な思いだった可能性も高いけれどね。当時、部隊の中で私と最も実力が近く、そして越えるべき壁であった存在。当然意識したわ。話しかけてもろくな返事もらえなかったけど」

「ラウラが刺々しかったのって、やっぱり本当なんだな」

「はつきり言って浮いていたわ。陰口をたたく人も少なくなかった。私にとっては、特別な存在だったことに変わりはないけれど」

今じゃ想像もつかないな。ちよつと天然入ってる素直ないい子になつてるし。

「だから、とりあえず精神的に立ち直ってくれたのは喜ばしい。心からそう思うわ」

そう言って、彼女は微笑んだ。

でも同時に、どこかその表情には影があるように感じられた。

「けれど、やっぱり後遺症を克服することはできなかつたみたいね」

そうか、この人は悔やんでいるんだ。

自分の求めていたライバルが、もういないという事実を。

「決着をはつきりつけたかったのに、本当に残念」

……なんとなく、嫌だった。

ラウラはちやんとここにいるのに、まるで全部が終わってしまったかのように語られるのが。

無性に、嫌だと思った。

「……でも、あいつは今も一生懸命だ」

自然と拳に力が入る中、俺は強い口調でアベルさんに言葉をぶつけていた。

ラウラは頑張っている。整備や研究方面だけじゃなく、実技だつて。

「……ふうん」

品定めするかのような彼女の視線。

そこでようやく、俺は自分が感情的になりすぎていたことに気づいた。

何もアベルさんは、ラウラを馬鹿にしているわけじゃない。むしろ心配してくれていた、いい人じゃないか。

今浮かんだ考えだつて、本当に彼女がそう思っていると決めつけられるわけでもないのに。

「わ、悪い。俺変なこと」

「いいわ。期待しておく」

「え？」

予想外の返しに、謝ろうとしていた俺は思わず固まってしまう。

そんな俺の反応を楽しむかのように、彼女はにやりと笑いながら言葉を繰り返した。

「期待しておくわ。ラウラにも、あなたにも」

「それは……って、俺も？」

「そうよ。1組代表織斑一夏。確か、専用機ももらえるらしいじゃない」

「そうだけど……」

来週あたり、俺のための専用機が届けられることになっている。多分いろいろとデータが欲しいから、専用のISを用意した方が都合がいいんだろう。

この話は千冬姉が休み時間の教室で伝えてきたので、周囲にいたクラスメイト経由ですでに出回っているのだと思われる。

「私は3組代表なのよ。だから期待しておく。じゃあね、おやすみ」
「あ、ちよつと」

制止の言葉もむなしく、アベルさんはそのまま寮に戻ってしまった。

ひとり残された俺は、ぼんやりと月を眺めながら、今の彼女の言葉の意味に思いを馳せていた。

好きなところ

4月も半ばを過ぎ、俺がIS学園に入学してから2週間が経とうと
していた。

「……すー、はー」

現在時刻は夜9時。

明日は日曜日だから、話す時間はまだたっぷりとあるはず。

学生寮のある部屋の前でたたずむ俺は、大きく深呼吸をしながら
頭の中身を今一度整理する。

「とにかく、気持ちを正しく伝えることだ」

これから俺は、部屋の中にいるであろう箒を訪ね、正面から向き
合って話をつける。

再会してから今日まで、それなりに積極的にアプローチを試みてき
たが、得られたものはほとんどなし。それとなく会話に誘っても、ま
ともな返しを期待できない日々が続いている。

このままじゃ、いつまでたつても状況は変わらない。

何か行動を起こさなければ、このぎこちない関係からの脱却は不可
能だと俺は考えた。

昔のように親しくなるか。あるいは、知り合い程度の仲に遠ざかる
か。

どちらにせよ、中途半端はよくないだろう。

「……よし」

もしかしたら、俺が強くなることで箒を傷つけてしまうかもしれな
い。1年前、他者との関わりを避けていたラウラに対して、間違っ
た対応をとってしまった時のように。

でも、あの間違いがあったからこそ今のラウラとの関係がある。そ
れも事実だ。

もちろん、最初から正解を選ぶことができれば一番いい。だがそれ
ができないなら、間違えることを覚悟して動くべきだ。

「箒、いるか？ 織斑だけど」

意を決してドアをノックし、幼なじみの名前を呼ぶ。

これで留守だったら格好がつかないな、なんて今さらながら思うものの、その心配は無用だった。

ゆっくりとドアが開き、部屋の住人がおずおずと顔を出す。

「……一夏」

「よっ。今、大丈夫か？ 話がしたいんだけど」

「話？」

「ああ。できれば、ちゃんと聞いてほしい」

せわしなく目を泳がせている箒に対して、俺はぶれない視線を真っ直ぐぶつける。

避けられないように、こっちの本気具合をわかってもらおうしかない。

「わ、わかった。今は誰もいないから、中に入れ」

一瞬だけ目が合った瞬間、彼女の肩がびくと震えた。

真意は不明だけど、とにかく話を聞いてくれる気はあるようではなかった。

「ありがとうございます。じゃあ、お邪魔します」

部屋に足を踏み入れる。

女の子らしい小物とかぬいぐるみが置かれているスペースと、そういった私物がほとんどないスペースに二分されていた。おそらくだが、後者が箒のものと思われる。

「……座れ」

「どうも」

用意された座布団に腰を下ろし、テーブル越しに箒と向かい合う。

お茶とか出される時間ももつたないので、さっさと話題を切り出してしまおう。

「箒。俺と話すの、嫌か？」

「っ!？」

ど真ん中直球を投げこんだところ、彼女は目を大きく開いて息をのんだ。

「嫌なら、これまでみたいにたくさん話しかけたりするのはやめる。だから、ちゃんと答えてほしい」

そう言ったら、箒は両手で机を叩いて身を乗り出してきた。

「そ、そんなもの！ そんなもの……嫌じゃないに、決まっている」

「……そうか。よかった」

正直ほっとした。真剣な表情からして嘘とかごまかしじゃないっぽいし、まずは嫌われていないことがわかって一安心だ。

何度かうなずいていると、箒も落ち着いたのか再び腰を下ろした。

「でも、それじゃどうして俺を避けるんだ？ 視線もあんまり合わせたくないし、話もすぐ切り上げるし」

「……き、気のせいではないか？ もともと私は人とのコミュニケーションが苦手だからな。お前も知っているだろう」

目を伏せて手をもじもじさせるわが幼なじみ。今度はごまかす気満々らしいが、俺もここで引き下がるほどお人好しじゃない。我慢して様子をうかがう期間は、もう過ぎているのだ。

「苦手といってもここまでじゃなかっただろ。だいたい、俺以外のクラスメイトとは普通に話してるくせに。別に男嫌いになったってわけでもないんだろう？」

「むう……」

「俺に何か落ち度があったんなら治すから、まずはちゃんと話してくれないか。お前とこのままなのは嫌なんだ」

口ごもる彼女に向けて、次々と言葉を投げかける。

意識せずとも、自然と声に力が入っていく。

とにかくこちらの気持ちをわかってもらおうと、俺も必死になっていたのだ。

「わ、私は……」

「私は？」

蚊の鳴くような声を聞きもらすまいと、いつしか俺は身を乗り出していた。

「お前が……その」

「お前が、なんだ？」

「……」

「箒っ」

「肝心なところで言葉が止まってしまおう。」

けれど、ここまでぐいぐい来た以上、俺も止まれない。

「教えてくれ。俺がなんだって——」

「~~~~っ!! ああ、もう!!」

その感情の爆発は、まさに突然だった。

そして。

次の瞬間飛び出した言葉も、俺にとっては突然以外の何物でもなかった。

「お前のことが好きだったんだっ!!」

「……え」

顔を真っ赤にして声を張り上げる箒と、度肝を抜かれる俺。

「なんだその呆けた顔は？ 聞き取れなかったならもう一度言ってみる！ 私はお前のことがずっと前から好きだったのだ!!」

「ほ、本当か」

「嘘でこんなこと言うと思うか、馬鹿者」

泳ぎまくっていた目が、完全に据わっている。まるで俺を睨み殺さなばかりの眼力に気圧され、今度はこっちがまともな返事をし損ねる番だった。

「小学校のころからずっと好きで、離れている間にどんどん想いが強くなつて。そんな男が、いざ再会してみれば所帯持ちだったのだぞ！

この気持ちかわかるか!？」

「いや、所帯は持ってない——」

「細かいことはどうでもいい！」

「は、はい」

こ、怖い。が、それ以上に箒の告白に衝撃を受けている。

まさか彼女が俺のことを好きだったなんて。6年越しの真実に、俺はしばらくの間アホみたいになり呆けることしかできなかつた。

けれど、いつまでもそうしているわけにはいかない。

隠すことなくぶつけてくれた感情の渦を、俺はしっかりと受け止める義務がある。

「箒」

「……なんだ」

「まずは、ごめん。今まで気づかなくて。そりゃ、戸惑うのも当然だよな」

正直なところを言えば、1パーセントくらいはありえると思っていた答えだった。

まさかその大穴が正解だったなんて、本当に俺は馬鹿だ。

「ふん、謝る必要はない。私自身が、恥ずかしがって悟られないようにしていた部分もあるのだからな」

頭を下げる俺を見て、ふいつと顔をそむける箒。まだ耳まで真っ赤になっているところから察するに、さっきの告白は本当に勇気があるものだったのだろう。

「それと……ありがとう。ちゃんと言ってくれて」

ありがとうと言うのも、なんか変な感じだ。俺は箒の気持ちに応えられないというのに。

言葉選びの下手さ具合に頬をかきながら、それでも俺は最後まで言い切ることにした。

「そういう風に思ってもらえることは、本当にうれしい。でも」

「それ以上はいい」

すくつと立ち上がって、箒は俺の言葉の続きを制した。

後ろを向いて、窓際までゆつくりと歩いていく。

「答えを聞く必要はない。ここであっさり私に乗り換えるような軽薄な男なら、そもそも好きになっていない」

「……」

「ボーデヴィツヒとは、うまくいっているのだろうか？」

「……ああ。たまに喧嘩はするけど、それも含めてあるべき形だと思ってる」

「ならいい。せいぜい仲良くしてる、ばーか」

「りょーかい」

箒の声は震えていた。

だから、彼女が俺に背を向けている理由もなんとなくわかった。

でも、俺はそこに突っ込むことはしない。

ただ彼女の言葉にうなずき、笑うだけ。

頭の中では、剣道少女との懐かしい思い出が流れ続けていた。

——ちなみに、この寮の壁は薄くはないが防音完備というわけでもない。

だから、箒の大声はばつちり両隣の部屋と廊下に届いており、翌日クラスで噂になったのは言うまでもない。

*

いつの間にか、一夏と篠ノ之箒の仲は改善されていた。

一夏に経緯を聞いたところ、じっくり話し合った結果だとのこと。

あいつが最近ずっと篠ノ之箒のことで悩んでいたことは知っていたから、私もそのことに関しては素直によかったと思った。翌日だ。

「一夏。そういえば、商店街の人達は今も元気になっているのか」

「そうだな……さすがに6年経つと、周りにデパートやらなんやらできて店たたんじまったところもあるな。でも元気なところは元気なままだ。八百屋の山川さんとか、本屋の三条さんとかな」

「そうか。あそこの本屋、まだ残っていたのだな。懐かしい」

「昔はよく2人で立ち読みしに行ってたな。で、なぜか俺だけ店の人にせき払いされまくった」

「ふふ、そんなこともあったな」

休み時間。

私がお手洗いから戻つてくると、一夏と彼女が仲よさげに昔話に花を咲かせていた。

「……………」

「む、どうした。急に黙りこんで」

「いや。箒、元気になったなって」

「ああ……あれだ。一度全部吐きだしたら、なんとというか楽になった。一種の開き直りだ」

「なんにせよ、またお前の笑ってる顔が見られるのはうれしいな」

「つ……そ、そういうことをさらつと言うな！ まったく、お前の彼女はきつと苦勞するだろうな」

照れながら一夏から顔をそむける篠ノ之箒。

私も今の発言には心の底から同意してしまっていた。

「むう……」

なんなのだ、この感情は。

別に一夏を疑っているわけではない。いちいち私以外の女と会話するなと束縛する気もさらさらない。

だが、不安だ。

篠ノ之箒は一夏の幼なじみで、私の知らない一夏をたくさん知っているだろうから。

他のクラスメイト達よりも、ずっと一夏に近い位置にいるから。

そして、先日彼女が一夏に愛の告白をしたと聞いたから。

もちろん一夏は断ったようだが……やはり、胸がもやもやする。

「落ち着け。落ち着け」

小声で自らに言い聞かせる。こんなことで、いらぬ嫉妬を重ねる必要などないと。

私と一夏は恋人同士なのだ。互いに惹かれているのだ。

私は一夏の優しさと誠実さに惹かれているし、一夏だって――

そこまでいって、私の思考は唐突にストップする。

……そういえば、一夏は私のどこに惹かれたのだ？ 考えてみれば、今まで一度もそれに関する話を聞いたことがないような気がするのだが。

「……………」

困った。とても困った。

*

「というわけで、だ。お前は私のどこを好きになったのだ？」

「何が『というわけ』なのかさっぱりわからんが、えらく突然の質問だな」

不安を消し去るどころか自分で自分の不安を煽る結果になってしまったので、その日の夜に早速本人に尋ねることにした。

「というか、なんで2人して正座なんだ？」

「きわめて重要な議題だからだ」

「お、おう。しかし、改めて答えろと言われると結構恥ずかしいな」

2人きりの寮の部屋で、向かい合って話を聞く。

一夏は頭をかきながら視線をあちこち動かしているが、こちらはすでに両拳を握りしめて緊張状態に入っていた。

「まずはほら、顔が可愛い」

「うむ」

「あと、髪がきれいだろ。それにスタイルも、小柄だけど俺は好きだし」

「……外見の話ばかりではないか。その、中身はどうなのだ」

もちろん容姿を褒められるのもうれしいのだが、私にとって本当に肝心なのはそちらではない、と思う。

「中身、か。うーん……」

「な、悩むくらい好きなのところがないのかっ!？」

「そうじゃないって。がつつくながつつくな」

身を乗り出していた私の両肩を押し、ぺたんと座らせる一夏。

その表情は、照れくさそうな笑顔だった。

「言えることはいくらでもあるさ。たとえば、俺はラウラのなんにでも素直で純粹なところが大好きだ。なんというか、きれいだと思う」

「……そ、そうか。ありがとう」

先ほどまで求めていた答えだというのに、いざ面と向かって言われると顔が熱くなってしまう。思わず返事がどもってしまった。

「たとえばということとは、他にもあるのか」

「もちろんたくさんある。でも、どれもお前の要求してるものとは違う気がするんだ」

「……どうということだ？」

「多分だけど、知りたいのは俺がラウラを女の子として好きになった理由だろ？」

「そうだが」

はつきりと口にしたわけではないが、一夏の言う通りだ。

「さつき言ったこととかは、確かにラウラの好きなどころだ。けど、それはあくまで人間として好きな部分であって、ちよつと答えとしては正しくないと思う」

「では、本当の答えはなんなのだ」

「わからない」

あつさりと言い切った一夏に面食らい、私はほかんと口を開けてしまふ。

「普通の好きと、恋愛の好きとの境界線。いつ何が原因でそれを飛び越えたのか、自分でもわからない」

「……………」

「きつと、いろんなことが重なり合って、混じりあつて、自分でも気づかないうちに今の気持ちができあがったんだと思う。うまく言えなけれど、恋愛ってそういうものなんじゃないか」

そう、なのだろうか。

自分自身に置き換えて考えてみる。

私は一夏の優しさが好きだ。だが、ただの好きなら友人という関係で留まることだってできる。私達の場合は、兄妹という関係だったか。

しかし今、私と一夏は恋人同士というつながりにある。互いが互いを望んで、今の立ち位置を選んだのだ。これだけは間違いない事実だと言える。

それはつまり――

「はつきりと言えるのは、俺がお前のことを好き、というか……………あ、愛してるってことだ。うん」

つまり、そういうことなのだろうか。

わざわざ直球な言い方を選んだ一夏は、自分の言葉に照れて目を伏せていた。

「愛しているというのは、少し月並みすぎないか？」

「え、そうか？ 俺にとってはラウラ専用のセリフなんだし、別にいい

と思うんだけど」

もちろん、私もそれでいいと思ってる。

一夏の素直な気持ち、誠実な言葉。それだけで十二分だ。

ただ単純に、ちよつとからかってやりたくなっただけにすぎない。

「月並みじゃないセリフ。うーん……あー……」

悩み始める一夏。にやけそうになるのをこらえながら、果たしてどんな言葉を用意してくるのか見守る。

「あ、そうだ」

やがて何かを思いついたらしい一夏は、閉じていた目を開き私の顔を見た。

「うまい言葉は出ないから、数で押し切るのはどうだ」

「数？」

どういうことだ、と私が尋ねる前に、一夏は行動で答えを示した。

「愛してる」

「む」

「愛してる愛してる」

ま、まさかこれは……

「愛してる愛してる愛してる」

「……………」

一夏の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

が、人のことを気にする状況ではない。

間違はなく、私の体の方がずっと激しい勢いで熱を帯び始めている。

「愛してる愛してる愛し」

「も、もうやめろ！ 私が悪かった、というか卑怯だぞ！」

「いや、卑怯って何がだよ」

そんな正攻法で来るなんて、とにかく卑怯だ。

思考回路が無茶苦茶なのは自覚しているが、意識したところで直らないのでしょうがない。

感情のはけ口として一夏のひざをつんつんと指でつつきながら、私は大きく深呼吸をした。

「……とにかく、安心した。私も、一夏のことを愛している」

結局、不安に思うことなど何ひとつなかったのだ。

今後は篠ノ之箒に対しても、余裕をもって普段通りに接することができるだろう。

「これで私も、他のことをきちんと考えることができる」

「他のこと？」

「お前が幼なじみと向き合ったように、私にもはっきりとけじめをつけなければならぬ相手がいるということだ」

あいつと学園で再会してから、ずっとどうするべきか考えてきた。

4月も終わりに差しかかっているし、そろそろ行動を起こすべきだろう。

「そうか。応援する」

「ああ」

事情を察したらしい一夏は、深く尋ねることなくただ微笑んでくれた。

これで、私ももつと頑張れる。

清算

桜の花も完全に散った4月下旬。

「一夏！・織斑一夏はいるかしらー！」

「り、鈴り！」

噂の転校生の正体は、俺のセカンド幼なじみだった。

「久しぶりだな！・来るなら来るって連絡のひとつでもくれたらよかったのに」

「アンタをびつくりさせようと思ったのよ。その様子じゃ作戦成功みたいね」

「ああ、本気で驚いた」

朝のホームルーム前に教室に現れたのは、中学2年の終わりまで仲良くつるんでいた女の子。生粋の中国人で、名前は凰鈴音という。

「まさか中国の代表候補生が織斑くんの幼なじみだったとは」

「世の中狭いね」

外野も転校生の登場にざわついていた。所属クラスは2組という話だったから、まさか朝のうちから顔を拝めるとは思っていなかったのだろう。

「またよろしくな」

「ええ。……それでね、一夏。あたしが中国に帰る前にした約束――」

「なんだ。ずいぶんと騒がしいな」

鈴が何かを言おうとした瞬間、彼女の近くの教室の戸ががらっと開かれた。

クラスの喧騒に目を丸くしながら入って来たのは、今朝は珍しく俺より起きるのが遅かったラウラだ。

「一夏、何かあったのか。そっちの女子は見ない顔だが」

「ああ、紹介するよ。俺の幼なじみで転校生の凰鈴音だ」

「よろしくね」

ラウラを見つめる鈴の目つきは、どういうわけか訝しげだった。ひよっとすると黒の眼帯に目を奪われているのかもしれない。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。よろしく頼む」

視線を交わす2人。空気がピリピリしているように感じられるのは俺の気のせいだろうか。

「一夏の友達?」

ちらりとこつちをうかがう鈴。

ちよつと照れるけど、すでに校内中の噂になっっているんだ。正直に答えてもかまわないだろう。

「友達じゃなくて、彼女だな」

そう、何気なく返事をした瞬間。

「……………え」

周囲の空気が、死んだように固まった感覚。

大きさでもなんでもなく、俺はそのようなものを肌で感じた。

「……………あ、あはは! そうなんだ、付き合ってるんだ。へー、アンタなかなか隅に置けないじゃないのよ」

けれどそれも一瞬のことで、よどんだ空気はすぐに元に戻った。

「そ、そうか?」

「そうよ。あたしや弾なんかは、一夏は本気でホモなんじゃないかって真剣に心配してたんだから。ノーマルだったみたいでほつとしたわ」

「なんだよそれ。お前らそんな失礼なこと思ってたのか」

「怒らない怒らない。勘違いさせるような態度とるアンタも悪いのよ」

笑いながら昔話を語り始める鈴。

その様子に妙な違和感を抱きながらも、とりあえず俺は昔なじみとの会話を花を咲かせた。

「……………」

始業のチャイムが鳴るまで、ラウラは無言で俺達のやり取りを眺めていた。

話に混ざりたい様子でもなく、ただ俺と鈴を見つめているだけだった。

*

入学初日の篠ノ之箒の反応。あれは想い人に恋人ができていたことへのシヨックだったと、私はあとになって知った。

だとすれば、今朝の風鈴音の反応はどう説明すればいいのだろうか。

やはりあれも、箒と同じ類の気持ちを抱いていたのかもしれない。そんな直感を抱いた私は、放課後に2組へ赴き風を呼び出した。一夏には先に帰っているよう伝えてあるから、ついてくる心配もないはずだ。

「今、時間はあるか」

「……大丈夫だけど」

私の急な頼みにも、彼女はまったく動じた様子を見せなかった。

まるで、私がここに来ることが予想できていたかのような、そんな対応だった。

「場所を変えるぞ」

廊下を歩き、人気のない空き教室の中へ足を踏み入れる。

「それで、なんの話？」

「単刀直入に聞く。風鈴音、お前は一夏のことが好きなのか」

転入初日でいろいろと忙しいだろうから、手短にすませるべき。

それに口下手な私では、会ったばかりの者と長時間話もたせるのは難しい。

だから、隠すことなくありのままを口にした。

「……驚いた。それ、顔を合わせたばかりで聞く？」

「あいにくと、そういった駆け引きは苦手だ。間違っていたら謝る」

腕を組んでいた風は、私の言葉を聞いて目を伏せた。

風も吹かない密室の中で、沈黙だけが場を支配する。

「……はあ」

数十秒か。あるいは数分か。

時間の感覚が狂いそうになる中で、風がひとつ大きなため息をついた。

顔を上げた彼女は、苦笑を浮かべていた。

「正解よ、正解。あたしはあいつのことが好き」
「そうか」

……本心を聞きだしたはいいが、ここからどうすればいいのだろうか。

こういう場合、コミュニケーションの上手い人間はどんな風に話をつなぐのだ？

「あー、その」

「ねえ」

私が言葉選びに苦しんでいると、凰の方から話を切り出してきた。

「アンタと一夏、どっちが先に告白したの」

苦笑いは消えている。

声の調子は淡泊だったが、私はその言葉にこれ以上ないほどの重みを感じていた。

ただ見つめられているだけなのに、彼女の視線に射抜かれるような感覚が襲ってくる。

「……一夏だが」

それでも、私は臆することなく事実を口にした。

「そう」

その瞬間、張りつめていた空気が一気に崩れたような気がした。

「それなら……まあ、よくないけどいいか」

髪の手先を人差し指に絡めながら、凰鈴音は笑っていた。

私には、なぜ彼女が笑っているのかよくわからなかった。

「お前は……」

「ところでラウラ。聞いた話によれば、アンタ恋愛初心者らしいわね」
私の言葉を遮り、ビシツと指をさす凰。

軽い調子での話題転換に、ますますあちらの感情が予測できなくなってくる。

「おまけに天然だとか」

「恋愛に疎いのは事実だ。天然に関しては自覚はないが、たまに一夏にも言われる」

「そっか。じゃああたしがサポートしてあげる」

「……む？」

「いろいろアドバイスしてあげるって言ってるのよ。多分ラウラよりはそういう分野に詳しいから」

トントン拍子で話が進んでいく。

流れについていけず、私は思わず両手を開いて前に押し出した。

「ま、待て。嵐が何を言っているのか私には」

「何って、つまり」

突き出していた右手をつかまれる。

「友達として、仲良くしましょうってこと！」

握手の形を作り、彼女は元気な笑みで私の言葉に答えた。

「……………」

きつと、嵐にも思うところは数多くあるのだろう。

その中身を察することは、もちろん私には不可能だ。

だが、きつとそれは些細な問題なのだとも同時に思った。

「わかった。私と嵐は、友達だ」

「鈴でいいわ。仲のいい人はだいたいそう呼ぶから」

「そうか。では鈴、改めてよろしく頼む」

握る手に少しだけ力をこめ、私も彼女に笑い返した。

*

鈴が転入してきた翌日の昼休み。

ある人物と会うために、私はひとりで3組の教室を訪れていた。

「あら、ラウラじゃない。珍しいわね、あなたがここに来てくれるなんて」

友人2人と机を囲んで弁当を食べていたアベルに歩み寄ると、彼女は朗らかな笑顔で出迎えてくれた。

「一緒に食べる？」

「そうだな。今度弁当を作って来た時には考えてみる。ただ、今日はひとつ頼みがあって来ただけだ」

「頼み？ 何かしら」

「放課後、私と模擬戦をしてほしい」

すつとアベルの目が細められる。

探るような視線を、隠すことなく私に向けてきた。

「どうして？」

「今の私の全力を、お前に見せておきたい。これでは駄目か」

「駄目じゃないけど、それが全部ってわけでもないでしょう」

手に持っていたフォークを置き、アベルは少し意地の悪そうな笑みを浮かべた。

いつの間にか私達を囲む視線も増えている。彼女の友人経由で話が広がり、注目されているのだろう。

「この学園に入ってからまだ1ヶ月。成果を見せようというには少し早すぎる。あなたの場合、1年近くISと離れていたようだし、なおさらね」

「……………」

「万全でないのに勝負を挑む理由。最初に思いつくものとしては、そっちのクラス代表さんに私の戦いを見せておきたいから……………どうかしら」

「……………そうだな。確かにそれもある」

だが。

しっかりと相手の目を見据え、私ははっきりと次の言葉を口にした。

「ただ、勘違いしているようなら言うしておく。私は『勝つつもり』でいる」

宣戦布告。

周囲の息をのむ音が聞こえる中、肝心のアベルはというと。

「そう来なくちゃね」

まるでさつきまでの態度が嘘のように、うれしそうに笑っていた。

「今の一連の反応、結構強キャラっぽくなかった？」

「知らん」

ともあれ、無事に勝負の約束をとりつけることができた。

*

迎えた放課後。

やたらと観客の多い第3アリーナで、私とアベルはISを展開して対峙していた。

私が呼んだのは一夏だけだったのだが、まあ外野が何人いようが気にすることでもないだろう。

「打鉄か。ラファールで来るかと思ったんだけど、あてが外れたわね」
「多くの装備を使いこなすだけの時間がなかったからな。こちらのシンプルなスタイルで勝負することにした」

日本の第2世代型IS『打鉄』。IS学園で生徒用に用意されている機体のひとつであり、安定した性能が特徴だ。基本スペックはやや防御特化で、あとは追加装備によって近接戦主体にも遠距離戦主体にも調整できる。

今回は標準装備のブレードとアサルトライフルをそのまま採用し、他の部分はいじっていない。ブランクがあるぶん、今はこの方がいいと判断したためだ。

「こちらは第3世代型か。完成していたのだな、『シユヴァルツェア・レーゲン』」

「この子の相棒として、私はIS学園に送りこまれたわけだから」
軍にいた頃に、開発計画自体はすでに聞いていた。

黒い雨。コンセプトに変更がなければ、1対1で戦うには相当不利な相手のはず。

もつとも、今さら引き下がる気など微塵もないが。

「勝負の前に、少しお話ししましょうか。戦い始めればとてもそんな余裕はないだろうし」

微笑むアベルには、おそらく私の作戦はばれていることだろう。

推理の必要すらない。左目の疑似ハイパーセンサー『ヴォーダン・オージエ』が常時稼働状態で制御不能な以上、私のやれることはひとつしかないのだから。

「覚えてるかしら。私とあなたの通算対戦成績」

「13勝13敗、だったか」

「その通りよ。だから私は、いつか白黒はつきりつけたいとずっと願っていた」

私にとっても、それは同じだった。

以前のひたすらに強さを求めていたラウラ・ボーデヴィツヒは、エレナ・アベルをいずれ完璧に超えるべき存在と認識していた。

だがそれが叶うことはなく、挫折した私は逃げるように軍を去った。

……生きる目的が変わろうと、過去の日々への後悔と未練は残り続ける。

「私も同じだ。だからこそ、勝負を持ちかけた」

「そう。あなたも、私を意識してくれていたのね」

どんな形になろうと、ケリはつける。

幸運にも、その機会が転がりこんできたのだから。

「始めましょうか。長話がすぎるとギヤラリーも飽きてしまうだろうし」

「そうだな」

目を閉じて、精神を集中させる。

この先は、コンマ1秒たりとも集中を欠くことは許されない。

「……………」

私のパフォーマンスが著しく低下した原因は、左右の目のバランスがとれなくなったことにある。

常に疑似ハイパーセンサーが稼働している左目と、通常状態の右目では、見える景色がまったく異なる。

このギャップを処理することに苦しみ、ついに私はそれを克服できないままだった。左目を潰すことも考えたが、片目だけで戦えるほど世界は甘くなかった。

しかし、この問題を解決する方法がひとつだけある。

なんてことはない、右目のハイパーセンサーも稼働させればいいのだ。

だが、そうすると今度は脳が長時間の酷使に耐えられなくなる。も

とともに『ヴォーダン・オージエ』はオンオフの使い分けをうまく行うことを前提にデザインされているからだ。

……それでも、やるしかない。

「行くぞー！」

「ええ、来なさいー！」

瞬間、私は余計な思考の一切を排除した。

152秒。それが私に許された、全力を出せる時間だ。

*

「すごいな……」

初めて生で見るIS同士の戦いは、とにかく圧巻の一言だった。

一瞬のうちにめまぐるしく状況が移り変わり、目で追うのが精一杯。あんな世界で、本当に俺はまともに試合ができるのだろうか。

「でも、なんでさっきのラウラの銃撃は当たらなかったんだ？ バリアでも張ってたのか」

「バリアっていうか、あれはAICね」

「AIC?」

隣で観戦している鈴の口から聞きなれない単語が出てきたので、そのまま尋ね返す。

「慣性停止能力のこと。簡単に言えば特殊なエネルギー波かなんかで物体の動きを止めるのよ」

「はあ!? それって強すぎないか?」

確かに打鉄のアサルトライフルから撃ちだされた銃弾が急に止まったように見えたけど……だとしたら、チートもいいところじゃないか。

「そこだけ切り取れば確かに反則技ね。でも弱点はちゃんとあるわ」
鈴がそう言った直後のことだった。

それまで一定距離を保ちながら射撃を繰り返していたラウラが、アベルさんの背後をとって一気に加速、接近したのだ。

勢いそのままに近接用ブレード『葵』で斬りかかる。振り返るアベ

ルさんだが、すでに回避は間に合わないのでは——
「っ！」

まただ。

ギリギリのタイミングで彼女が右手を突き出した瞬間、ブレードの動きが完全に停止した。

やっぱりA I Cを突破することはできないのか。

応援に力が入るあまり腰を浮かしそうになった、その時だった。

「なっ……!?!」

一撃を加えたのは、斬撃を止められたラウラの方だった。

気づけば、打鉄の両足がシユヴァルツェア・レーゲンの腹部を蹴り上げていたのだ。

「下半身のブースターだけ全開にして回転したのね。斬りは最初から撒き餌のつもりだったのかしら」

「フェイントってことか」

「ええ。A I Cの弱点は、対象物に意識を集中させなければ効果を発揮しないところにあるの」

「それにしても、あの状況でよくやれるものだ」

感心した様子の鈴と箒。

2人の反応を見て、改めて俺はラウラの実力の高さを思い知った。

このままいけば、もしかすると。

淡い期待が頭をよぎる。

「でも妙ね。代表候補生相手にあれだけ大立ち回りでできるくせに、なんで一般生徒枠で入学したのかしら。国から声がかかってもおかしくないはずなのに」

フェイントが決まり始めてから、試合はラウラ優勢に傾いていた。

ライフルの弾丸をおとりにした斬撃。あるいはその逆パターン。縦横無尽にアリーナを駆けめぐりながら、打鉄が躍動する。

アベルさんはあくまで冷静に対処しようとしている風に見えるが、それでもあいつが紙一重で上回っている。

……だが、勝負を決めるだけの一撃は与えられていない。

それが何を意味するのか、ラウラから事情を聞いている俺にはわ

かってしまう。

「ん……う。」

違和感にいち早く気づいたのは、鈴だった。

AICにかかった様子もないのに、アベルさん目がけて加速していた打鉄の動きが急に鈍ったのだ。

その隙を見逃すはずもなく、シユヴァルツエア・レーゲンの右肩に乗ったレールカノンの容赦ない一撃がラウラを襲う。

直撃したのを認識して、俺はタイムアップが訪れてしまったことを悟った。

*

鈍い痛み。

砲撃が当たったことが原因ではない。そちらの衝撃は、シールドエネルギーを激しく消耗することでほとんど吸収されている。

だが、体の内側から絶えず湧き上がる痛みだけは、どうしようもない。

「終わりにしましょう」

吹き飛ばされたことで、私とアベルの間にはそれなりの距離が生まれている。

それを詰めることなく、彼女は回線越しに静かに語りかける。

「もう限界が来ているはずよ。これ以上続けてもあなたは勝てない」

降参を勧める声。それは決して、驕りから出てきたものではない。むしろ逆だ。あいつは私を気遣うからこそ、試合の続行を嫌がっている。

アベルの心配そうな瞳を見れば、そのくらいのことはすぐに理解できた。

「……いや。最後まで、続ける」

理解できたが、納得はしなかった。

勝ち負けの問題だけではない。エネルギーが尽きるまで戦うことに、意味がある。

「無理を言っているのは承知だ。それでも、聞いてほしい」
「……手加減はしないわ。それでいいのね」

「ああ」

意思を汲んでくれたアベルに感謝しながら、私は再びブレードを構えた。

そこから先の展開は、詳しく語るまでもない。

思考能力の落ちた状態で渡り合えるはずもなく、ものの数分で私と打鉄は力尽きたのだった。

*

「ラウラー！」

アリーナのピットに駆けこむと、ベンチで横になっているラウラと傍らでたたずむアベルさんの姿が目に入った。

「あまり大勢で入ってこないで。彼女の頭に響くわ」

アベルさんの注意の言葉に、俺は後ろを振り返る。

試合終了と同時に観客席を飛び出した俺について来たのか、結構な人数の女子がピットに足を踏み入っていた。

「ご、ごめんなさい」

申し訳なさそうな顔でそそくさと出ていく女子達。

残ったのは、俺のそばにいた鈴と箒だけだった。

「そんな心配そうな顔しないで。少し無理がたたって疲れているだけよ」

「ほ、本当か」

「ええ。なんなら本人に聞いてみるといいわ。ただし大声出したり揺さぶったりするのは禁止ね」

髪をかきあげ、アベルさんはピットの出口へ向かって歩いていく。その表情からは、どんなことを考えているか読み取れなかった。

「しばらく休ませたら、一応保健室に連れて行ってあげて」

それだけ言い残して、彼女はこの場を去った。

「とりあえず、心配はないようだな」

「あたし達も寮に戻ってるから、ごゆっくり」

「お、おい」

いやーな笑みを浮かべて、鈴と箒も廊下へ出ていった。ごゆっくりってなんだよ、ごゆっくりって。

「……大丈夫か？ ラウラ」

「ああ、問題ない。頭痛もじきに引く」

俺の問いに、はつきりとした声で答えるラウラ。どうやら本当に心配なさそうだ。

「でも、無茶すぎだ。そこは怒らせてもらう」

「すまない。だが、どうしても最後までやり抜きたかった。許してほしい」

「……まったく。次は駄目だからな」

途中で降参しなかったことを責めようと思ったのに、そんな悲しい顔されたら怒るに怒れない。

「わかっている。もう体に無理を言わせるつもりはない」

そう言つて微笑むと、ラウラは横になっていた体をゆっくりと起こした。

「おい、まだ寝ててもいいんだぞ」

「お前達が来る前に、アベルからこう言われた」

先ほどアベルさんが立っていた場所に視線を向け、静かにつぶやく。

『『あなたはやはり強かった』とな』

「その通りだよ。お前は本当にすごかった。俺正直感動したんだぜ？」

「だが、それでも勝てはしなかった。そこが私の限界だ」

目を伏せるラウラ。

一瞬落ちこんでいるのかと思つたが、そうではない。

「一夏」

俺の名前を呼ぶ声は、なぜだか少し楽しそう。

「この前、目標が決まらないと言つていたな」

「え？ そうだな。就職目当てで藍越受けるつもりだったのに、いき

なりこんな場所に放りこまれたんじゃないか」

「ちようどいい。一時的でいいから、私のわがままにつき合ってくれないか」

俺を見つめるその顔は、なぜだか満面の笑みを携えていた。

「来月末のクラス対抗戦。エレナ・アベルに勝ってくれ」

「……え」

「お前にしか頼めない。お前にしか託せない、私の願いだ」

聞き間違いでもなんでもなく。

俺の彼女は、とんでもない無理難題をふっかけてきた。

下準備

「アベルさんに勝って……」

クラス間での勝負事な以上、俺だって負けるよりは勝つ方がいいに決まっている。

けれど、今日この目で見た3組代表の実力を考える限り、ラウラのお願いはいくらなんでも無茶だと言うしかない。

「言いたいことはあるだろうが、先に私の言い分を聞いてほしい」
文句をつける前に先手を打たれてしまい、押し黙らざるをえなくなる。

「今回の勝負で、私は一応のけじめをつけたつもりだ」

「けじめ？」

「軍から逃げ出した自分との決別だ。結果はどうあれ、奴と最後まで戦ったことで心の整理はついた」

その言葉に嘘偽りがないことを示すかのように、ラウラは満足げな笑みを浮かべた。

だが、すぐにその表情は苦笑いへと変わる。

「ただ、私が満足しても向こうがそうとは限らない。アベルとしては、やはり不本意な部分もあるだろう」

もしもラウラが万全ならば。時間切れのような決着にならなければ。

きっと、2人の勝負はもつと白熱したものになっていた。

『決着をはっきりつけたかったのに、本当に残念』

入学して間もない日の夜に、アベルさんがこぼした言葉の内容を思い出す。

彼女がラウラとの戦いに特別な感情を抱いているのは、知り合つて日の浅い俺にもよくわかる。

「だから、代わりに俺がってことか？ でも俺の実力じゃ」

「まだ話は終わっていない。理由はもうひとつある。とびきり個人的な理由がな」

そう言うと、ラウラはベンチから立ち上がった。

「パイロットとしてのラウラ・ボーデヴィツヒは、今日をもって完全に引退だ。隠居する」

一歩一歩ゆっくりと足を進め、少しずつ俺と距離をとっていく。体の方は、もう大丈夫みたいだが……。

「これからはサポーターにまわる。ISを整備し、パイロットが自由に飛び回るための環境を作り上げる役目だ」

ラウラの足が止まる。

銀の長髪をなびかせ、くるりと俺の方を振り向いた。

「最初に面倒を見るのは、やはりお前がいい」

ちよつぱり首を傾け、屈託のない笑顔を見せる彼女。

ヤバい、キュンときた。この仕草、狙ってやっているわけではないのだから恐ろしい。

「私が整備した機体とともに戦って、そして勝ってほしい。たとえ勝てずとも、立派に戦い抜いてほしい」

「……それが、お願いの全容か」

「駄目、だろうか」

俺の返答を待つ瞳が揺れている。期待と不安、ちよつぱり半々といったところか。

「答えは決まってる」

近づいて、ラウラの小さな頭を撫でてやった。

こうすると彼女が喜ぶことは、昔からよく知っている。

「そこまで言われたら、断るわけにもいかないもんな」

「で、では」

「どこまでできるかわからないけど、頑張るつもりだ」

どうせ対抗戦をやるのなら、ジャイアントキリングかました方が面白いだろうしな。

それと、安い男のプライドが少々と。

「ありがとう、一夏」

一番はやっぱり、この子の思いに応えたいって気持ち。

それだけあれば、理由としては十分だった。

*

その日以来、打倒エレナ・アベルを目標に掲げた1ヶ月が始まった。もともと放課後にちよくちよく自主訓練は行っていたのだが、それが毎日きっかりアリーナ閉館ギリギリまで引き延ばされるようになり、加えてラウラの指導がかなり本格的な形に変わった。

どのくらい本格的かというところ、時折熱が入りすぎてドイツ語でしゃべってしまうほどである。

『なあ、今なんて言ってたんだ？』

『……いや、なんでもない。気にするな』

俺は外国語がさっぱりなので、当然意味を尋ねるわけだが、なぜかラウラは決まって話をはぐらかしてしまう。

『聞かない方がいいと思うわよ？ めっちゃスラング入ってるし、心にぐさりと突き刺さるから』

というのは、たまたま一度様子を見に来ていた鈴の意見。

なんだか怖くなったので、その忠告を受けて以降俺はラウラのドイツ語に関しては気にしないことにした。

そんなことがありつつも、俺は懸命に鍛錬に励んだ。

頑張って頑張って頑張った。

……ただ。頑張ったからといって、そう簡単に結果がついてくるわけではないのが現実というもので。

「むう……」

5月もすでに折り返し地点。クラス対抗戦まであと2週間を切った。

掲示板に貼り出された組み合わせ表によれば、運のいいことに俺とアベルさんは1回戦で当たるらしい。

しかし、コーチ兼整備士のラウラの表情は、冴えない。

「どうだ？ やっぱり駄目か」

「わざわざ彼女に確認を取る必要もないと思いますけれど」

目の前で大きなため息をついているのは、先ほどまで俺との模擬戦に付き合ってくれていたセシリア・オルコットさん。青い専用機『ブ

ルー・テイアーズ』を身に纏った彼女の射撃の嵐に曝されたおかげで、俺は改めて自分の未熟さを思い知ることとなったのである。

「そろそろきちんとした相手が欲しいと思っただけでよしとするか」
だが……まあ、現状が認識できただけでよしとするか」

打鉄のハイパーセンサー越しに俺達の戦いを見ていたラウラは、地上に降りてきた俺に向かって少し残念そうな顔でそう言った。

昨日までは、基本的にラウラが俺の相手を務め、たまに箒が手伝ってくれたりもした。

対抗戦が近づいてきたこともあり、そろそろアベルさんに並ぶくらいの実力者を相手にしたいと考えたラウラが、イギリス代表候補生であるオルコットさんを引っ張ってきたというわけだ。

代表候補生といえば鈴もそうなのだが、あいつは2組の生徒。さすがに敵に塩を送るような真似はしないだろうし、こつちもさせたくない。

「最低限の最低限はできているようですが、肝心のフェイントがまったく機能していませんわ。あんな見え見えの罠に引つかかるような方は皆無です」

「うっ」

最大の問題はそこだった。

アベルさんのAIC対策として、俺はラウラの指導のもとフェイントをかける練習をずっと続けてきた。動きを止める対象に意識を集中させなければならぬAICに対してそれが有効であることは、ラウラ自身が先日の試合で証明していたからだ。

……だが、これがうまくいかない。

「細かな動きも駄目だが、気配の調節もまだまだだな」

「おとりの攻撃と本命の攻撃の違いがはつきりしていますから。今日相対したわたくしが言うのですから間違いありませんわ」

つまるところ、全然まったく話にならないレベルらしい。

俺自身、ラウラ達に指摘されるまでもなく自覚できていることだった。

「この短期間で高度なフェイントを習得させるのは無理があったか

……よし、ならば方針を変える」

目を伏せてぶつぶつと独り言をつぶやいていたラウラが、顔を上げて俺を見た。

「機動性を高める。この1点のみに集中しろ」

「機動性？」

「まあ、それしかないでしょうね。織斑さんの専用機の性質から考えると」

彼女の発した言葉に、オルコットさんも反対することなくうなずく。どうやら、2人とも同じ結論にいたったようだ。

「緩慢な動きを見せれば、全身をAICによって縛られてしまう。逆に、素早く飛び回れば致命傷は受けづらい。敵をかく乱し、隙を見せたところで仕留める戦法だ」

「なるほど」

確かにそれは、俺のISの性能ともかみ合っている気がする。

俺に与えられた専用機『白式』は、スピードとかパワーとかの基本スペックが非常に高い。が、代わりに装備できる武器が刀1本だけというところでもない縛りを受けている。

しかし、その刀による攻撃はうまく使えば一撃必殺級の威力を持つのだ。

素人の俺にでも、こいつがピーキーな機体であることは丸わかりだった。とてもじゃないが初心者が扱うような代物ではないと思う。

「でも、攻める時はどうやっても接近戦になるんだよなあ」

「割り切るしかないだろうな。リスクを承知で懐に飛び込む以外に方法はない」

厳しい表情でラウラが告げたのとほぼ同時に、アリーナ閉館5分前を知らせるアナウンスが流れた。

今日の訓練は、ここまでだ。

「とりあえず、明日は白式の調整だ。機動重視に整備し直す」

「ああ、頼んだ」

作戦変更が行われたのは事実だが、だからといって今までの練習のすべてが無駄になるわけじゃない。

俺みたいな素人にとっては、ISに乗っているいろいろ動いてるだけでも貴重な経験になるのだから。

「ありがとう、オルコットさん。付き合ってくれて」
「……………」

頭を下げてお礼を言うも、オルコットさんは黙って俺を見つめるだけ。

「えっと、なに?」

「ひとつ、聞いてもよろしくて?」

返ってきたのは、真面目な顔での問いかけだった。

「あなた、アベルさんに勝つつもりですか」

静かな声だが、妙な重苦しさを感じる。

……………どういう意図で尋ねてきたのか、それは俺にはわからない。

でも、答える言葉は変わらない。

「当然。勝率がどれだけ低くても、気持ちだけは負けないようにするつもりだ」

もう一度アナウンスが流れる中、俺は宣言するようにはつきりとそう言った。

……………少し、かっこつけすぎただろうか。

「そうですか」

俺の心配をよそに、オルコットさんはフツと笑い緊張を解いた。

「では、わたくしも対抗戦までしっかりお付き合いいたしましょう」
「いいのか?」

「前にも言ったはずですよ。あなたが惨めな姿を見せれば、それだけわたくしの評価にも傷がつくのです。それを避けるために、頑張っていたかかないと」

「……………そうか。そうだな、頑張るよ」

「ええ」

そういえば。

彼女の笑顔を見たのは、これが初めてかもしれない。

*

そこからさらに1週間が経った。

機動性の向上、つまり素早く動くことを念頭に置いた訓練は、意外とうまくいっていた。

俺自身、フエイントの練習をしていた頃よりも手応えを感じる。

「お疲れ様、だ。ビットによる四方からの攻撃にもそれなりに対応できるようになってきたな」

「ハイパーセンサーの感覚にようやく慣れてきた気がする。360度の視界がまともに使えるようになったというか」

「その調子だ」

オルコットさんとのスパarringを終えた俺に、ラウラがねぎらいの言葉をかけてくれた。彼女から見ても、俺はきちんと成長しているようだ。

真上や真下、真後ろといった部分への反応はどうしてもワンテンポ遅れてしまうが、とにかく反応できるようになっただけで収穫だ。

「なかなか、ですわね。明日からはわたくしも本気で叩きにかかろうかしら」

「なんか怖いこと言われてるんだが」

「ふふっ、冗談ですわ。あくまで練習ですものね」

「それを聞いて心底ほっとした」

オルコットさんとも結構自然に話せるようになってきた。クラスメイトとは仲良くしたいし、俺にとってはこれも喜ばしい変化だ。

「腹が減ったな。一夏、シャワーを浴びたらすぐに食堂に行くぞ」

「おう、わかった。今日は何食べようか……」

「私はすでに決めているぞ。酢豚だ」

「理由を聞こうか」

「鈴に薦められた」

「だろうな」

こっちもこっちで、仲良くしているようでなによりだ。

*

同じ舞台に立つことで、初めて実力者の実力を知ることになる。練習して上手くなればなるほど、実力者との力の差を感じて自分の下手さ加減に気づく。

今の俺の状況が、まさにそれだった。

「冷静に考えれば、壁が高すぎるよな」

ラウラが大浴場に行き、誰もいなくなった部屋でひとりごちる。

……手応えは確かにある。けど同時に、これじゃ試合に間に合わないという焦りも日増しに募っていく。

もともと、厳しすぎる相手だというのはわかっていたつもりだ。

でもこうしてISに関して詳しくなっていくうちに、その事実を改めてはつきりと突きつけられたような気分だ。

オルコットさんの冗談に肝を冷やしていたが、来週には本気の代表候補生と渡り合わなければならぬのである。

「はあ」

勝たなきゃ命に関わるとかいうわけではないが、それでも負けたくない。

(デザートフリーパス目当てだけど) 応援してくれるクラスのみんな。練習を手伝ってくれている箒やオルコットさん。

そしてなにより、ラウラの期待に伝えてやりたい。

そのためには、どうするべきか――

「一夏。いるか?」

「ん」

思考の海に沈みかけたところで、部屋の外から俺を呼ぶ声が聞こえた。

この声は多分箒だ。

「どうした?」

「その、少し話したいことがあってだな」

予想通り、ドアを開けると私服姿の箒が立っていた。

ただ、いつもより声に覇気がないうえに視線が定まっていない。

「言いにくいことなのか」

「そういうわけでもないのだが……お前の役に立つかもしれない話だ」

「役に立つ?」

「このタイミングってことは、対抗戦がらみか?」

有益な情報は喉から手が出るほど欲しい状況だ。そんな尻込みせず、すぐにでも話してほしいんだが。

「い、いや。もしかすると役に立たないかもしれん」

「そうなのか?」

「むしろお前にとっては時間の無駄になるような気がしてきた」

「……時間の無駄なら必要ないけど」

「そうだな。必要ないな。では私は帰る」

「いやいやいや」

肩を落として去ろうとする筈を引き止める。

さっぱり話の筋が見えないまま勝手に自己完結されても困るとい
うか、めちやくちや内容が気になる。

「ちゃんと説明してくれ。聞くから」

「……つまりだな」

もう一度こちらを振り向くと、彼女は遠慮がちにぽつぽつと言葉を
紡ぎ始めた。

「気分転換と、私のわがままと、あとは直感が混ざったお願いなのだ
が」

「はあ」

なんか、いろいろと複雑みたいだ。

お願いというからには、俺に何かをしてほしいのだろうか……。

「結論から言うぞ」

「ああ」

「私と戦え、一夏」

「……ああ?」

ビシッと指をさされた俺は、思わず間抜けな返事をしてしまった。
た。

*

どんなに不安でも、どんなに嫌がっていても、時間というのは有限で、その日は必ずやってくる。

「ついに本番か……」

「朝から何度同じことをつぶやくつもりだ。しっかりしろ」

5月最終週、クラス対抗戦当日。

1年生の部の第1試合は、1組VS3組。つまり朝一番で俺の出番であり、おかげで起きた時からずっと緊張しっぱなしだ。

そんな俺を呆れたように見つめるラウラ。試合前まで一緒にいると、アーリーナのピットにまでついて来てくれていた。

「過度な緊張は禁物だ。楽にいけ」

「そうは言ってもな。いろいろと不安要素が多くて、どうしても」

「仕方ないやつだな」

ベンチに隣同士で座って話をする。ラウラが元気づけようとしてくれているのはよくわかるのだが、体は硬くなったままだ。

「不安なのか」

「ああ」

「なら、その不安を押しつぶすほどの勇気を与えてやる」

ラウラの両手が俺の顔に伸び、くいつと向きを変えられた。

……何をやる気だ？ と、そう思った頃にはもう手遅れで。

「んっ……」

腰を浮かした彼女が、俺の唇を一瞬で奪ってしまった。

柔らかく心地よい感触が脳まで伝わり、体全体に行き渡っていた余計な力が失われる。

「……………」

10秒ほど経っただろうか。

唇を離れたラウラは、とろんとした瞳で俺を見つめながら、
「勝ったら、もっといいことを好きにだけしてやる」

俺の劣情を爆発させんばかりの発言を、頬を赤らめながらぶちかましてきた。

「……それ、誰に吹きこまれた？」

「む、やはりわかるか」

「どう考えてもお前の言うようなセリフじゃない。俺の彼女は色仕掛けとか下手なタイプだ」

キスするにしても、『これで元気を出せ！』って感じにしか言えないやつだ。

そこが可愛いところだし、俺も不器用だからそれくらいでちょうどいいんだけど。

「鈴に教わった。確かその時雑誌を片手に持っていた気がする」

「あいつめ……」

面白がって笑うセカンド幼なじみの顔が容易に想像できた。大方、その雑誌に恋愛テクがどーたらとかいう記事が載っていたのだろう。

まあ、本番前に緊張がほぐれたから結果オーライではあるけど。

「だが、言葉は受け売りでも気持ちちは本物だ」

「え？」

「お前がアベルに勝ったらなんでもひとつ言うことを聞いてやる。……え、えつちすぎるのは駄目だが」

俺の目を見て、はつきりと宣言するラウラ。言葉の最後は尻すぼみだったが、どうやら本気らしい。

「いいのか？ そんなこと言って」

「かまわん。一夏なら、そう無茶な要求をしないと確信しているからな」

「そうか」

それはそれは、本当に魅力的な提案だ。

周囲の人間の期待を背負っているというプレッシャーもまとめて、個人的な欲望に昇華されてしまいそうになるくらいである。

これならもう、大丈夫だろう。

「よし。じゃあ優勝して、ラウラにはエッチなお願いをすることに決めた」

「なっ！ だ、だからえつちすぎるのは駄目だと」

「もう時間だ。そろそろ会場に出ないとな」

もちろん、本気でそういう方面の命令をするつもりはない。単にか
らかっているだけだ。

あたふたしているラウラを無視して、試合用のステージへと足を進
めようとする。

「ま、待て一夏！」

「なんだよ、今さら却下は認められないぞ」

「そうではない！」

引き止める声につられ、俺は再び彼女の方に顔だけを向けた。

「頑張つてこい。それだけだ」

「……わかった。行ってくる」

穏やかな表情で送り出され、今度こそ俺は会場へ向かう。

いろいろあったが、ここまでの成果を全部出し切る時だ。

俺と、あいつの整備した白式で、必ず勝ってみせる。

始まり

試合会場の第2アリーナ。その観客席は、1年生だけでなく他学年の生徒達も集まったことで満席になっていた。

小学生の時、剣道大会でそこそここのところまで進んだことがあるが、これほどの大人数に囲まれた中で戦うのはこれが初めてだ。

でも、緊張はさほどない。さっきのラウラとのやり取りで、だいぶ楽になった。

「調子はどうかしら。体、固くなっていない？」

「大丈夫だ。ご心配なく」

直線上に向かい合う形で、対戦相手のアベルさんは俺の様子を観察している。

もちろん、互いにISは展開済み。俺の白式と彼女のシユヴァルツエア・レーゲン。白と黒、対照的な2つの専用機。

「あの子と一緒に、頑張っていたようね」

「今日のためにな。だから、恥ずかしい試合はできない」

「そう」

アベルさんの唇の端がつり上がる。

余裕の笑み、ではない。そんな生易しいもんじゃなく、笑顔の裏に凜猛さが見え隠れしている。

なんとなく、彼女が軍人であることを実感した瞬間であった。

「それは、楽しみね」

彼女は強者、俺は弱者。これは揺らぐことのない優劣関係。

それを踏まえたうえで、これから全部をひっくり返す。

「……………っしー」

気合を入れたその瞬間、試合開始を告げるブザーが鳴り響いた。

直後、俺はアベルさんの正面から移動するべく右へ。当然だが、彼女から目線を切ることのないよう気をつけながらだ。

「……………っしー」

白式のスピードはかなりのものだ。最高速、加速ともにシユヴァルツエア・レーゲンを上回っているはずだとラウラは言っていた。

事実、側面にまわってから接近を試みようとした俺の動きに、アベルさんの反応はほんの少しだけ遅れたのである。

だが、それはまさしく『ほんの少し』にすぎない。

初撃を食らわせようと近接戦ブレード『雪片式型』を構える体勢に入ったところで、俺は攻撃動作を終了させ回避を選択する羽目になる。

すでに応戦準備を終えた相手が、武器であるワイヤーブレードを何本もまとめて飛ばしてきたからだ。

開幕直後、電光石火の一撃を意識した攻めは、あえなく阻まれてしまふ。

「冷静ね。いいことだわ」

「それはどうもっ」

特攻していれば、今頃動きを止められ大ダメージは避けられなかった。

俺の判断を褒めながらも、アベルさんはすでに次の行動に移っている。

ワイヤーブレード6本を巧みに操り、俺の動く範囲を制限しようとして掛けてきた。隙あらばAICの網に捕らえようという算段だろう。

素直に捕まるわけにはいかないので、いったん後退して距離をとる。

近接戦しかできない白式だが、かといって前に突っ込むだけではどうにもならない。

特にこの相手にとっては、都合のいい餌になってしまうから。

「くっ」

彼女の周囲をあちこち回りながら飛びこむタイミングを図るものの、なかなか隙が見つからない。

向こうもただ様子をうかがっているだけではなく、肩の上に搭載された大口径レールカノンを容赦なくぶっ放してくる。俺の動きを予測したうえで撃ってくるので、避けるだけでも精一杯だ。

「……もしかして」

小競り合いこそあれ、大きく均衡が崩れることなくある程度時間が

経ったころ。

アベルさんが、回線を通して俺に語りかけてきた。

「あなた、それしか武器がないのかしら」

「……………」

「わかりやすい顔。あなたが名役者でなければ、凶星のようね」

からかうような笑みを浮かべるアベルさん。

どうやら焦った顔はバツチリ見られてしまったらしい。さすがに、攻めあぐねているにもかかわらず他の武器を使わなければわかってしまうか。

これで、あつちに白式が刀を振ることしかできないことがばれた。彼女が雪片以外の装備を警戒しているうちに、できるだけダメージを与えておきたかったというのに、結果としてはひとつも有効打を撃てていない。

「私はこのまま、距離を保って追い詰めていくだけでいいのかしら」
俺を試すような響きを持った言葉。

こちらが近距離戦しかできないとわかった以上、あちらから近づいてくることはほばないだろう。

彼女の言う通り、遠くからじわじわ攻めて確実に狩りにかかるのが正しい選択なのだから。

だとすれば、俺はどうする？

「ギャンブルするしかないか」

もとより運を味方につけなければ勝てない相手なんだ。賭けに出ることくらいどうってことない。

覚悟を決め、俺は白式のを全開まで上げてレーゲンの背後に回りこむ。

そしてそのまま瞬間加速イグニッション・ブーストを発動、一直線に突っこんだ。

ここまで隠していた、一瞬で相手との距離を詰めるための技。これなら、あるいは。

「やっぱり瞬時加速」

「っ!？」

期待を打ち砕く一言。

俺の不意打ちにすら、彼女は完璧に反応していた。

「その戦闘スタイルなら、当然あると踏んでいたわ」

すでに白式は最高速に達し、両手で雪片をかかげて袈裟切りの体勢に入っている。

瞬時加速の欠点は、方向転換がきかないこと。無理にやろうとすれば操縦者に負荷がかかり、無事ではすまないらしい。

それがわかっていているからこそ、アベルさんは両手を前に突き出した。

絶好のタイミング。A I Cが、来る。

あちらからすれば、今の俺はまさに格好の餌だろう。

「……………?!」

だが、驚愕に目を開いたのは彼女の方だった。

両手で刀を振りかぶっていたはずの俺が、瞬時に右手持ちに切り替え横薙ぎの動作を開始したからだ。

A I Cというのは、特殊なエネルギーの線を飛ばしてそれに当たった対象を停止させる力。

つまりアベルさんの予測を外し、線を避けた攻撃をすればかいくぐることができる。

だが、この緊迫した状況で、一瞬のうちに攻め方を変化させることは相当困難だ。

……………最初から、本命の攻撃が別にあった場合を除いては。

「らあっ!!」

袈裟切りの構えはおとりで、もともとこの一撃につなげるための前動作にすぎない。

右腕の動きが止まらないのを見て、俺はギャンブル——フェイントを成功させたことを悟る。

「くっ……………」

かけ声をあげながらの一振りは、クリーンヒットとまでは行かなかった。

A I Cを外したと理解するやいなや、アベルさんはすぐさま回避のために加速していたのである。混乱することなく適切な行動がとれ

るあたり、さすがだ。

ただ、それでも俺の刀は確かに脇腹付近に当たった。

「よし」

白式には、『零落白夜』というワンオフ・アビリティィが備えつけられている。

自らのシールドエネルギーと引き換えに、エネルギー系の存在をすべて無効化する力を雪片式型に与える。

無効化の対象はシールドエネルギーも例外ではなく、つまり相手I Sの絶対防御を強制発動させることになる。それにより、敵のシールドエネルギーを一気に減らすことができる。

事実、少し離れた場所でたたずむアベルさんの機体は結構なダメージを受けていた。

彼女の表情は、険しい。

とにかく、まだ一発当てただけだ。手の内を知られた以上、ここからはさらに厳しい状況になるはず。

再び気合いを入れ直し、俺は白式を加速させる。

*

「……いつだ？」

いつの間に、一夏はフェイントができるようになっていたのだ？

観客席で試合を見守っていた私は、攻撃が当たったことへの喜びと、理解できないことに出くわした困惑で頭がいっぱいになる。

それは鈴やセシリアも同じらしく、ふたりともなんとも言えない表情をしていた。

「よしっー」

ただひとり、箒だけは純粹に喜びを爆発させ、小さくガッツポーズまで見せている。

「箒。今の攻撃について、何か知っているのか」

「あ、ああ……そうか、お前達には秘密にしていたのだったな」

事情を尋ねると、彼女は私の方を向いてうれしそうに語り始めた。

「ここ1週間、時間をとって一夏と剣道をしていたのだ」
「剣道？」

セシリア、鈴と3人で顔を見合わせる。

「一夏がフェイントの練習に苦勞しているという話を聞いて、少し思うところがあったのだ。昔剣道をしていた時、あいつはそういう駆け引きが上手だったからな」

「そうだったのか？」

「うむ。だから、竹刀を握らせれば多少はその頃の間を思い出せるのではないかと……一夏もそこそこ手ごたえを感じていたようだから、毎日続けたのだが」

「なぜ話してくれなかった」

情報は共有するべきだろう。そう思っただけで聞くと、箒は決まりの悪そうな顔をして謝った。

「すまない。うまくいくかどうかかわからないから、余計なことを教えてラウラを混乱させたくない」と一夏に口止めされていたのだ」

「……なるほど」

そういうことか。まあ、一夏らしいと言えば一夏らしい。

私のことを考えての判断だったのなら、怒ることはしない。

ほんの少しだけ、嫉妬はするが。

「理由もわかったことだし、試合に集中ね」

鈴の言葉が合図となって、私達は再び戦いの場に視線を戻す。

歓声が沸く中、一夏はまたアベルに接近していた。

辛うじて零落白夜の一撃は避けたものの、その動きに余裕は一切感じられない。

「……………」

しばらくの間、飛び回る2機のISを黙って眺める。

「むう」

やはり、妙だ。

「箒。一夏のフェイントは、安定して成功するレベルなのか」

「いや、1週間で取り戻せる感覚にも限界がある。それに、剣道とISでは異なる点も多い。さっきのはたまたまうまくいったのだろう」

「そうか」

きちんと使いこなせるなら、最初から使っているはずだからな。どうにもならなくなった時、土壇場で頼るのが一夏にとつてのフェイントなのだろう。

そのような推測を、私は苦勞することなく立てることができた。

そして、それはアベルにとつても同じはずだ。確かに私より一夏に関する知識は少ないが、代わりに奴は彼と直接戦っている。間近で相対すれば、相手が本当にギリギリのところをやっていることも感じられるだろう。

「なぜ、そこまで乱れている?」

だが、試合を見る限りアベル本来の戦い方は明らかに崩れている。だからこそ互角——いや、一夏が若干押しているような状況になっているのだ。

明らかに様子がおかしい。

どういうわけか、フェイントを過剰なまでに意識していて……

「まさか」

そこまで考えて、私はひとつの可能性に思い至った。

自惚れかもしれないが、絶対にありえないとは言えない、そんな答え。え。

もしこれが正解ならば、1ヶ月前に無理をした152秒は無駄ではなかったということだ。

「私を意識しているのか? アベル……」

私のつぶやきは、当然彼女には届かない。

*

時間が経つにつれ、互いに攻撃を重ねるにつれ。

俺の頭の中で、勝利という2文字がはつきりとした形を持って現れ始めた。

「……はあっ」

集中しすぎて、息継ぎのタイミングがわからなくなってくる。

心を落ち着け、攻撃を当てることに専念する。

あと一撃。あと一撃、零落白夜の光を帯びた雪片を当てることのできれば、俺の勝ちだ。

「……………」

ただ、それも簡単なことじゃない。

俺のフェイントに焦った様子を見せていたアベルさんだが、多少メンタルが乱れようと代表候補生は代表候補生。追いこまれば追いかまれるほど、彼女の表情は気迫を増してきていた。だんだんと焦燥が消えているのが、俺にもわかる。

零落白夜の複数回使用も手伝って、こっちのエネルギーもたいして残っていない。強い一撃をもろに食らえば、それだけで全部吹き飛ばさだろう。

互いにギリギリ。その状況で、俺は意を決して彼女の懐に飛びこもうと動いた。

「……………」

それに反応し、ワイヤーブレードとAICが襲いかかってくる。だが止まらない。これ以上戦いを長引かせれば、アベルさんが完全に立ち直ってしまう。そうなる前に、最後の1撃を必ず当てなければならぬ。

「いけっ……………!!」

直感で進むべきルートを選び、奇跡的にすべてをかわして彼女に肉迫する。

0.1秒でも早く終わらせるため、俺は零落白夜を発動させながら雪片式型を前に突き出そうとする。

向こうの攻撃はなんとか切り抜けた。このままいけば——
ガキン、と。

巨大なりボルバーが回転するような重厚な音が、耳に入った。

強烈な悪寒を感じて視線を動かすと、レールカノンの砲口が完全に俺を捉えていた。

そこで俺は、これが彼女の本命であったことに気づく。

ワイヤーブレードでもAICでもない。近距離では最も使用する

可能性が低いその大砲を、アベルさんはあえて切り札として選択したのだ。

俺の意識の外から、最後の一撃を与えるために。

……だが、もう止まるわけにはいかない。

「うおおおっ!!」

叫ぶ。全力で刀を前へ突き出す。きっと今の俺は、彼女と同じくらい必死の形相をしているのだろう。

なんでもいい。速く、少しでも速く、この剣先が機体に触れればいい。

頼む、届いてくれ……!

「……………」

その時、俺は見た。

零落白夜の白い刀身が、ほんのわずかだけ伸びる光景を。

そしてその長さのぶんだけ、目標への到達時間が縮まって。

「…………おめでとう。織斑一夏」

試合終了を告げるブザーが鳴る。

彼女の言葉によって、俺は自分が勝ったことを理解した。

理解し、実感し、そこで一気に体の力が抜ける。

……やっぱ、勝つっていうのはうれしいな。純粹に。

「カタナが伸びること、隠していたの?」

「え? あ、いや、今のは俺にもよくわからなくて」

「そう。まあ、そんな顔しているわね」

そう言っつて、アベルさんは満足げに微笑んだ。

俺もつられて、笑い返した。

*

その後の試合もなんとか勝利した俺は、1組のみんなにデザートのお祝いを持って帰ることに成功した。

先ほどまでそのフリーパスを使っつての祝勝会（先生方も巻きこんで）が食堂で行われ、称賛やらお礼やらいろんな言葉をいろんな人に

もらった。千冬姉もちよつとうれしそうな顔をしていた。

それが終わって、今は部屋に戻ってラウラとふたりきり。

窓の外を見ると、きれいな月が雲から顔をのぞかせている。

「よくやった。本当に」

「それ、もう何回も聞いたぜ?」

「何度も言うほどよくやったということだ。サポートした身としても、実に達成感がある」

床に座っている俺の頭を、膝立ちになって撫でるラウラ。普段撫でられてばかりなので、今日くらいは私が撫でてやる、とのこと。

口には出さないが、くすぐったくてなかなかいい感触だ。

この位置だと正面向いた時に思いつきり胸が目に入るんだが、これもまた口には出さないでおく。

「これで私も、本当の意味でケリをつけることができた」

「よかったな」

ラウラの助け、そして期待を受けた俺が、運のよさもあれアベルさんに勝つことができた。

それは彼女にとつて、とても大きなことなのだ。

「私は私の道を進む。自信を持ってだ」

「ああ」

ラウラの屈託のない笑みを見ると、俺もうれしくなる。

「あー、ところでき。例のなんでもしてやるって件についてなんだが」
「む……来たか」

笑顔から苦々しい表情へ。俺がエツちな命令をしてやるって宣言したこと、真に受けているらしい。

「い、いいだろう。他ならぬお前の頼みだ。どんなえっちなものでも叶えてやる」

「そつか。じゃあとりあえず保留でいいか」

「ほ、ホリユウか。よくわからんが、それはいったいどのくらいえっちな……保留だと?」

きよとんとした顔で俺を見つめるラウラ。完全に脳内がピンク色になってしまっていたらしい。

「今のところ、そう大きな頼み事は思いつかないんだ。かといって、『抱きしめたい』とかそういうお願いは権利行使するまでもなく聞いてくれるだろうし」

「ん……つまり、貸しにするということか」

「そういうこと」

貸しっていうのは貸したままの状態にしておくのが一番便利だ、なんて言葉を聞いたことがある。

だから、大事にとっておこうというわけだ。

「いいだろう、待っておく。どうぞずっと一緒にいるのだしな」

「……あ、ああ」

「む、どうかしたか」

「いや、なんでもない」

「そうか」

納得したようにうなずいて、ラウラは俺の提案を受け入れた。

とりあえず、なんでもしてくれる権利についての話はこれで一段落だ。

「……ずっと、か」

少し、ドキリとした。

多分、ラウラはそこまで深い意図をもって言ったわけじゃないんだろうけど……ずっと一緒にいるということの意味を、なんとなく真面目に考えてしまった。

今はまだ1年生で、学校のことだけで手一杯という状況だけれど。

いつかはきつと、大事な決断をする日がやってくるんだろうな。

「そうだ。一夏、頭を撫でたついでにマッサージもしてやろう」

「お、いいのか?」

「お前にやったことはなかったからな。姉さん相手に鍛えた腕、見せてやる」

「そりや楽しみだ」

誇らしげに胸を張るラウラを見て、俺は笑う。

……その日が来るまでは、とにかく頑張ろう。

最低限、彼女につき合うだけの男になれるように。

*

「一夏、刀の振りが少し乱れているぞ」

「織斑さん。足元への警戒が手薄になっていきますわ」

「ほら、もつときびきび動きなさい！」

「そんな同時に言われても困るって」

放課後の第2アリーナでは、一夏が箒、セシリア、鈴の3人に指導を受けている。

入学当初は私と一夏のふたりきりだった自主訓練も、いつの間にか大所帯になったものだ。

3人ともなかなか面白い人間なので、別にかまわないのだが。

「それで、なぜお前までここにいる」

「あら、ここはあなた達の貸切ではないのよ？ 私がいっても問題はな
いと思うのだけれど」

ただ、今日はなぜかアベルまで来ていた。

一夏を取り囲む箒達とは異なり、私の隣に立って彼らの練習風景を眺めている。

「少しお話しがしたくて、ね」

くすつと笑いながら、彼女は私の顔をちらりと見る。

私としても、会話を断る理由はない。

「今から私、負け惜しみを言うわ」

「……負け惜しみ？」

「そう、負け惜しみ」

奇妙な前置きをしてから、アベルは静かに語り始める。

「私が彼に負ける要素は、確かにいくつかあった。そのうちのひとつ
が、ラウラ……あなたを意識しすぎたことね」

「やはりそうだったのか」

「ええ。せっかくあなたが勝負を申しこんでくれたのに、あの試合を
終えても私はあなたに勝った気になれなかった」

「14勝13敗でお前の勝ち越しだろう」

「そうね。けど覚えてる？ ドイツにいたころの24戦目から26戦目、あなたの3連勝だったのよ？ 直近の数試合の結果を見ると、やっぱりいろいろと思うことがあるの。かといって、もちろんあなたにこれ以上何かを求めたりはしないわ」

自虐のような笑みを浮かべ、彼女は話を続けていく。

「そういう女々しい部分があったから、彼の動きにあなたの影を見てしまったのね。紛れもない1対1の勝負なのに、私の頭は勝手に1対2にしてしまっていた」

「……………」

「でも」

ひとつ息をついて、アベルはもう一度私の顔を見た。

「そういう要素があったとしても、私は100回戦えば99回勝てる自信があった」

「それは、間違いないだろうな」

アベルの言葉は正しい。

先日一夏が勝てたのは、偶然に偶然が重なり、あらゆる運がすべて彼に味方するくらいの試合展開だったからにすぎない。

「にもかかわらず、織斑一夏は100回のうちの1回を引き当てた。あの大事な局面でね。そういうのって、ただの実力では計り知れないものだと思うの。世間だと『持っている』と言うのだったかしら……とにかく、私が彼について最も評価した部分はそこね」

なるほど。確かに一理ある意見かもしれない。

成長速度の速さも十分褒めるに値するが、一夏の最も優れているところは、もしかするとそういつたところにあるのだろうか。

「まとめると、彼は化けるかもしれないってこと。以上、負け惜しみ終了」

「……………今のを、負け惜しみと言うのか？」

「あら？ そんな感じの内容が混ざっていなかったかしら」

「そんな晴れやかな顔で負け惜しみを言う人間がいるとは思えんが」

「ふふっ、それもそうね」

にこやかな表情で答えるアベル。

彼女にとっても、一夏との戦いはいかしろの影響を与えるものだったのかもしれない。

それがよい影響なら、私としても喜ばしい。

「……んー」

「むっ？ どうした」

あごに手を当てて小さな声でうなるアベル。何を考えているのだろうか。

そう思っていると、やがて彼女はうなずいてからこう言った。

「私も狙ってみようかしら。一夏のこと」

「……は？」

「今まで彼氏とか真剣に考えていなかったけれど、彼ならいいかもしれないわね」

うんうんとうなずきながらつぶやく彼女。私の脳内では今の発言が延々とリピートされていた。

「ま、待て。冗談だろう？」

「ええ、冗談だけれど」

「んなっ……！」

けろりと答えるアベル。対する私は体が熱い。

「き、貴様言っていることと悪いことがあるぞ！」

「ほっとしたかしら？ 堅物だったあなたが、からかい甲斐のある子になってくれてうれしいわ」

こ、この女……！ 私がどれほど心臓を縮み上がらせたかと思っているのだ。

「心配しなくても、恋愛感情はないわ。興味を抱いたのは事実だけだ」

「……なに？」

「見込みがありそうだから、今のうちに仲良くして手なずけておくのもありかもしれないわね」

不穏な言葉と意地の悪そうな笑みを残して、アベルは一夏達のもとへ向かっていく。

「ま、待てー！」

どこまでが本気なのかがさっぱりわからない。わからないからこそ、嫌に不安をかき立てられる。

……だから私は、思い切り宣言してやることにした。

アベルに対してだけではない。向こうにいる箒や鈴に対してもだ。

すう、と息を吸いこみ、出せる限りの大声を彼女達に向けて張り上げた。

「夏は私のものだ！ 誰にも渡さんからなっ！」

あふたー

初デート（前編）

「んー……」

6月頭の火曜日の夜。寮の自室でのんびり漫画を読みながら、俺はあることを考えていた。

「どうかした？ 急にうなり出して」

体育座りで同じく漫画をパラパラめくっていた鈴が、俺の方に視線を向ける。

時々部屋にやって来て、人の漫画をその場で読み始めるのは、我が幼なじみの習性のひとつ。

ラウラは外に出ているので、現在ふたりきりという状況なのだが……小学校の頃から何度も経験しているので、今さら焦ったりとかはない。

「いや、週末暇だなーと思ってさ。先週末まではクラス対抗戦のための訓練してたけど、それも終わったし」

「暇ねえ。それなら愛しの彼女とデートにでも行けばいいんじゃない？ たまには一緒に出かけて楽しませてあげないと、好感度下がっちゃうかもしれないわよ」

「……」

ニヤニヤ顔で提案する鈴に対し、俺は無言で思考を働かせる。

デート……うーん、デートか。

「ちよつと、なによその反応」

「ああ。よく考えたら、俺ってラウラとデートらしいデートしたことないなって」

「……は？」

「休日にふたりきりで遊びに出かけるとか、一度もなかった。改めて誘うとなると、ちよつと恥ずかし——」

「はあああっ!？」

「おわっ」

漫画を床に置いて俺に詰め寄る鈴。目がまん丸になっていて、驚いているのがよくわかる。

「嘘でしょ!?! いくらアンタがそういうこと疎くても、1回デートに誘うくらいはしてるんじゃないの?」

「面目ない」

「ないの? 遊園地とか映画館とか、もう最悪近所の公園でもいいからー」

「……………」

「か、買い物は……?」

「食材の買い出しなら」

「ちがーうー!! それは違う!」

だよなあ。

鈴に思い切り怒鳴られながら、俺は今までのことを思い出してうつむく。

「呆れた。誰かと付き合ったことないあたしが言うのもなんだけど、それは彼氏としてどうなのよ」

「俺もあいつも、積極的に外に出たがるタイプじゃないからなー。一緒の時間を過ごしたいってだけなら、家でいつでもできたし。のんびりソファアーに座ってテレビ見て」

「腹パン!」

「うわ、なんだ急に!」

握り拳を作って息を吹きかけ始めたので、思わず身構える。あっちもポーズだけだったらしく、パンチを撃ちこむことはしなかった。

「悪かったわね。突然のろけ話が始まったからつい」

「え、今のがのろけになるのか?」

「目潰し!」

「だから怖いって」

右手の形がチョコキになった。じゃん拳でもするつもりか、こいつは。

「まあいいわ。とにかく、今週末は絶対デートに行きなさい。ラウラがかわいそうだわ」

「ああ、そのつもりだ」

付き合い始めて半年以上経っているのにデート未経験はさすがにまずい。

あまり世間一般の基準というものを気にするつもりはないけれど、それにも限度があるというものだ。

それに改めて考えてみると、ラウラと一緒に普段行かないような場所に行ってみたいという気持ちは確かにある。

「しかし、どういうプランを立てればいいのか悩むな」

「ラウラの方は、アンタと付き合う前に誰かとデートとかしたことないの?」

「直接聞いたわけじゃないが、多分経験ゼロだと思う」

「なら、あつちに考えてもらうのも難しいわね」

「せっかくの初デートだし、失敗したくはないな」

だが、いかんせん俺もラウラも色恋沙汰に疎い。華麗なデートプランを用意するとかは絶対できないタイプだ。

頭の中だけで考えるというのも難しい。実際に試してみないと見えてこない部分だってあるだろうし。

「演習とかできればいいんだけどな……」

デート未経験というのも、なかなか大きいハンデだ。

「……ね、ねえ一夏」

「ん、どうした?」

悩んでいると、鈴がおずおずと探りを入れるように声をかけてくる。

何かを躊躇うような上目遣い。先ほどまでの強気な態度とは全然違う。

「ちよこつと提案なんだけどね? 実践が足りないっていうのなら、

あたしが予行演習として」

ガチャリ。

「ただいま」

「ひうつ!?!」

「? 何をそんなに驚いているのだ」

鈴が何かを言いかけたタイミングで、ラウラが部屋に戻ってきた。と同時に、飛びあがるように俺から距離をとるセカンド幼なじみ。「べ、別になんでもないわよ？　ちよつとだけおいしい思いましたって許されるよねーとか全然考えてないから？」

「……様子が変だな。妙に一夏と距離が近かったようだし、いったい何をしていた」

ずっとラウラの目が細められる。腕を組んだ状態で彼女に睨まれると、小柄ながら迫力満点であることを俺は知っている。

「なにつてアレよ、少し一夏に恋愛のなんたるかを教えてあげてただけで」

「一夏、本当か」

「嘘じゃないな。俺とお前が一度もデートしたことないって言ったら、そういう流れになった」

「デート？」

ラウラの表情から剣呑さが消える。なぜか目が泳ぎまくっていた鈴も、それを見てほつと胸をなでおろしていた。

「なるほど。そっちも私達と同じ話をしていたのね」

ラウラの背後から声が聞こえたかと思うと、開いたままのドアを通って女生徒がひとり部屋に入ってくる。

「エレナ」

「こんばんは。一夏に鈴」

微笑みながら俺達ふたりに挨拶する彼女。

エレナ・アベル。先月末のクラス対抗戦で俺が戦った相手で、ラウラの元同僚。

あの試合以降俺達の自主訓練に顔を出すようになり、今では彼女とは友達と言える仲だと思う。最近下の名前で呼び合うようになったし。

「同じ話っていうと……」

「あなた達がデートをしたことがないという話ね。さっきまで、私の部屋でこの子に事情を聞いていたの」

「私は別に問題ないと思ったのだが、こいつがくどくどうるさくてな」

互いの顔を見やりながら、ラウラとエレナはこれまでの経緯を説明する。おおむねこちらと同じ流れだったようだ。

「エレナもやっぴりまずいと思うわよね」

「原因はわからなくもないのだけれどね。このふたり、カップルとしては少々特殊な部類に入るから」

「特殊？」

とりあえず、鈴とエレナの会話を黙って聞くことにする。ふたりが意見を交わしている間に、ラウラはちよこんと俺の隣に腰を下ろしていた。

「一般的なカップルにとって、デートはお互いのことを知り、関係を深めるためのいい機会なのよ。デートを重ねて仲良くなり、そのうち互いの自宅にお邪魔したり、身体的スキンシップを図るようになってくる。そうやって関係を進展させて、やがては同棲までいく場合もある」

「そっか。一夏とラウラの場合、順番が逆なんだ」

「過程を思い切りすつ飛ばして同居から始まっているものね。まあ、とはいえ？ 恋人をデートに誘えない男の子はちよつとかっこ悪いかもしれないけれど」

「うぐ……」

俺の顔を見てニヤリと笑うエレナ。冗談交じりで軽い調子ではあるものの、責められていることに違いはない。

「反省してます」

「私に向かって反省されても困るわ。今言葉をかけるべき相手は、あなたの隣にいるでしょう？」

……それもそうだな。

一度うなずいてから、体ごと右を向いた。

「ラウラ。次の日曜日、暇か？」

「一夏と部屋でのんびり過ごす予定が入っている」

「そうか。じゃあそれ、外で一緒に過ごす予定に変更できないか？」

「かまわないが……私は別に、お前に無理をさせてまでデートをしてほしいわけではないのだぞ」

「無理なんてしてない。俺はラウラとデートしたいと思ってるんだ」
「ならいいのだが」

頬を緩ませてはいるものの、ラウラの返事は控えめだ。おそらく、俺が鈴とエレナの発言に影響されて動いているのでは、と感じているのだろう。

決して場の雰囲気の流れされて誘ったわけではないということはおわかってほしいんだけど……。

「あら？ ラウラはあまり乗り気ではないようね。それなら一夏、私と行きましようか」

「へ？」

「私も異性とデートしたことはないの。お互いの初めてを、週末に消費してしましましょう」

突然俺をデートに誘うエレナ。鈴もラウラも目を丸くして固まっている。

「いや、なんか流れおかしくないか」

「そうかしら？ 別に恋人以外とお出かけしてはいけないなんて法律はないのだし、いいじゃない」

すすっと座ったまま近づいてくる彼女は、じーっと俺の目を見つめている。ひとつ聞きたいのは、なぜ無駄に体をなまめかしくくねらせているのか。思わず視線を逸らしてしまう。

「ねえ一夏——」

「だ、駄目だ駄目だ！ 一夏は駄目だ！」

うがーつと唸りながら、フリーズの解けたラウラが俺とエレナの間を体を割り込ませた。

「一夏、日曜日は私とデートだ！ わかったな！」

「お、おう。というか誘ったのは俺なんだが」

「絶対だ！ 絶対だぞ！」

「あらあら。これは私のつけ入る隙はなさそうね」

必死の形相で俺の両手を握るラウラの姿を見て、エレナはニヤニヤと笑っていた。

その反応を見るに、さっきのはラウラを焚き付けるための冗談だっ

たのだろう。

出会った頃から片鱗は見せていたけれど、多分彼女は人をからかうのが好きなタイプの人種である。

*

というわけで、あれからデートの仕方についていろいろ勉強した。最初から事情を知っている鈴やエレナ、他にも中学時代の男友達からもアドバイスを受けた結果、付け焼刃ではあるもののそこその知識がついた。

「しかし、わざわざ別々に寮を出る必要が本当にあるのか」

待ち合わせ中のドキドキもデートの醍醐味のひとつだとかなんとか言われたのだが、普通に揃って出かけることに問題はない気がする。

腕時計を確認すると午前9時23分。先に学園を出た俺は、すでに集合場所の駅前広場に到着している。

待ち合わせ時刻まであと7分。ラウラが何分遅れで出発したのかは知らないが、ぼちぼち現れてもおかしくはない。

「ま、待たせたな。一夏」

そんな予感が見事的中したようで、背後から聞きなれた声が聞こえてきた。

ちよつとどもり気味なあたり、若干緊張しているのだろうか。だとしたら俺と同じだ。

「いや、そんなに待ってないぞ」

ものの15分くらいだ、なんてことを考えながら、俺は彼女の方へ振り向く。

……そしてそのまま、思わず言葉を失ってしまった。

「その、どうだ……似合うか？」

ラウラの私服は、基本的に装飾が少なく、動きやすい類のものがほとんどだ。

本人も一応オシャレに気を遣ってはいるようだが、本当に最低限の

レベルでの話である。

「……どうって、これは」

ところが今はどうだろう。

フリフリがたくさんついた黒のワンピース。胸のあたりには大きな赤いリボン。

ニーソックスの下も、よく履いているスニーカーではなく、新品の黒い靴。

髪型はいつもと違うツインテールで、これまた赤いリボンが銀髪をふたつくくりになっている。

つまるところ、普段の彼女とはまるつきり異なる雰囲気を纏っていた。

「や、やはり駄目か？ すまない、エレナが軽めのゴスロリとやらを試してみろとうるさいから負けてしまつて」

「……いや。すごく似合ってる」

「だからその……え？」

「なんていうか、絵本のキャラがそのまま出てきたみたいだな。とにかく、めちやくちやいいと思う」

素直な賛美の言葉しか出てこない。

去年の文化祭で、純白のドレスに身を包んだ彼女もきれいだったけど……今日のこれは、反則級の可愛らしさを引き出している。

「そ、そうか！ よかった。普段着なれない服で心配だったが、お前に喜んでもらえてうれしいぞ」

はにかみ気味に笑うラウラ。俺の好感触にほっとしているのが伝わってくる。

「それ、いつ買ったんだ？」

「買ってはいない。なぜかエレナが私のサイズに合ったものを渡してきた」

「なんだそれ」

「私にもよくわからん。なんでも、部隊にこういう服をすぐ用意できる人間がいるらしいが」

エレナもエレナで、結構謎多き人物だよな。得体が知れない部分が

あるというか。

今日に関しては、とりあえず感謝だけど。

「じゃあ、そろそろ移動するか」

「そうだな」

いざ、出陣。

目的地はここから徒歩10分のところにあるテーマパーク。開園時間にも余裕で間に合うはずだ。

「ん」

「ん？ あ、そうだな」

差し出されたラウラの右手を優しく握り、歩き出す。

緊張もあるが、当然楽しみという気持ちの方が大きい。そんな初デートの始まりだった。

初デート（後編）

鈴やエレナといった（一応）頼りにしている友人達のアドバイスを参考にして、初デートの舞台には遊園地をチョイスした。とりあえず、数多くのアトラクションで場持ちをきかせることができるからである。

王道中の王道な選択ではあるけれど、王道は人気があるからこそ王道なのだ。ゆえに結果がいい方向に転がる可能性は高いはず。

もちろん、目一杯楽しもうという俺達の間があることが前提になるわけだが。

「ほう。予想よりも大きなパークだな」

「この辺じゃ一番でかい遊園地だからな。最近リニューアルして、また土地が広くなったらしい」

「一夏は何度か来たことがあると言っていたな」

「ああ。中学の時、友達と遊んだ」

初めて来た時は鈴や弾達と一緒にだったか。全員無駄にテンションをあげて、馬鹿みたいにはしゃいでいた記憶がある。

「とりあえずチケット買ってくるから、ここで待っていてくれ」

開園40分前だけど、窓口にはすでに人だかりができています。そこに並んで10分ほど待ち、無事2人分のチケットを購入。少し離れたところで携帯をいじっていたラウラのもとへ戻る。

「ただいま。チケット買ってきたぞ」

「おかえり。いくらだった？」

「いや、俺がおごるからラウラは出さなくていいって」

財布を用意しようとするラウラを止めると、不思議そうな表情でこつちを見てきた。

「なぜだ？ 入場料は安くはないのだから、2人で出すのが筋だと思うが。それにお前よりも私の方が懐事情はいいはずだ」

「そういう問題じゃなくてさ。デート代は男が持つものなんだよ」

そのくらいのルールはさすがの俺でも知っている。

「ああ、なるほど。そういうことか」

納得したようにうなづくラウラ。

しかし、なぜか彼女はそのまま財布をバッグから取り出し、右手で軽く掲げた。顔には悪戯っぽい笑みまで浮かべている。

「だがそれは、男が女にいいところを見せるための手段だろう？　なら私には無意味だ。一夏のいいところなんて、今さら改めて確認するまでもない」

こ、こいつ……。

相変わらず、言われたこつちが恥ずかしくなるようなセリフを平気で口にしてくるから困る。

そりゃあ、こんなこと言ってくれるのはうれしいに決まってるんだけど。

「どうした？　惚れ直したか」

俺が照れていることに気づいたのか、ニヤニヤと顔を近づけてくる。

最近ちよくちよく俺をからかう回数が増えてきたのは、周囲の人間の影響なのかそうでないのか。

しかし、いつまでもこちらが劣勢のままでは悔しいので、俺も努めて平静を装って返事をする。

「おう。最高の彼女だ」

ちよつぴり芝居がかった調子でそう言うと、ラウラは一瞬面食らったかのように動きを止めた。

「ふん。よくわかっていないか」

けれどすぐに表情を緩め、笑みを崩さないまま言葉を返してきた。でも頬が少し赤くなっていたし声も微妙に震えていたので、意趣返しは一応成功ということにしておこう。

*

ラウラは好きな物は最初に味わうタイプなので、入園初っ端から目玉アトラクションのジェットコースターに乗ることになった。

最高速度150キロ、高低差100メートル、360度回転付きの

日本有数の絶叫コースター。それに乗った結果。

「うえ……うつぶ。ああ、やば」

「大丈夫か、一夏？ ずいぶんグロッキーに見えるが」

情けないことに、俺は完全にやられてしまっていた。コースターから降りるなり、近くにあったベンチにどかっとなり込んで座り込む始末である。

一方隣に座ったラウラはピンピンしており、おそらく死相が浮かんでいるであろう俺の顔をじーっと覗きこんでいる。

「あんなにビュンビュン飛ばしてぐるぐる回って……さすがに無理だ」

「何を言っている。普段ISであれ以上の動きを経験しているだろうに」

「ISは科学の力でGとか軽減されてるだろう」

「ふむ。確かに、あのスリリングな感じはここでしか味わえんな。もう一度乗ってみたいものだ」

「なら行ってこい。俺はしばらくここで休んでるから」

「それはありがたい話だが、ひとりで大丈夫なのか？」

「小学生じゃないんだ。休憩くらいひとりで平気だよ」

俺がそう言うと、ラウラは足取り軽く行列に並びに向かった。

*

次に向かったのは、ジェットコースターから比較的近い位置にあるホラーハウスだった。

「っ!? ふんっ——」

「待て待て！ お化けに回し蹴り食らわせようとするな！」

「いや、暗闇で背後をとられると癖で反撃してしまうのだ」

真顔で言われても若干困る発言である。ラウラが元軍人だつてことを今さら再認識させられた。

とはいえ、お化けを演じるスタッフさんに怪我を負わせるわけにもいかない。

「仕方ないか」

ラウラの両腕をしっかりと握る。ちよつと歩きにくいけど、このくらの拘束がないと手綱を握れそうもないからな。

「……………」

「ん、どうした？ 急に黙りこんで」

「…………距離が近い。視界がきかないからか、お前の息遣いとかがいつもよりはつきり感じられる」

「っ!？」

現在の俺達の立ち位置を確認する。ラウラが前に立ち、その真後ろから俺が彼女の腕をつかんでいる形で、たまに体が触れあうくらいの近さだった。

それを意識した途端、俺も急にラウラの匂いとかが鮮明に感じられるような気がしてきた。

「ほ、ほら。先進むぞ」

「う、うむ。了解した」

互いに気恥ずかしさを感じながら、密着電車ごっこみたいな真似を続けて結局最後まで進んでしまった。

正気、途中からお化けの姿とかまったく見えてなかった。

*

その後もアトラクションを楽しみ、気づけば昼ご飯にちょうどいい時間帯になっていた。

「先ほどの海賊船の冒険はよかったな。映像が本物と見紛うほどだった」

「ああいう船に乗って進む系のアトラクションは俺も好きだ」

フリースペースの空いているテーブルに腰を下ろし、俺達は昼食の準備に取りかかる。

とはいっても、バッグから弁当箱2つとその他諸々を取り出すだけだが。

「IS学園に入って以降、なかなかお前に料理を振る舞う機会がなかったからな。今日は奮発したぞ」

ニコニコとうれしそうに語る彼女の顔を見れば、弁当の中身にも期待が持てるというものだ。

そして実際、弁当箱の蓋を開けた瞬間、俺は思わずつばを飲み込んでいた。

「おおー！」

海苔が巻かれた三角おにぎり。おそらく中におかかとか入っているのだろう。

形の整っただし巻き卵にアスパラベーコン。さらに何かのタレらしきものがしみ込んでいる鶏のからあげ。弁当箱の隅の方にはポテトサラダも鎮座している。

「温かいコーンスープも用意してきたから、たくさん飲め」

テーブルの上の魔法瓶を指すラウラ。

……まさしく、俺の好物ばかりを集めた至高の弁当だった。

「俺の好きな物、ちゃんと覚えてるんだな」

「ふふ、当然だ。私を誰だと思っている」

満足げに笑う俺の恋人。俺の胃袋が掌握される日もそう遠くないのかもしれない。

「じゃあ早速、いただきます」

「いただきます」

空腹だったのも手伝い、自分でも驚くくらいの勢いで箸が進む。料理の味も、見た目通りにとってもおいしい。

そんな俺の反応を、ラウラは微笑ましげに見つめている。

「本当に料理うまくなったなあ。包丁の使い方が危なっかしかつた頃が懐かしいくらいだ」

「あれから1年ほど経っているからな。上達もするさ」

「最初は千冬姉と同レベルだったからな」

「……思うのだが、なぜ姉さんの料理の腕はいつまで経っても変わらないのだ？」

「人には向き不向きがあるってことだろ」

本人もすでに諦めて台所に立たないようになっちゃってるし、あれは一生改善されないままになりそうだ。

「俺も久しぶりに料理しようかな。ラウラに抜かれるのはなんか悔しいし」

「もう抜いているかもしれないぞ?」

「まあ、一部分野では負けてるだろうな。でも師匠としては、そう簡単に完全勝利されるわけにもいかないだろう?」

「そういうことなら、今度勝負でもするか。審査員は……いつもの面子でいいだろう」

他愛のない会話を続けながら、楽しい昼食の時間は過ぎていった。

*

午後の時間も、自由にあちこち回って遊園地を堪能した。

そして、そろそろ閉園時間が近づいてきた夕暮れ時。

「見ろ一夏。ホラーハウスがあんなに小さく見える」

「本当だ」

これも定番中の定番だが、最後は大観覧車に乗って景色を楽しむことになった。

同時に、2人きりでゆっくりと今日一日を振り返る。

「しかし、あのウサギにはしてやられたなあ」

「まったく。悪意はなかったのだろうが、あんなことになるとはな」

苦笑いを浮かべるラウラと一緒に、昼間の出来事を思い出す。

パークの中心にある大きな城の近くを歩いていた俺達は、そこでマスコットキャラであるピンクのウサギ（名前はウサ太だっただろうか）の着ぐるみが立っているのを見つけた。

意外と可愛いもの好きであるラウラは明らかに興味津々だったが、ウサ太の周りには子供達が集まっていたので最初は遠慮しようとしていた。

そこで俺は、そんなこと気にするなよと彼女の手を引いてウサ太のところまで近づいた。

ちよつと順番待ちした後、ラウラは顔をほころばせながらウサ太と握手をしたのだが……その際、彼から白いウサミミを手渡されたの

だ。

ウサ太は言葉をしゃべれないのでいまいち意図をつかみきれなかったのだが、とりあえずもらい物なのでラウラはそれを頭に装着した。

めちやくちや似合っていた。

銀髪にゴスロリ、そこにウサミミを加えた結果、彼女は完全に絵本の中から出てきたキャラクターそのものになっていた。

そしてそのあまりの親和性の高さに、彼女はウサギのコスプレをした遊園地スタッフだと子供達に勘違いされてしまったのである。

わらわらと集まってくる小さな子相手に事情を説明するのに、ラウラも俺も結構苦労したのだった。

「マスコットの隣にあんな子がいたら、子供が誤解しちまうのも無理なかったのかもしれないな」

「そんなに似合っていたのか」

「おう。可愛かったぞ」

「そうか。そこまで言うのなら、今度2人だけの時にもう一度つけることにしよう」

思わぬアクシデントではあったものの、ウサ太と握手できたこととウサミミをもらえたこと自体は収穫だったようだ。

「……しかし、こうして上から見るとここは本当に広いな。まだまだ行ってみたい場所がたくさん残っている」

外を眺めるラウラの顔つきは、少しだけ残念そうだった。もっといろいろ回りたいかったということだろう。でも時間は有限で、もう閉園だから仕方ない。

でも、仕方なくても別にいい。

「これから何度だって来られるんだ。その時また回ればいい」
「一夏……」

「俺としては、デートに誘う口実ができて楽なくらいだ」

頬をかきながらそう言うと、ラウラはぶつと嘔き出した。

「ポジティブだな。お前は」

「後ろ向きよりはいいだろう？」

「ああ、まったくだ。……エレナに寄せられたのは正解だった。今日は本当に楽しかった」

窓から射し込む夕陽が、彼女の銀色の髪を輝かせる。

そんな時に見せられた満面の笑みは、なんだか美しいとさえ思えるものだった。

「俺もだ。すごく楽しかった」

「そうか。では最後に、初デートの記念を残すことにしよう」

「えっ？」

腰を浮かしたラウラが、ゆっくりと顔を近づけてくる……唇を突き出しながら。

「お、おい。さすがに外でやるのは」

「観覧車の頂上だぞ？ いったい誰が見ているというのだ。覚悟を決めろ」

「う、うおう……」

なんとというか、あれだ。

女尊男卑だのなんだの詳しい事情は知らないけれど、最近は実際女の子が強くなってるのかもしれない。

少なくとも、俺の彼女は俺よりもずっと男らしいような気がする。

……ただ、こうやって強引に迫られるのも悪くはない。

彼女の温もりを感じながら、俺はそんなことを思うのだった。